



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北大構内の遺跡 32
Author(s)	守屋, 豊人//編; 許, 開軒//編
Issue Date	2026-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99419
Type	other
File Information	campus_site_32.pdf



北大構内の遺跡

32

令和6年度調査報告

第1部

K 39 遺跡中央キャンパス大学病院地区，他

第2部

令和6年度年次事業報告

第3部

第二次中期計画期間における計画調査の成果

北海道大学
埋蔵文化財調査センター

令和8年3月

北大構内の遺跡

32

例 言

- 1 本書の第1部は、北海道大学構内において令和6（2024）年度に実施した埋蔵文化財調査の成果をまとめたもの、第2部は、令和6（2024）年度に実施した事業の年報である。第3部では、令和6年度までの5年間で実施した「第二次中期計画期間における計画調査」の成果を収録した。
- 2 調査は北海道大学埋蔵文化財調査センター運営委員会、調査専門部会の指導のもと、北海道大学埋蔵文化財調査センターが中心となって実施した。令和6年度の埋蔵文化財調査センター運営委員会・調査専門部会・埋蔵文化財調査センター員は以下の通りである（所属・職名は令和6年度のもの）。
【埋蔵文化財調査センター運営委員会】
高瀬 克範 委員長（大学院文学研究院 教授、埋蔵文化財調査センター長）
菅原 修孝 委員（理事）
國木田 大 委員（大学院文学研究院 准教授）
山田 敏弘 委員（大学院理学研究院 教授）
磯部 公一 委員（大学院工学研究院 准教授）
佐野 雄三 委員（大学院農学研究院 教授）
山本 正伸 委員（大学院地球環境科学研究院 教授）
江田 真毅 委員（総合博物館 教授）
【埋蔵文化財調査センター運営委員会調査専門部会】
高瀬 克範 委員長（大学院文学研究院 教授、埋蔵文化財調査センター長）
國木田 大 委員（大学院文学研究院 准教授）
山田 敏弘 委員（大学院理学研究院 教授）
磯部 公一 委員（大学院工学研究院 准教授）
佐野 雄三 委員（大学院農学研究院 教授）
山本 正伸 委員（大学院地球環境科学研究院 教授）
江田 真毅 委員（総合博物館 教授）
【埋蔵文化財調査センター員】
高倉 純
守屋 豊人
- 3 本書の編集は守屋豊人・許 開軒がおこなった。執筆分担は文末に明示した。
- 4 整理作業に関しては、以下の人々が従事した。
金山理砂、許 開軒、駒井尊子、名取千春、守屋豊人
- 5 調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる（順不同・敬称略）。札幌市埋蔵文化財センター、北海道教育委員会
- 6 出土遺物・調査記録は、北海道大学埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。

凡 例

- 1 方位は真北に統一している.
- 2 緯度・経度は, 世界測地系に統一している.
- 3 図面で使用したシンボル等の凡例は図1に示した.
- 4 土層観察の際の色相, 土色は, 『新版標準土色帖』(小山・竹原 1996)を用いた.



図1 図面記述凡例図

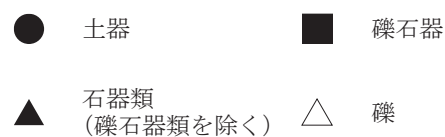


図2 遺物記号凡例図

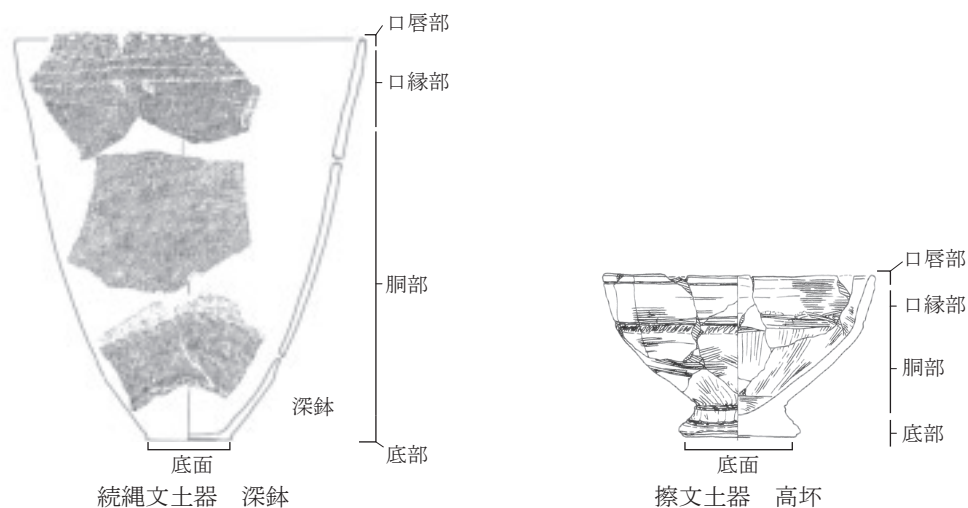


図3 器種ごとの部位名称

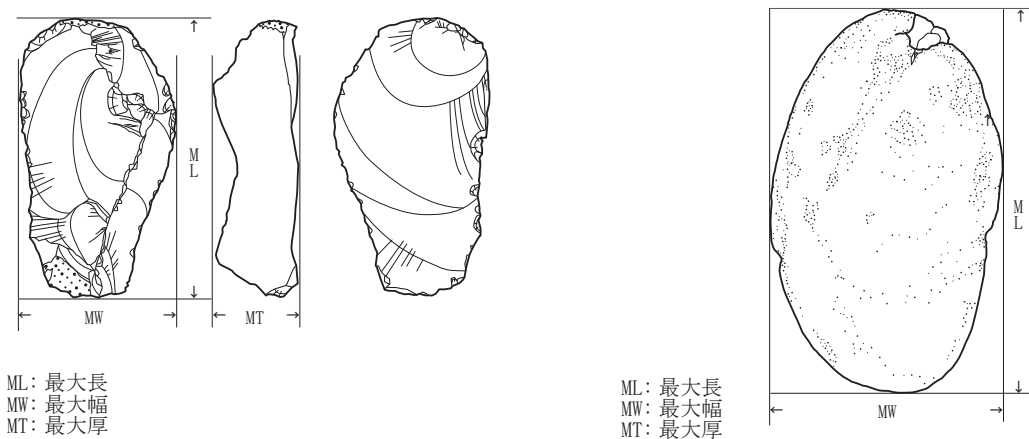


図4 石器及び礫の計測位置図

《目次》

例言	1
凡例	2
目次	3

《本文目次》

第1部 調査報告	5
第I章 北大構内の遺跡と調査の概要	6
I-1. 地理的環境と遺跡の立地	6
I-2. 2024年度の調査概要	9
第II章 調査の成果	11
II-1. K 39 遺跡中央キャンパス大学病院地区の 計画調査	11
1. 調査の目的	11
2. 調査の方法	12
3. 層序と古地形	12
4. まとめ	13
第III章 確認調査・立会調査の成果	18
III-1. 確認調査・立会調査で確認された層序	18
III-2. 2024年度の確認調査・立会調査の結果	22
第2部 令和6年度年次事業報告	27
2-1. 調査活動	28
2-2. 教育普及活動	28
2-3. 統計・資料	31
第3部 第二次中期計画期間における計画調査 の成果	35
3-1. 計画調査の目的と第二次中期計画期間	36
3-2. 基盤情報整備の追記	36
3-3. 調査対象の地区と調査方法	39
3-4. 調査成果	39
3-5. 第二次中期計画期間における計画調査の成 果と課題	59

引用文献	60
------	----

《図目次》

図1 図面記述凡例図	2
図2 遺物記号凡例図	2
図3 器種ごとの部位名称	2
図4 石器及び礫の計測位置図	2
図5 北大構内の遺跡と2024年度調査実施地点	7
図6 グリッド呼称図	10
図7 大学構内グリッド配置図（1マス100m）	10
図8 中央キャンパス大学病院地区（北西側）と周辺の地点	11
図9 中央キャンパス大学病院地区（北西側）セクション対比 図	13
図10 歯学部石碑移設他掘削工事、未来創造棟新営工事調査 坑位置図	18
図11 野球場Aバックネット改修整備工事調査坑位置図	19
図12 北大構内確認調査セクション図	20
図13 未来創造棟新営工事予定地出土土器の拓影図及び石器 の実測図	23
図14 北大札幌キャンパス内のゾーン区分	29
図15 北海道大学札幌キャンパス内における埋蔵文化財調査 の位置	37
図16 北海道大学札幌キャンパス内埋没河道マップ	40
図17 計画調査位置とゾーン区分	41
図18 北キャンパス創成科学研究棟東地区と周辺の調査地点	42
図19 中央キャンパス大学病院地区と周辺の調査地点	43
図20 北キャンパス創成科学研究棟東地区の調査坑の位置	44
図21 北キャンパス創成科学研究棟東地区セクション対比図	45
図22 中央キャンパス大学病院地区（第1次）の調査坑の位置	48

図23	中央キャンパス大学病院地区（第1次）セクション対比図	48
図24	中央キャンパス大学病院地区（第2次：北東側）の調査坑の位置	51
図25	中央キャンパス大学病院地区（第2次：北東側）セクション対比図	51
図26	中央キャンパス大学病院地区（第3次：南西側）の調査坑の位置	53
図27	中央キャンパス大学病院地区（第3次：南西側）セクション対比図	54
図28	中央キャンパス大学病院地区（第4次：北西側）の調査坑の位置	57
図29	中央キャンパス大学病院地区（第4次：北西側）セクション対比図	57

《表目次》

表1	2024年度実施調査一覧	9
表2	中央キャンパス大学病院地区（北西側）の土層観察表	14
表3	北大構内確認調査の土層観察表(1)	21
表4	北大構内確認調査の土層観察表(2)	22
表5	未来創造棟新営工事予定地出土土器の観察表	23
表6	未来創造棟新営工事予定地出土石器の観察表	23
表7	常設展示資料一覧表	28
表8	月別開館日数及び入館者数	31
表9	受領刊行物一覧表(1)	32
表10	受領刊行物一覧表(2)	33
表11	受領刊行物一覧表(3)	34
表12	北キャンパス創成科学研究棟東地区の土層観察表	46
表13	中央キャンパス大学病院地区（第1次）の土層観察表	49
表14	中央キャンパス大学病院地区（第2次：北東側）の土層観察表	52
表15	中央キャンパス大学病院地区（第3次：南西側）の土層観察表	55
表16	中央キャンパス大学病院地区（第4次：北西側）の土層観察表	58

《写真目次》

写真1	中央キャンパス大学病院地区（北西側）の調査(1)	15
写真2	中央キャンパス大学病院地区（北西側）の調査(2)	16
写真3	中央キャンパス大学病院地区（北西側）の調査(3)	17
写真4	未来創造棟新営工事予定地出土遺物写真	24
写真5	2024年度確認調査の状況(1)	25
写真6	2024年度確認調査の状況(2)	26
写真7	第19回企画展の様子	28
写真8	第23回遺跡トレイルウォークの様子	30
写真9	第14回調査成果報告会の様子	30

第 1 部 調査報告

第 I 章 北大構内の遺跡と調査の概要

I-1 地理的環境と遺跡の立地

I-1 では、北大構内の遺跡を理解する上で重視している地形的環境などの概要を、再度、提示する（小杉編 2002, 小杉他編 2021, 高倉他編 2025）。その内容は、以下のとおりである。

北海道大学の札幌キャンパスは、札幌市域の北部にある。札幌市域の地形は、第一に新第三紀から第四紀初頭に形成された北西部から南西部にかけての山地、第二に支笏火砕流堆積物からなる東部の丘陵や台地、第三に後期更新世から完新世中頃にかけて、豊平川や発寒川によって形成された扇状地や河岸段丘、第四に北部の沖積低地に大きく分けられる。

北大札幌キャンパスは、豊平川によって形成された豊平川扇状地から沖積低地への移行区域にある。平平面と札幌面に分かれる豊平川扇状地において、北大札幌キャンパスの南側はおよそ 3500 年前頃に形成されたとみられる（大丸 1989）札幌面の末端に位置する。キャンパス南側の人文・社会科学総合教育研究棟地点（小杉他編 2004・2005）では、標高 10.5 m 前後から札幌面を形成したと考えられる扇状地の堆積物が確認されている。一方、キャンパスの北側では、低温科学研究所周辺で掘削されたボーリング・コアのデータをみても、札幌面の堆積物は確認されていない（嵯峨山他 2007）。続縄文文化あるいはそれ以前に相当する段階に関しては、地形面の発達や時期ごとの堆積環境において、キャンパスの南側と北側には違いがあった可能性に注意しなければならない。

扇状地末端には湧水地点がかつては多くみられた。北大札幌キャンパスの南側に位置する植物園や清華亭、知事公館周辺にも湧水地点があった。こうした湧水地点からの流水を集めて形成された河川が、構内を南から北へむけていくつかに蛇行しながら流れていた。サクシュコトニ川、サクシュコトニ川の支流、セロンベツ川として区別し、知られている河川がそうしたものである。

それらの河川位置に関しては、古地図、等高線図、航空写真から理解できるほか、調査の過程で確認した埋没

河道によっても検証できる。キャンパス内で河川は、流路の位置をときに大きく変えながら、続縄文文化や擦文文化に相当する時期には氾濫を繰り返していたようである。氾濫によって供給された堆積物やその侵食によって、河川周辺の微地形面（河谷、微高地、後背湿地など）が形成されていったと考えられる。当該期の遺跡は、北大構内においては河川沿いの微高地から検出される場合が最も多いが、河谷内から確認される場合もある。

北大札幌キャンパスの全域は、植物園が「C 44 遺跡」、第二農場の一部が「K 435 遺跡」、それ以外の区域が「K 39 遺跡」として、埋蔵文化財包蔵地に登録されている。しかし、それらは実質的には「遺跡群」と呼べる、遺跡の集合と考えられる。本報告では、2002 年に刊行された報告（小杉編 2002）に準じ、便宜的に発掘調査がなされて区域ごとに「○遺跡○地点」と呼称して記載を進めていく。それぞれの地点の名称は、調査の原因となった工事に関連付けて設定することとした。

北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、1994 年に実施した大学構内の南側に位置するゲスト・ハウス地点での調査において、北大構内での標準層序の統一化を検討した。その結果、層序を大きく 9 つに区分することが試案として提示された（吉崎編 1995）。また、毎回実施される試掘調査による堆積層のデータから、北大構内の地層の状態が大きく 4 つにまとまること（サクシュコトニ川の上流部左岸：大野池周辺、サクシュコトニ川上流部右岸：学術交流会館周辺、サクシュコトニ川の中流部右岸：工学部北部～低温科学研究所、サクシュコトニ川の下流部左岸もしくはセロンベツ川下流部の両岸：第一農場北部）が示されている（小杉編 2002, 小杉他編 2021）。

現在も、標準層序を念頭に置きながら、地域的な変異を考慮した堆積層位の体系的な理解を北大構内で進めていることから、発掘調査や試掘調査で確認された層序の対比をおこなう場合のために、以下に標準層序（吉崎編 1995）と文化層としての内容（小杉他編 2021）の概要を示す。

0 層：客土、盛土（近現代）

I 層：黒色土（旧表土）（擦文～近現代）

II 層：灰色シルト（続縄文後半期～擦文）

III 層：白色粘土と有機物の多い黒色土の互層（続縄文後半期）



図5 北大構内の遺跡と2024年度調査実施地点

- IV層：灰褐色シルト層・粘土層（続縄文前半期）
V層：黒色と灰色の粘土の互層（縄文晩期～続縄文前半期）
VI層：灰褐色シルト層と粘土層（VI層以下に縄文中期）
VII層：青色粘土層
VIII層：砂利，砂，シルトの互層

I - 2 2024 年度の調査概要

1. 調査の概要

2024 年度、北海道大学構内では本発掘調査 1 件、計画調査 1 件、確認調査 4 件を実施した。併せて、慎重工事 17 件がある（表 1、図 5）。調査件数に関しては工事名称から算出している。ただし、一工事案件で確認調査と本発掘調査の両者を実施した場合には、それぞれの件数に振り分けて算定している。

本発掘調査は、2024 年度に実施したこども本の森新営工事が計画された工事予定地（K 39 遺跡こども本の森地点：調査番号 2409）でおこなった。

学術研究を目的とした計画（確認）調査として、2024

年度においては中央キャンパス大学病院地区（北西側）で調査を実施した（調査番号 2403）。

確認調査は、こども本の森新営工事（調査番号 2409）、歯学部石碑移設他掘削工事（調査番号 2411）、未来創造棟新営工事（調査番号 2415）、野球場 A バックネット改修整備工事（調査番号 2421）で調査を実施した。

計画調査の成果は第Ⅱ章で、確認調査の成果は第Ⅲ章で報告する。なお、こども本の森地点の成果は、来年度以降に報告する予定である。

加えて、本発掘調査が実施された箇所に関しては、北海道大学札幌キャンパス内全体を対象に設定された 5×5 m を基本グリットとする方眼を用いて各種の記録をおこなっている（図 6、7 参照）。この仮想原点の設定は、公共座標に対応させておこなった。北緯 44° 00′ 00″，東経 142° 15′ 00″ の地点を基準点とし，X 軸方向に -103307.649 m，Y 軸方向に -74767.738 m の地点を方眼の仮想原点としている。Y 軸の方位は，N10° 55′ 33″ W である。Y 軸と X 軸との関係は数学系座標と同じであり，それぞれのグリットには算用数字で記号を付して表記する。上記のことから，植物園の範囲は仮想原点よりも南に位置する。図 7 では示していないが，植物園の範囲は Y 軸方向の数値がマイナス表記となる。

（守屋）

表 1 2024 年度実施調査一覧

調査番号	調査日	工事名称	調査の種類	工事面積 (m ²)	調査面積 (m ²)	文化	遺構・遺物
2401	'24/5/24	図書館南側道路雨水枡補修工事	慎重工事	8.4	8.4		—
2402	'24/6/1～6/12	保健科学研究院中庭整備掘削工事	慎重工事	430.6	430.6		—
2403	'24/6/10～8/15	中央キャンパス大学病院地区（北西側）	計画調査	2.313	153		遺構・遺物なし
2404	'24/6/14	工学部地中埋設管井水飲用配管修理工事	慎重工事	5.53	5.53		—
2405	'24/6/25	北キャンパス総合研究棟 4 号館緊急屋外排水管取替工事	慎重工事	3.39	3.39		—
2406	'24/6/26	瞬間パルス研究室玄関スロープ他取設工事	慎重工事	67.2	67.2		—
2407	'24/6/28	北海道大学高等教育推進機構屋外消火栓補修工事	慎重工事	0.54	0.54		—
2408	'24/7/8～7/22	瞬間パルス研究室屋外排水管改修工事	慎重工事	61.5	61.5		—
2409	'24/7/14～8/10	こども本の森新営工事	確認調査・本発掘調査	277.81	854.38	続縄文・擦文	炉址・炭化物集中箇所・焼土粒集中箇所・土器・石器・礫
2410	'24/7/25～8/22	弓道場便所屋外排水管補修工事	慎重工事	17	17		—
2411	'24/8/1～8/2	歯学部石碑移設他掘削工事	確認調査	8.4	8.4		遺構・遺物なし
2412	'24/8/26～9/6	農学部共同実験棟改修工事	慎重工事	99.71	99.71		—
2413	'24/9/1	エンレイソウ接地極改修工事	慎重工事	4	4		—
2414	'24/9/2～10/15	北キャンパス総合研究棟 7 号館発電機設置工事	慎重工事	32.5	32.5		—
2415	'24/9/4～10/17	未来創造棟新営工事	確認調査	1.990	189	続縄文・擦文	小ピット・土器・石器・礫
2416	'24/10/2	農学部本館屋外排水管修理工事	慎重工事	6	6		—
2417	'24/10/7～10/28	データ駆動型融合研究創発拠点駐車場新設工事	慎重工事	194	194		—
2418	'24/10/26～10/27	エンレイソウスポンサー企業銘板等掲示板設置工事	慎重工事	1.2	1.2		—
2419	'24/11/5～11/9	薬学部動物舎改修工事	慎重工事	37.0	37.0		—
2420	'24/11/15～12/2	工学部開発科学系統蒸気管改修工事	慎重工事	28.2	28.2		—
2421	'24/12/11～12/18	野球場 A バックネット改修整備工事	確認調査	9	9		遺構・遺物なし
2422	'25/2/3～2/7	工学部共用実験棟南側埋設配管敷設工事	慎重工事	23	23		—

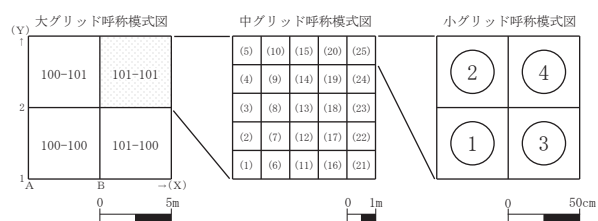


図6 グリッド呼称図

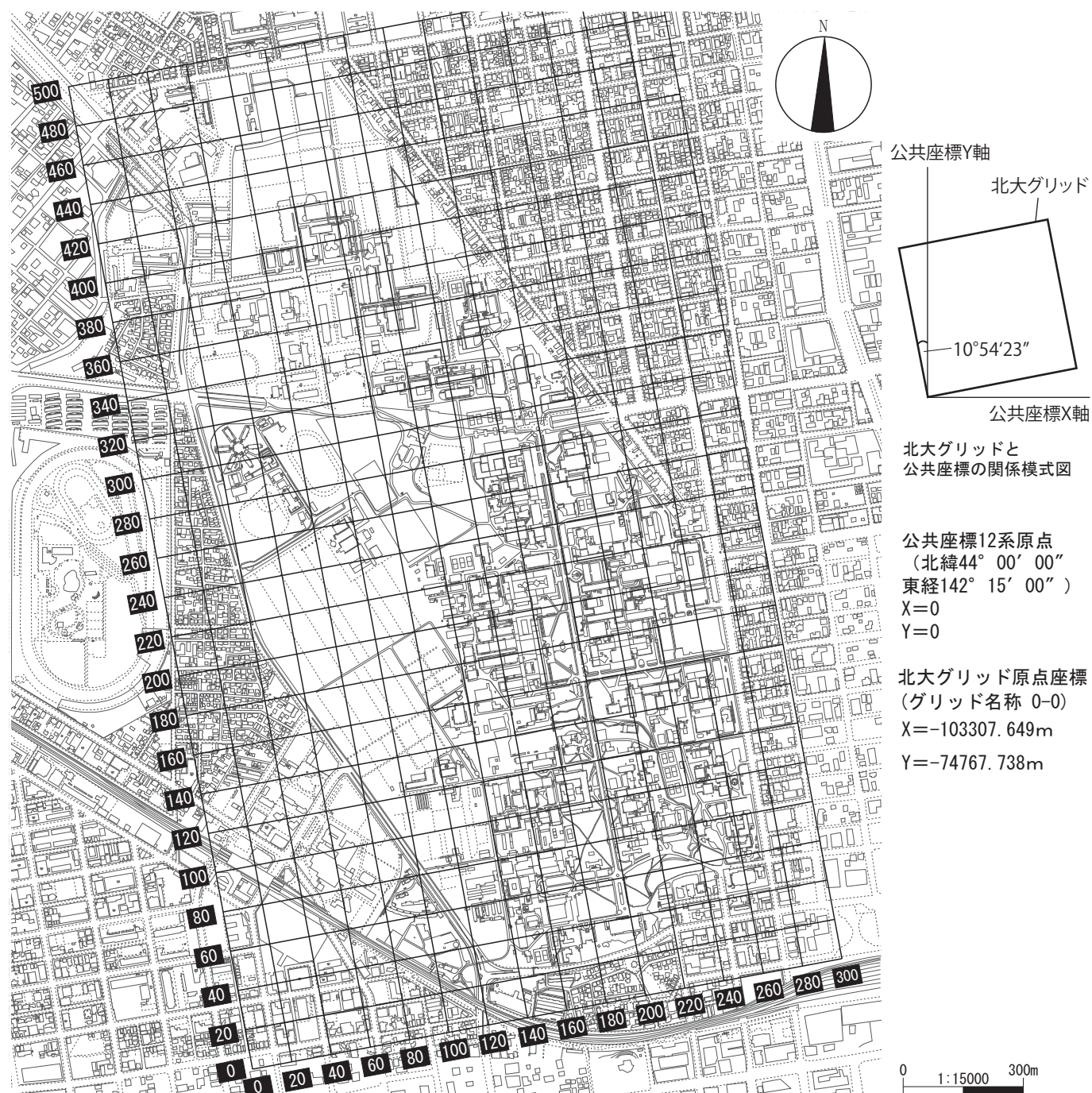


図7 大学構内グリッド配置図 (1マス 100 m)

第Ⅱ章 調査の成果

Ⅱ-1 K39 遺跡中央キャンパス 大学病院地区の計画調査

1. 調査の目的

北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、大学構内で

の埋蔵文化財保護のために、その遺存状況と立地環境の体系的把握につとめるべく、平成27年度から「計画調査第一次中期計画」を策定し、「計画調査」という学術調査を数年次にわたって実施してきた。前身の埋蔵文化財調査室時代から埋蔵文化財調査センターは、長年にわたって北海道大学構内での工事に伴う事前調査に従事してきている。その過程で、大学構内での古地形環境の変遷や埋蔵文化財の分布状況に関する膨大なデータを得てきて

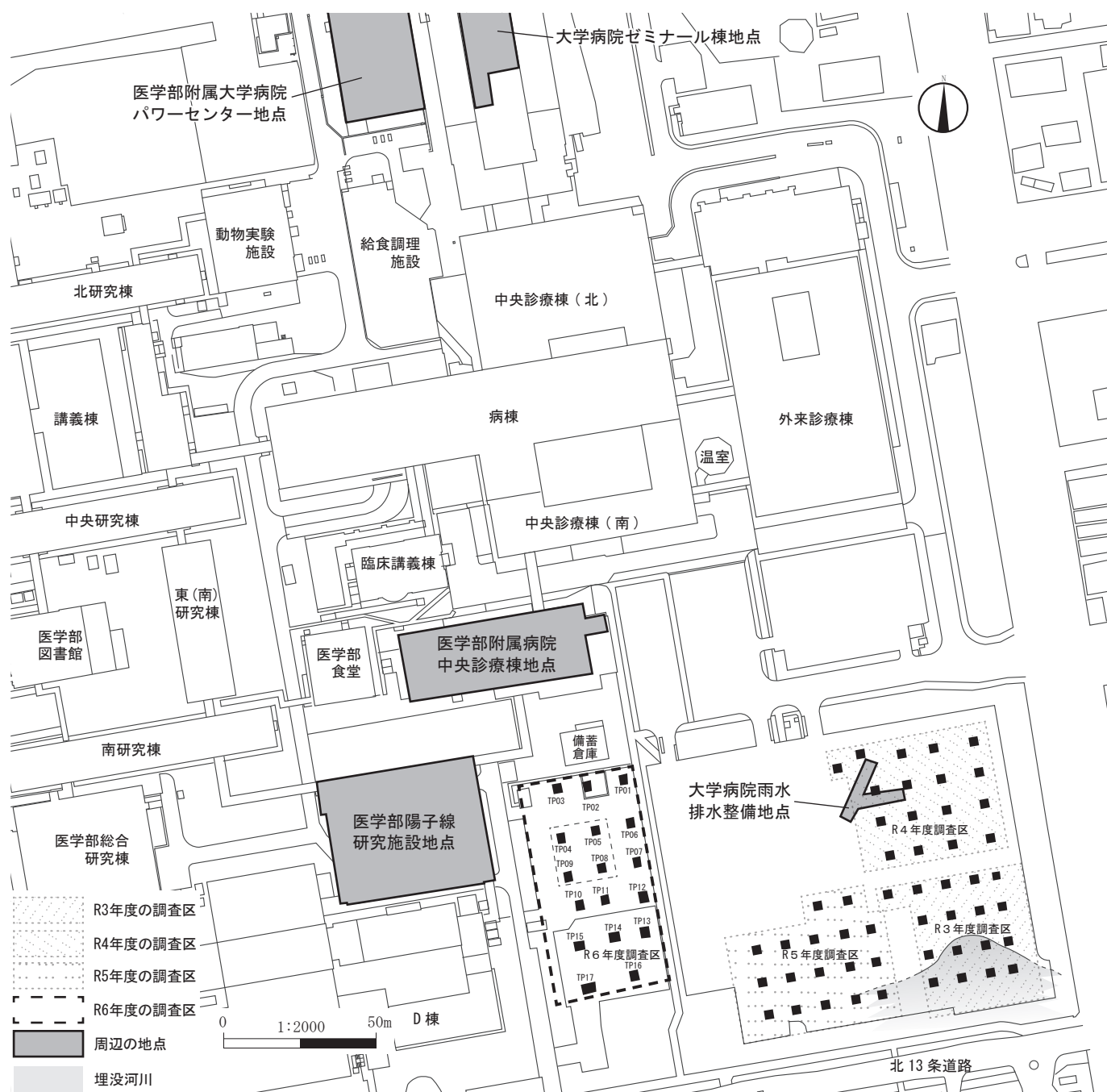


図8 中央キャンパス大学病院地区（北西側）と周辺の地点

いる。今後、北海道大学構内における埋蔵文化財を文化資源として適切かつ有効に保護・活用していくためには、それらのデータを体系的に整理するとともに、新たな学術調査を系統的に大学構内で実施していくことによって、古地形環境や埋蔵文化財の遺存状況について、精度の高い予測をおこなえるようにしていくことが必要である。

中期計画では、①サクシュコトニ川・セロンベツ川ならびにその支流の流路を把握し、流路において進行した下刻や堆積の時期・過程を解明する、②サクシュコトニ川・セロンベツ川ならびにその支流内および周辺における遺構・遺物の分布範囲や地点の集中区域を把握する、③各種の考古・古環境データを有機的に統合するための時間的枠組みを構築するために、キャンパス各区域間での層序対比を体系的に実施し、キャンパス全域での堆積環境を明らかにすることを目標とした。現地調査を平成28年度から開始し、令和元年度まで実施した。成果の詳細については令和2年度刊行の最終報告を参照されたい(小杉他編 2021)。

令和2年度からは新たな「計画調査第二次中期計画」を策定し、それにもとづき計画調査を継続的に実施していくこととなった。第二次中期計画では、第一次中期計画で目標とした前記三点に関する知見の成果にもとづき、その検証のためのデータを系統的に獲得していくことを目標として定めている。令和2年度は、北キャンパス地区におけるサクシュコトニ川の支流の流路の有無の把握と、その周辺での人類活動の確認を目的として、北キャンパス創成科学研究棟東地区において計画調査を実施した。そして令和3年度以降は、サクシュコトニ川支流の流路のさらに上流側に位置する中央キャンパス大学病院地区(以下、本地区)において計画調査を実施した。令和3年度の調査では、調査範囲の南側において小規模な河谷の存在を確認することができた(TP 04・05・08・09・10・13)。その結果、東西方向の埋没河道の存在が推定された。令和4年度においては、大学病院雨水排水施設整備地点(小杉他編 2015)と重複する範囲を調査対象とし、報告されている遺構の再評価を可能とするデータを得ることが出来た。令和5年度においては、大学病院雨水排水施設整備地点(小杉他編 2015)と重複する一部の範囲を調査対象とした。本年度は、令和3・4・5年度の西側の区域で、古地形および遺構・遺物の遺存の有無の確認を目的に計画調査を実施することとなった。

本地区は、北海道大学札幌キャンパスの東部に位置する(図8)。本地区は、小地形面としては沖積低地に立地する。周辺では北側にK39遺跡大学病院ゼミナール棟

地点、北西側に一部範囲が重複して大学病院雨水排水施設整備地点がある(小杉他編 2015)。大学病院ゼミナール棟地点では、平成25年度に実施された本発掘調査によって、続縄文前半の後北B・C1式期の遺物・遺構が確認されている。大学病院雨水排水整備地点では、平成25年度に実施された本発掘調査によって、続縄文期の可能性のある遺構が検出されている。本地点の西側には、擦文文化前期の末期古墳が検出された医学部陽子線研究施設地点がある(小杉他編 2013)。これら周辺地点での過去の調査から、本地区には続縄文文化から擦文文化にかけての人類活動の痕跡が残されていることが予測された。

本地区での計画調査は、令和6年4月30日付で北海道教育委員会に発掘調査の届出をおこなって実施された。令和6年6月10日～8月15日の期間、153m²を対象に実施された。

2. 調査の方法

本地区での計画調査は、予想される遺構・遺物包含層の深度と調査の安全性を考慮し、重機を用いて地表下約2.0～3.0mの深さまで掘り下げることで実施した。相互に約10mの間隔をあけて17の調査坑を設置し、埋蔵文化財の有無を確認するための調査を実施した(図8)。遺物・遺構の包含が予測された層準に関しては、人手によって掘削を進めている。掘削が終了した後は、壁断面を精査し、写真撮影と層序の記載・実測をおこなった後に埋め戻して現状復旧している。

調査の結果、いずれの調査坑においても自然堆積層から遺構や遺物は確認されなかった。

3. 層序と古地形

本地点は、豊平川扇状地の北側にひろがる沖積低地に立地している。本地点で確認された表層層序は、基本的に河川の営力によって運ばれてきた堆積物とその土壌化を受けたものから構成されていると考えられる。そうした性質を鑑み、堆積過程とその土壌化の履歴に留意しながら、それぞれの調査坑で層序の区分と記載を実施した(図9)。

今年度の調査範囲はかつて病棟があった箇所に相当する。TP07・16・17を除いたそれ以外の調査坑では、地表下約2.0～2.3mの深さまで客土となっており、自然堆積層の残りは令和3～5年度の調査区とは異なって良好ではなかった。調査坑間の層序の対比を可能とする鍵層の把握ができなかったため、各調査坑間での層序の対応関係を十分に把握するにはいたっていない。以下では

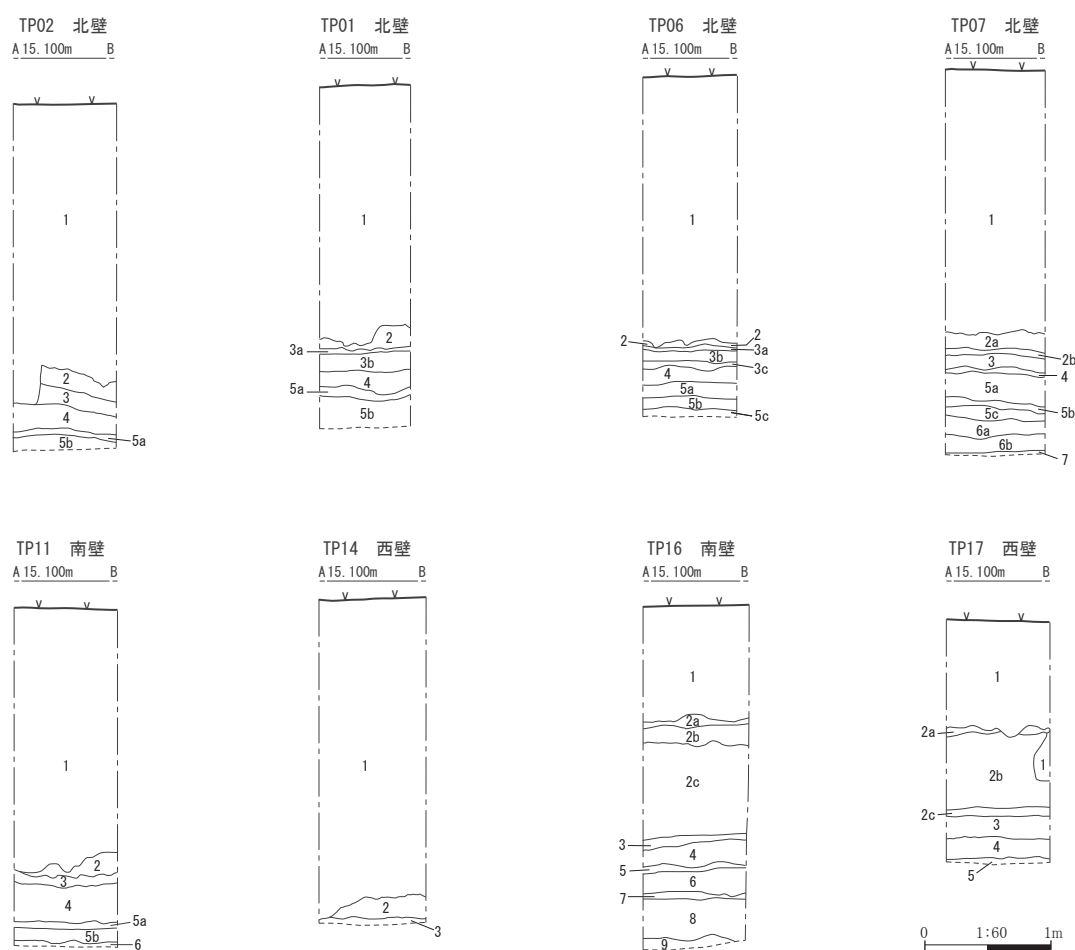


図9 中央キャンパス大学病院地区（北西側）セクション対比図

TP 07 北壁を代表させて説明したい。

1層は客土である。2層は極細粒砂をマトリクスとする堆積物である。2a層・2b層に細分された。2a層は暗赤褐色極細粒砂である。2b層は褐色シルト質極細粒砂である。3層は灰褐色シルトである。4層は黄褐色極細粒砂である。5層はシルトや粘土をマトリクスとする堆積物であり、5a・5b・5c層に細分された。5a層はにぶい褐色粘土、5b層はにぶい黄褐色シルト、5c層はにぶい黄褐色粘土である。6層はシルトや粘土をマトリクスとする堆積物であり、6a層は黄褐色シルト、6b層はにぶい黄褐色シルト質粘土であった。7層は黄灰色粘土であり、有機物を多く含んでいる。北大構内標準層序（吉崎編 1995）との対比では、2a～4層が標準層序第Ⅱ層に、5a～7層が標準層序第Ⅲ層に対応すると考えられる。

TP 01 の 5a 層、TP 02 の 5a 層、TP 04 の 3a 層、TP 05 の 5a 層、TP 06 の 5a 層、TP 07 の 5a 層、TP 09 の 4a 層、TP 10 の 4 層、TP 11 の 5a 層、TP 16 の 8 層は、主に灰黄褐色を呈する粘土で有機物を含む場合が認められ

るという点で、相互に対比できる層準である可能性はあるものの、当該層準が確認できなかった試掘坑もあり、有意な対比であったのか否かについては、今後の周辺での調査成果にもとづく検討が必要であろう。令和 3～5 年度の調査区の層序との対比も、駐車場内で残されている西側の区域での調査によって明らかにできるであろう。

4. まとめ

本予定地の周辺の地点で確認されている縄文文化や擦文文化の遺物・遺構は、本予定地内では確認されなかった。令和 3 年度の調査で確認された河谷は、本年度調査範囲には及んではないことが判明した。本年度調査範囲よりも南側にそれがのびている可能性があり、その位置を確認していくことが今後の周辺での調査課題となろう。

（許）

表2 中央キャンパス大学病院地区（北西側）の土層観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP 01 北壁	1						客土.
	2	5 YR 4/4	にぶい赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	3a	7.5 YR 4/4	褐色	シルト質極細粒砂	中	中	
	3b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	中	下部に有機物を微量含む.
	4	5 Y 5/2	灰オリーブ色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	5a	2.5 Y 5/2	暗灰黄色	粘土	やや強	中	有機物をやや微量含む.
	5b	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土	強	中	
TP 02 北壁	1						客土.
	2	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	極細粒	弱	やや弱	
	3	7.5 YR 5/6	明褐色	シルト	やや強	中	
	4	2.5 Y 4/1	黄灰色	極細粒～細粒砂	弱	やや弱	
	5a	7.5 Y 5/3	にぶい褐色	粘土	やや強	中	有機物をやや微量含む.
	5b	10 YR 6/4	にぶい黄橙色	粘土	やや強	やや強	
TP 06 北壁	1						客土.
	2	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	やや弱	中	
	3a	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
	3b	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや強	やや強	
	3c	10 YR 5/8	黄褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
	4	2.5 Y 4/4	オリーブ褐色	極細粒砂	弱	弱	
	5a	10 YR 4/2	灰黄褐色	粘土	強	やや強	有機物を含む.
	5b	10 YR 5/6	黄褐色	シルト質粘土	やや強	やや強	
	5c	7.5 YR 5/6	明褐色	シルト	やや強	中	
TP 07 北壁	1						客土.
	2a	5 YR 3/6	暗赤褐色	極細粒砂	弱	やや弱	
	2b	10 YR 4/6	褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	やや弱	
	3	10 YR 5/2	灰黄褐色	シルト	やや強	中	
	4	2.5 Y 5/3	黄褐色	極細粒砂	弱	弱	
	5a	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	5b	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト	中	中	
	5c	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	粘土	やや強	中	
	6a	2.5 Y 5/3	黄褐色	シルト	中	中	
	6b	2.5 Y 6/3	にぶい黄色	シルト質粘土	やや強	やや強	
	7	2.5 Y 4/1	黄灰色	粘土	やや強	中	有機物を含む.
TP 11 南壁	1						客土.
	2	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	弱	弱	
	3	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや強	中	7.5 YR 5/4 にぶい褐色極細粒砂のラミナ含む.
	4	2.5 Y 5/3	黄褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	5a	10 YR 5/2	灰黄褐色	粘土	強	中	
	5b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
TP 14 西壁	6	7.5 Y 5/1	灰色	シルト	中	やや強	
	1						客土.
	2	5 YR 4/8	赤褐色	極細粒～細粒砂	やや弱	やや弱	
TP 16 南壁	3	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	やや強	中	木材の周縁部が炭化していたものが遺存していた.
	1						客土.
	2a	10 YR 2/2	黒褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
TP 16 南壁	2b	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	2c	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	2.5 Y 5/3 黄褐色シルトの薄層を下部に含む.
	3	5 Y 5/3	灰オリーブ色	シルト質極細粒砂	やや弱	弱	
	4	10 YR 4/6	褐色	シルト	中	中	
	5	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	6	7.5 YR 5/6	明褐色	極細粒砂質シルト	やや強	中	5 YR 4/8 赤褐色極細粒砂の薄層を含む.
	7	2.5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	8	10 YR 6/3	にぶい黄橙色	粘土	強	中	有機物を含む.
	9	5 GY 4/1	暗オリーブ灰色	シルト	強	やや強	
TP 17 西壁	1						客土.
	2a	7.5 YR 3/3	暗褐色	シルト	弱	やや弱	
	2b	5 YR 3/6	暗赤褐色	極細粒砂	弱	弱	
	2c	7.5 YR 4/6	褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	弱	
	3	10 YR 4/4	褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	やや弱	
	4	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト	中	やや弱	10 YR 4/4 褐色極細粒砂の薄層を含む.
TP 17 西壁	5	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	弱	弱	



A. TP 01 掘削状況（北より）



B. TP 01 北壁（南より）



C. TP 02 掘削状況（南より）



D. TP 02 北壁（南より）



E. TP 03 北壁（南より）



F. TP 04 北壁（南より）

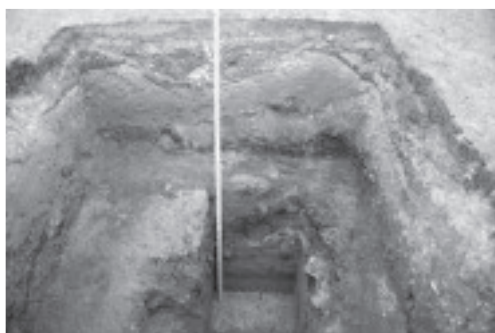


G. TP 05 掘削状況（南より）



H. TP 05 北壁（南より）

写真1 中央キャンパス大学病院地区（北西側）の調査(1)



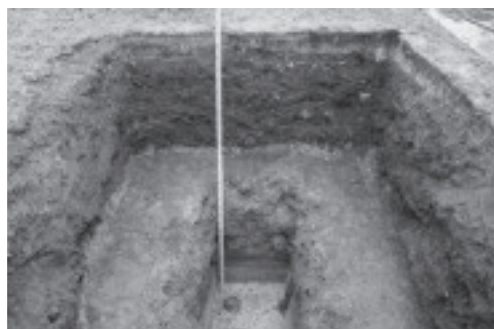
A. TP 06 北壁（南より）



B. TP 07 北壁（南より）



C. TP 08 北壁（南より）



D. TP 09 北壁（南より）



E. TP 10 掘削状況（北より）



F. TP 10 南壁（北より）

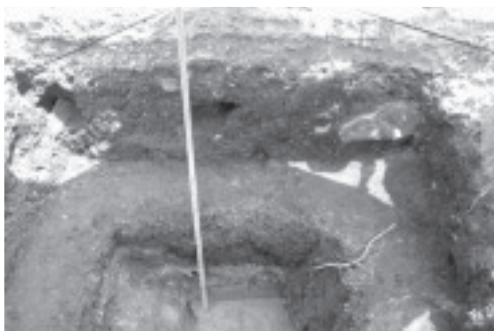


G. TP 11 南壁（北より）

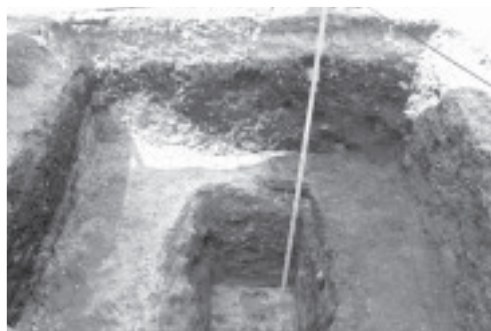


H. TP 12 南壁（北より）

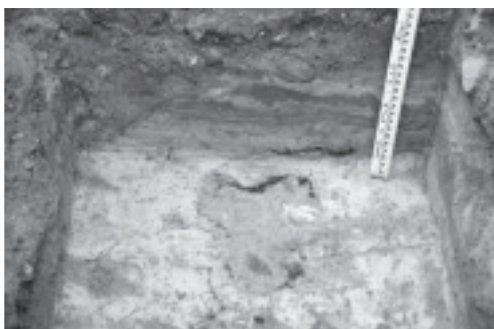
写真2 中央キャンパス大学病院地区（北西側）の調査(2)



A. TP 13 東壁（西より）



B. TP 14 西壁（東より）



C. TP 14 西壁・炭検出状況（東より）



D. TP 15 西壁（東より）



E. TP 16 基礎検出（東より）



F. TP 16 南壁（北より）



G. TP 17 掘削状況（東より）



H. TP 17 西壁（東より）

写真3 中央キャンパス大学病院地区（北西側）の調査(3)

第Ⅲ章 確認調査・立会調査の成果

Ⅲ-1 確認調査・立会調査で確認された層序

1. 層序

I章で述べた通り、令和6年度に北海道大学埋蔵文化財調査センターでは、4件の確認調査を実施し、大学構内各地で層序記録に関する断面の調査をおこなってきた。本節では、確認調査によって記録された土層を、北大構内標準層序（吉崎編 1995）と対比して、その特徴を記載する。

図12-1は、未来創造棟新営工事に伴う確認調査(2415)で記録した断面である。当確認調査では、本工事予定地

で調査坑（約1m×1m四方）を18箇所設定し、約3.0mの深さまで掘削を実施した。図12-1では、それらのうち、TP03、TP04、TP06、TP09、TP18のセクション図を示している。

TP02・03・05～11・15～17では概ね共通した堆積物が確認された。TP06で観察された層序について以下に説明する。2層は褐色極細粒砂、3層は褐色粘土であった。1層直下の堆積物が比較的良好に残されている場合には、この2層と類似する砂や砂質シルトが多くの調査坑で確認された。3層に相当する層準の粒径や色調は、調査坑に応じて変化する。2層～3層は、標準層序Ⅱ層に対応する可能性がある。4a～5層は粘土やシルト質粘土であった。4a層は有機物を多く含んでおり、TP02・03・05～11・15～17では類似の層準が確認できたことから、鍵層であると認識できる。6a～6d層は、粘土やシル

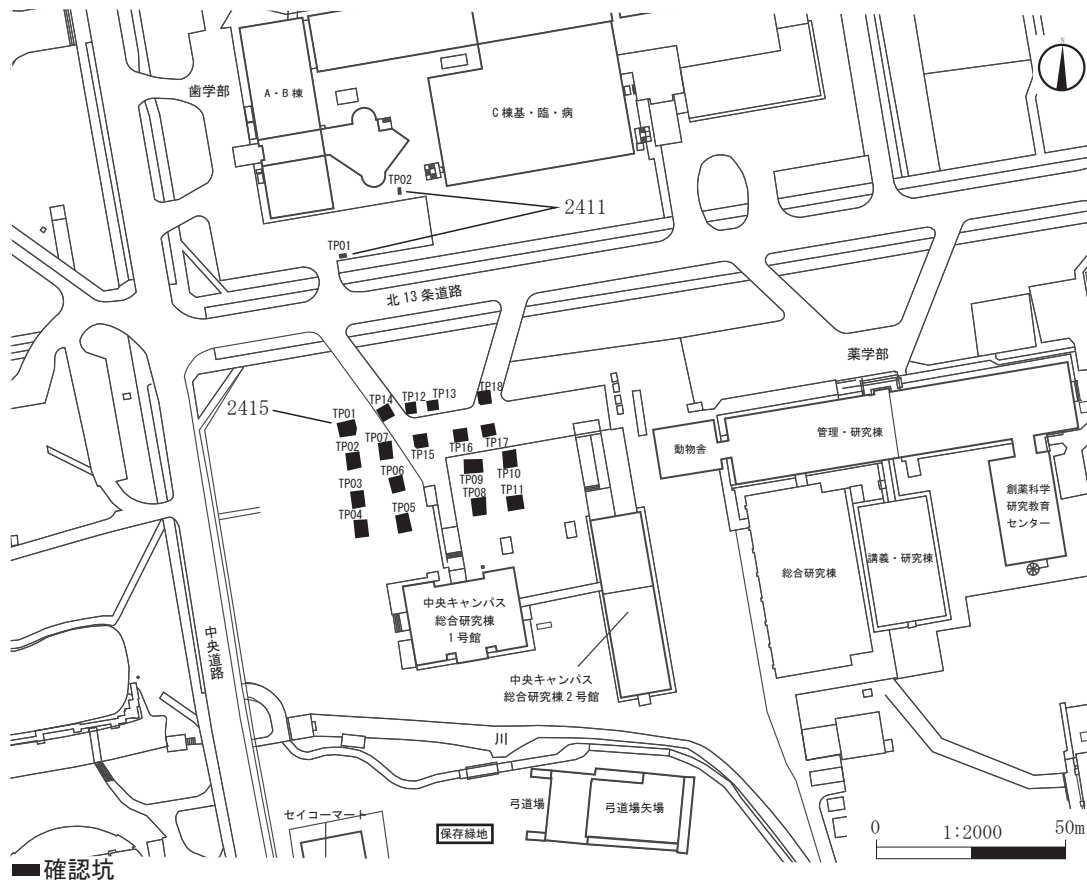


図10 歯学部石碑移設他掘削工事、未来創造棟新営工事調査坑位置図

トであった。灰褐色の6a層の下位に位置する、にぶい褐色粘土の6b層や黄褐色粘土の6d層に挟まれて、極細粒砂質シルトの6c層が認められた。同様の層序は、層相が部分的に異なりながらも、TP 02・03・05～11・15～17で共通して確認できた。6a層と同様の層相は、調査坑間で共通して確認されており、鍵層として対比に利用できる。その下位には7層が確認されている。7層は褐色粘土であり、その下部から土器や石器などの続縄文文化前半期の遺物が出土している。TP 02では8b層下部、TP 03では8層下部、TP 10では6層下部から構築されたと考えられる小ピットも確認された。いずれもTP 06の7層下部に相当する層準である。7層の下位には黒褐色粘土の8a層、にぶい褐色粘土の8b層、にぶい赤褐色極細粒砂の9層が認められた。8a層もTP 02・03・05～11・15～17では同様の層相が確認でき、なおかつ上下の層序も共通していたことから、鍵層として調査坑間の対比に利用できる。土性から、4a層～6a層は標準層序Ⅲ層、6b～7層は標準層序Ⅳ層、8a層は標準層序Ⅴ層に対応すると考えられる。

調査対象範囲内の北側に位置するTP 01・12～14・18では、支障物の存在から地表下約3mの深さまで調査できなかった箇所があるものの、先にあげた鍵層がいずれも確認できなかった。TP 01やTP 18では、比較的容易に確認できるTP 06の8a層や6a層に相当する層が確認できなかったため、異なる地形面に堆積していたものである可能性がある。縄文文化晩期から続縄文文化前半期にかけては、調査範囲内の北側に河谷が存在していたと推定できる。

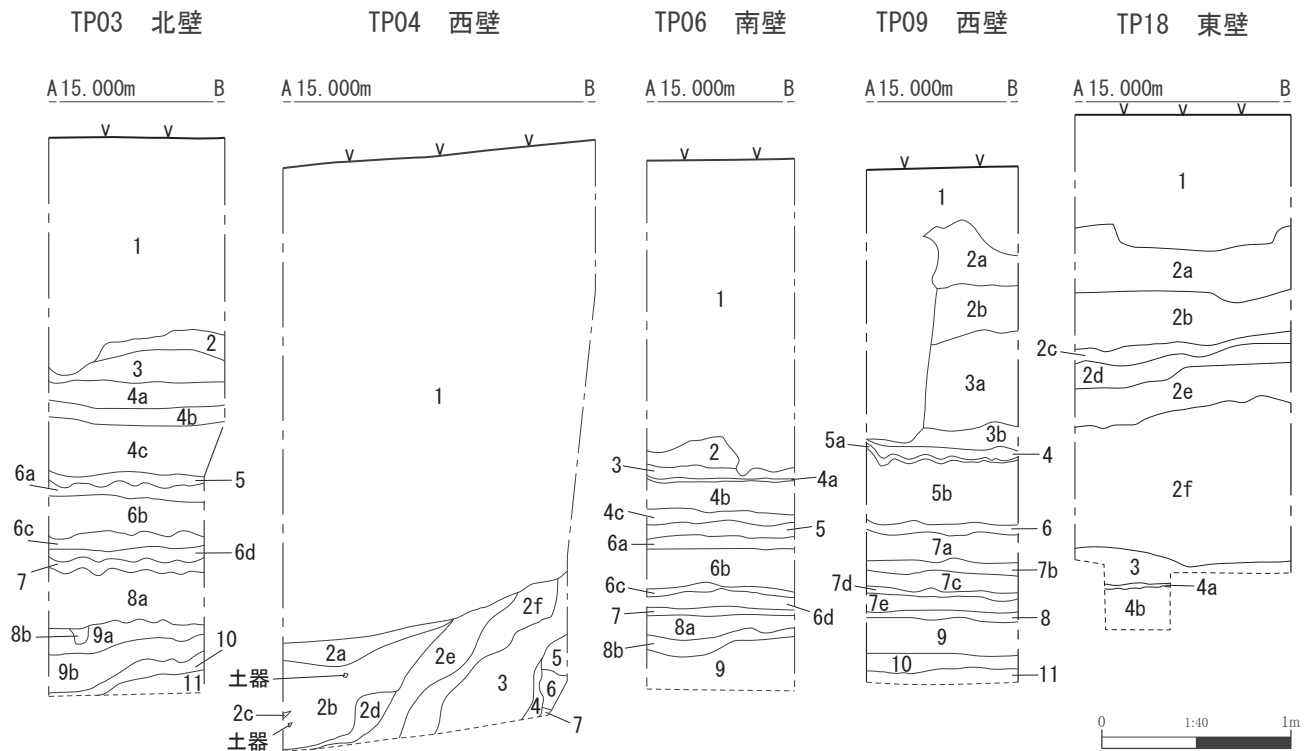
調査対象範囲の南西端に位置するTP 04では、TP 06の8a層に相当する層準を侵食して谷が形成されており、そこに2a～4層の堆積が確認された。2a層や2b層は黒みが強いシルトであり、2b層からは擦文文化後期の土器が出土している。2a～4層は河谷内に堆積していたものであると推定される。この谷の形成によって浸食された層準および出土遺物からみて、続縄文文化後半期もしくはそれ以降に調査対象範囲の南西端には河谷が形成され、その埋積過程で遺物が残されたものと推定される。

図12-2は、野球場 A バックネット改修整備工事に伴



図11 野球場 A バックネット改修整備工事調査坑位置図

1. 未来創造棟新営工事（2415）



2. 野球場 A バックネット改修整備工事（2421）

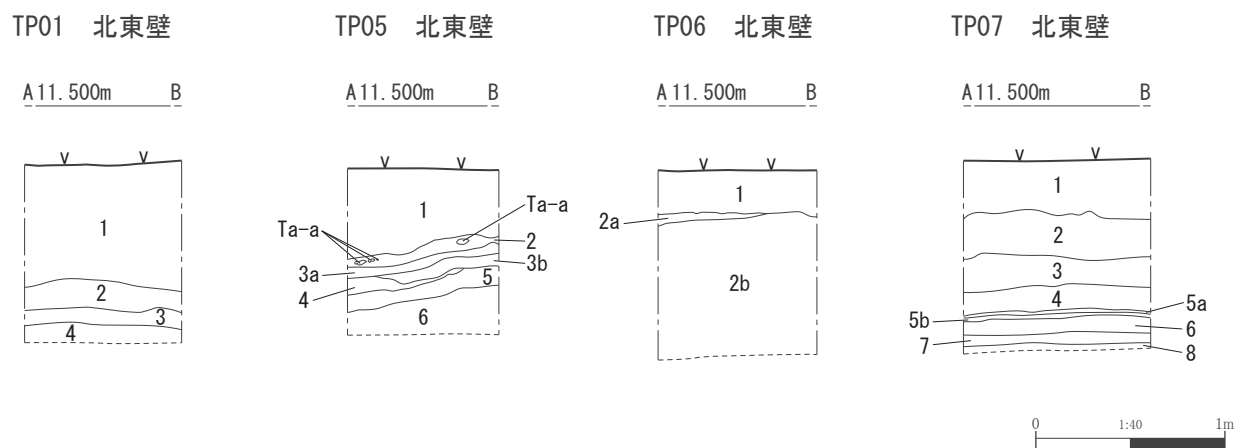


図 12 北大構内確認調査セクション図

表3 北大構内確認調査の土層観察表(1)

調査区名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
未来創造棟新営工事 (2415) TP 03 北壁	1						客土.
	2	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
	3	5 YR 4/6	赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	4a	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	極細粒砂質シルト	やや弱	やや弱	
	4b	10 YR 4/6	褐色	極細粒砂質シルト	やや弱	中	
	4c	2.5 YR 4/6	赤褐色	細粒砂	やや弱	弱	7.5 YR 5/4 にぶい褐色シルトの薄層を含む.
	5	10 YR 4/2	灰黄褐色	シルト	中	中	
	6a	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土	強	やや強	7.5 YR 2/2 黒褐色粘土の薄層を上部に含む.
	6b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	褐鉄鉱がみられる.
	6c	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	中	中	
	6d	10 YR 6/3	にぶい黄橙色	粘土	やや強	やや強	
未来創造棟新営工事 (2415) TP 04 西壁	7	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強	
	8a	7.5 YR 4/4	褐色	シルト質粘土	強	強	
	8b	7.5 YR 4/4	褐色	シルト質粘土	中	中	小ビットの覆土.
	9a	7.5 YR 3/2	黒褐色	粘土	やや強	やや強	褐鉄鉱がみられる.
	9b	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	中	
	10	7.5 YR 4/3	褐色	粘土	やや強	中	
	11	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	1						客土.
	2a	10 YR 2/3	黒褐色	シルト	弱	やや弱	
	2b	10 YR 2/1	黒色	シルト	弱	やや弱	遺物出土.
	2c	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	中	中	
未来創造棟新営工事 (2415) TP 06 南壁	2d	10 YR 3/3	暗褐色	シルト	やや弱	中	
	2e	5 YR 2/1	黒褐色	極細粒砂	弱	弱	
	2f	5 YR 3/1	黒褐色	細粒砂	弱	弱	
	3	7.5 YR 4/1	褐灰色	シルト	やや強	中	
	4	10 YR 4/1	褐灰色	粘土	中	中	
	5	10 YR 4/1	褐灰色	粘土	やや強	中	
	6	10 YR 2/2	黒褐色	粘土	強	やや強	
	7	10 YR 5/2	灰黄褐色	粘土	強	やや強	
	1						客土.
	2	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	中	中	
	3	7.5 YR 4/4	褐色	粘土	やや強	中	
未来創造棟新営工事 (2415) TP 09 西壁	4a	7.5 YR 3/2	黒褐色	粘土	やや強	やや強	
	4b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	4c	10 YR 6/4	にぶい黄橙色	シルト質粘土	やや強	強	
	5	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	6a	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	やや強	やや強	
	6b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	6c	7.5 YR 6/6	橙色	極細粒砂質シルト	中	中	
	6d	10 YR 5/6	黄褐色	粘土	強	やや強	
	7	7.5 YR 4/3	褐色	粘土	やや強	やや強	
	8a	7.5 YR 2/2	黒褐色	粘土	やや強	やや強	
	8b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	やや強	中	
未来創造棟新営工事 (2415) TP 18 東壁	9	5 YR 4/4	にぶい赤褐色	極細粒砂	中	やや弱	
	1						客土.
	2a	10 YR 4/6	褐色	シルト	中	中	
	2b	7.5 YR 4/6	褐色	シルト質極細粒砂	やや強	中	
	3a	5 YR 3/6	暗赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	3b	7.5 YR 4/6	褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	弱	
	4	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土	やや強	中	
	5a	10 YR 2/2	黒褐色	粘土	やや強	中	有機物含む.
	5b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	6	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	やや強	有機物含む.
	7a	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
未来創造棟新営工事 (2415) TP 18 東壁	7b	5 YR 4/6	赤褐色	極細粒砂	中	やや弱	
	7c	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	7d	5 YR 4/6	赤褐色	シルト	やや強	中	
	7e	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	やや強	やや強	
	8	7.5 YR 3/4	暗褐色	粘土	やや強	中	遺物出土.
	9	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	やや強	中	
	10	7.5 YR 4/3	褐色	シルト	中	やや強	
	11	5 YR 4/4	にぶい赤褐色	極細粒砂	やや弱	弱	
	1						客土.
	2a	10 YR 4/4	褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	やや弱	
	2b	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂質シルト	弱	弱	
未来創造棟新営工事 (2415) TP 18 東壁	2c	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	2d	10 YR 4/4	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	2e	10 YR 5/6	黄褐色	極細粒砂質シルト	弱	弱	
	2f	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒～中粒砂	弱	弱	
	3	2.5Y5/1	黄灰色	粘土質シルト	強	中	
	4a	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	中	中	
	4b	5Y5/1	灰色	粘土	強	中	

表 4 北大構内確認調査の土層観察表(2)

調査区名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
野球場 A バックネット 改修整備工事 (2421) TP 01 北東壁	1						客土.
	2	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	中	
	3	7.5 YR 3/1	黒褐色	シルト	中	やや強	
	4	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
野球場 A バックネット 改修整備工事 (2421) TP 05 北東壁	1						客土.
	2	5 YR 2/3	極暗赤褐色	シルト	やや弱	弱	
	3a	7.5 YR 2/1	黒色	シルト	やや弱	やや弱	
	3b	7.5 YR 2/2	黒褐色	シルト	中	中	
	4	2.5 Y 5/3	黄褐色	シルト	やや強	やや強	
	5	2.5 Y 3/1	黒褐色	シルト	やや強	中	
	6	2.5 Y 5/3	黄褐色	シルト	やや強	中	
野球場 A バックネット 改修整備工事 (2421) TP 06 北東壁	1						客土.
	2a	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	弱	弱	
野球場 A バックネット 改修整備工事 (2421) TP 07 北東壁	2b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	極細粒砂～細粒砂	弱	弱	客土. 北西方向に向けて傾斜する葉理が認められた.
	1						
	2	10 YR 5/6	黄褐色	シルト	中	やや強	
	3	5 YR 4/8	赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	4	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土質シルト	やや強	中	
	5a	10 YR 4/2	灰黄褐色	粘土	強	やや弱	
	5b	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	粘土	やや強	中	
	6	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭	やや弱	中	
	7	N 2/2	黒色	泥炭	弱	やや弱	
	8	5 YR 3/2	暗赤褐色	粘土	中	中	

う確認調査（2421）で記録した断面である。当確認調査では、7.4 m²の工事予定地内で調査坑（約1 m×1 m 四方）を7箇所設置し、地表下約1.0 mの深さまで掘り下げた。図 12-2 では、TP 05～TP 07 のセクション図を示している。

各調査坑間での堆積物は北西側に位置する TP 01～06 と南東側に位置する TP 07 で大きな相違が認められた。TP 07 では、客土の下位にシルトや砂の堆積物が厚さ約0.6 m で認められ（2 層～3 層）、その下位には黒色の泥炭と褐色あるいは赤褐色の粘土が互層状に堆積していた（4 層～8 層）。2 層～3 層は標準層序Ⅱ、4 層～8 層は標準層序Ⅲに対応すると考えられる。こうした層序は、本予定地の南側に位置し、平成 11・12 年度に本発掘調査が実施された西門地点（小杉編 2002）における、セロンベツ川の河谷に面した両岸の平坦面で確認されたものと共通しており、TP 07 は同様の地形的位置にあったと推定される。一方、TP 01～06 ではこうした層序は認められなかった。TP 01～05 では黒色シルトの堆積が確認されており、調査坑によっては黒色シルト層が複数枚にわたって認められた。また、そうした黒色シルト層には樽前 a 火山灰（Ta-a）が含まれている場合もあった。こうした点は、西門地点でのセロンベツ川の河谷内に堆積していた層序と類似しており、地形的に同様の位置にあったことを反映しているものと考えられる。それぞれの調査坑で確認された堆積物は、河谷内に堆積していた厚い堆積物のなかでもより上部のものに相当するであろう。TP 06 では、TP 07 とともに TP 01～05 と異なる堆積物が

確認された。ここでは北西方向にむけて葉層の傾斜が認められた。南東側の TP 07 で確認された堆積物が水平に連続して堆積してはならず、また河谷内のより中央部に一般的に堆積している Ta-a を含む黒色シルトが認められなかったという点から、この調査坑の位置は、河谷内の斜面に位置していたのではないかと推定される。

Ⅲ- 2 2024 年度の確認調査・立会調査の結果

a. こども本の森新営工事（2409）

南門の西側に新設建物の建設に伴う掘削工事が計画されたため、工事予定地内（227.8 m²）で確認調査を実施した。遺構・遺物の出土が確認されたため、同年度に本発掘調査を実施した。確認調査の成果は本発掘調査の成果と合わせて 2026 年度に報告する。

b. 歯学部石碑移設他掘削工事（2411）

歯学部南側の位置で、石碑移設のための工事の実施が計画されたため、8.4 m²の工事範囲を対象として、地表下約0.8 mの深さまで掘り下げる調査坑を2箇所設置し、確認調査を実施した。TP 01 では、地表下約0.6 mより以下で、自然堆積層として褐色のシルトと砂が部分的に認められた。TP 02 では、調査深度が客土の範囲内にとどまっており、自然堆積層は確認されなかった。遺物・遺構は検出されなかった。

c. 未来創造棟新営工事 (2415)

中央キャンパス総合研究棟の北側に新設建物の建設に伴う掘削工事が計画されたため、工事予定地内(1990 m²)に、確認坑(約1 m×1 m 四方)18基(TP 01～TP 18)を設定して、地表下約3.0 mの深さまで掘り下げ、確認調査を実施した。調査の結果、遺物の出土が確認された。

本予定地は、札幌市域北部に分布していた沖積低地に立地している。本予定地は、現地形をみると、北西方向へ流れていたサクシュコトニ川の右岸にひろがっていた平坦面に立地している。周辺では、本予定地の東側に位置し、平成21年度に本発掘調査が実施されたK 39 遺跡南キャンパス総合研究棟B棟北地点(小杉他編 2011)、西側に位置し、平成元年度に本発掘調査が実施された札幌地区等情報ネットワーク設備地点(吉崎編 1990)があ

る。両地点ともに客土直下の層準から擦文文化に帰属する資料が確認されている。

各調査坑では、埋設物や樹木などの支障がなければ地表下約1.5 mに段を設け、約3.0 mの深さまで重機を用いて掘削し、調査を実施している。遺物・遺構の存在が予測された層準に関しては、人手での掘削を実施している。掘削が終了した後は、壁断面を精査し、写真撮影をおこなった。調査坑の位置および層序について記録し、調査終了後は埋め戻し、現状復旧した。

確認された層序は前節に参照されたい。

TP 01・04・06・09・10・12・14・15・16・17 から遺物が確認された。

TP 06・09・15・16・17 からは、続縄文期初頭の土器・石器・礫が確認された。代表的なものを図13-2～5に示した。

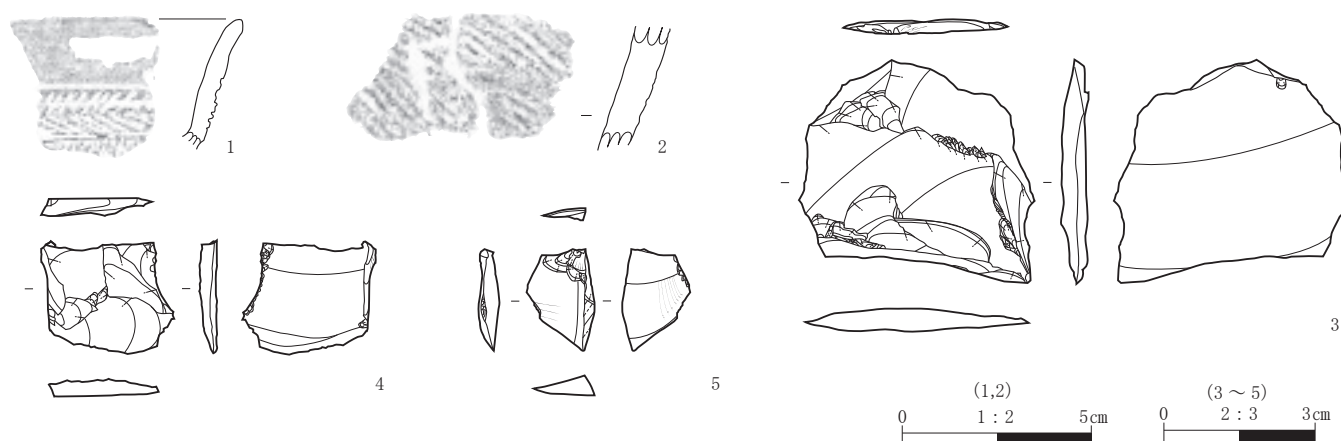


図13 未来創造棟新営工事予定地出土土器の拓影図及び石器の実測図

表5 未来創造棟新営工事予定地出土土器の観察表

挿図 番号	器種	部位	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	文様・器面調整		時期	確認坑 (層位)	遺物 番号	写真 番号	備考
							外面	内面					
13-1	甕	口縁部	—	—	—	7.30	沈線3条 キザミ(交互)	ミガキ	擦文	TP 04 (2b層)	68	4-1	外面剥離
13-2	深鉢	胴部	—	—	—	20.75	縄文RL(斜)		続縄文	TP 16 (6層)	633	4-2	

表6 未来創造棟新営工事予定地出土石器の観察表

挿図 番号	遺物 番号	確認坑 (層位)	器種	材質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	被熱	遺存状態	写真 番号	備考
13-3	480	TP 09 (8層)	剥片	黒曜石	44.5	46.5	5.5	9.90	なし	完形	4-3	
13-4	634	TP 17 (6層)	剥片	黒曜石	27.0	26.5	3.5	1.99	なし	完形	4-4	二次加工を有する
13-5	706	TP 15 (6層)	剥片	黒曜石	20.0	13.5	4.0	0.73	なし	完形	4-5	

TP 06 からは一括資料として土器 27 点 (408.2 g)、石器 2 点 (10.3 g)、礫 1 点 (73.3 g) が確認された。土器は深鉢で、口縁部 4 点 (61.1 g)、胴部 22 点 (343.9 g)、底部 1 点 (3.2 g) である。石器は石核 1 点 (9.5 g)、剥片 1 点 (0.8 g) である。利用されている石材はいずれも黒曜石である。礫は安山岩である。

TP 09 の 8 層から石器 11 点 (13.5 g) が出土している。剥片 8 点 (13.5 g)、碎片 3 点 (0.0 g)、利用されている石材はすべて黒曜石である。

TP 15 の 6 層から石器 1 点 (0.7 g) が出土している。黒曜石製の剥片である。

TP 16 の 6 層から土器 1 点 (20.8 g) が出土している。深鉢の胴部である。

TP 17 の 6 層から石器 4 点 (2.7 g) が出土している。剥片 3 点 (2.7 g)、碎片 1 点 (0.0 g)、利用されている石材はすべて黒曜石である。

また、TP 02 では 8b 層下部、TP 03 では 8 層下部、TP 10 では 6 層下部から構築されたと考えられる小ピットも確認された。いずれも TP 06 の 7 層下部に相当する層準である。同一層準から確認されているため、これらは同時期に形成された一枚の文化層に帰属しているものと評価される。

TP 04 は、層位的に上記の文化層とは別時期のものである。2b 層から擦文文化後期の土器 15 点 (61.5 g) が出土している。甕 10 点 (49.0 g)、坏 2 点 (9.1 g)、器種不明 3 点 (3.4 g) である。甕は口縁部 4 点 (21.8 g)、胴部 6 点 (27.2 g) で、坏は口縁部である。器種不明は口縁部 1 点 (0.9 g)、胴部 2 点 (2.5 g) である。代表的なものを図 13-1 に示した。また、一括資料として土器 12

点 (126.0 g) が確認された。甕 11 点 (122.1 g)、坏 1 点 (3.9 g) である。甕は、口縁部 3 点 (22.0 g)、頸部 1 点 (10.3 g)、胴部 7 点 (89.7 g) である。坏は口縁部である。

TP 01・10・12・14 の客土からも擦文期の土器が確認された。TP 01 から土器 5 点 (19.2 g)、甕の胴部 4 点 (14.9 g) と坏の口縁部 1 点 (4.3 g) である。TP 10 から土器 3 点 (37.3 g)、甕の胴部である。TP 12 から土器 1 点 (8.1 g)、甕の口縁部である。TP 14 から土器 6 点 (28.0 g)、甕の口縁部 1 点 (3.8 g)、胴部 4 点 (22.0 g)、坏の口縁部 1 点 (2.2 g) である。また、TP 14 の一括資料として土器 1 点 (3.1 g)、甕の胴部が確認された。

d. 野球場 A バックネット改修整備工事 (2421)

野球場の北側の位置で、バックネット改修整備工事が計画されたため、7.4 m² の工事予定地内に、確認坑 (約 1 m×1 m 四方) 7 基 (TP 01~TP 07) を設定して、地表下約 1.0 m の深さまで掘り下げ、確認調査を実施した。

調査の結果、西門地点 (小杉編 2002) で確認された地層堆積、埋没河道に対応する地形が把握できた。TP 01~05 では黒色シルトの堆積が確認されており、西門地点でのセロンベツ川の河谷内に堆積していた層序と類似する。TP 06 では、極細粒砂を主体とした地層が確認され、北西方向に向けて傾斜する葉理が認められたことから河谷内の斜面に位置していたと推定する。TP 07 では、西門地点でのセロンベツ川右岸に堆積していた層序と類似する。併せて、TP 04、TP 05 で樽前 a 火山灰 (Ta-a) を含む黒色シルト層が確認された。

遺物・遺構は検出されなかった。

(許)

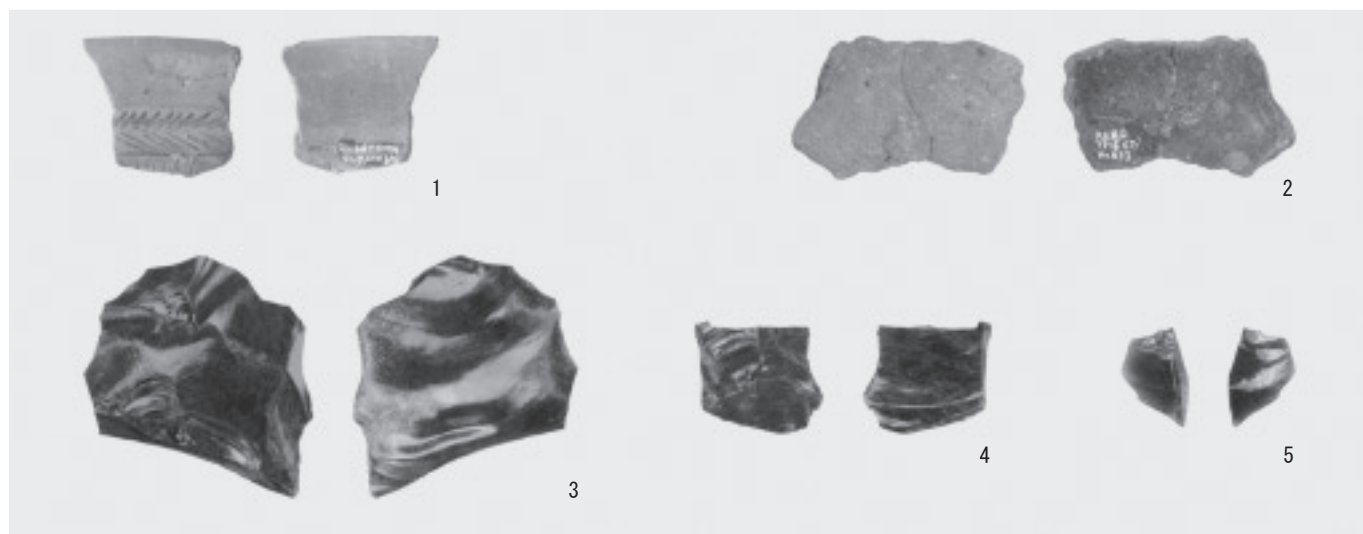


写真 4 未来創造棟新営工事予定地出土遺物写真



A. 歯学部石碑移設他掘削工事 TP 01 南壁
(北より) 調査番号：2411



B. 歯学部石碑移設他掘削工事 TP 02 東壁
(西より) 調査番号：2411



C. 未来創造棟新営工事 TP 03 北壁 (南より)
調査番号：2415



D. 未来創造棟新営工事 TP 04 掘削状況
(南西より) 調査番号：2415



E. 未来創造棟新営工事 TP 04 西壁 (東より)
調査番号：2415



F. 未来創造棟新営工事 TP 06 南壁 (北より)
調査番号：2415



G. 未来創造棟新営工事 TP 08 掘削状況
(北より) 調査番号：2415



A. 未来創造棟新営工事 TP 09 西壁（東より）
調査番号：2415



B. 未来創造棟新営工事 TP 15 掘削状況
（西より）調査番号：2415



C. 未来創造棟新営工事 TP 18 東壁（西より）
調査番号：2415



D. 野球場 A バックネット改修整備工事 TP 01
掘削状況（南より）調査番号：2421



E. 野球場 A バックネット改修整備工事 TP 01
北東壁（南西より）調査番号：2421



F. 野球場 A バックネット改修整備工事 TP 05
北東壁（南西より）調査番号：2421



G. 野球場 A バックネット改修整備工事 TP 06
北東壁（南西より）調査番号：2421



H. 野球場 A バックネット改修整備工事 TP 07
北東壁（南西より）調査番号：2421

第 2 部 令和 6 年度年次事業報告

2-1 調査活動

1. 緊急調査—本発掘・確認・慎重工事

令和6年度に北海道大学構内では、本発掘調査1件、確認調査4件、計画調査1件、慎重工事17件が行われた。本発掘調査は第Ⅰ部Ⅰ章、計画調査は同Ⅱ章、確認調査は同Ⅲ章を参照していただきたい。

2. 計画調査—基盤情報整備

令和2年度からの5年間を第二次中期計画期間として、計画的な発掘調査を実施した。本計画調査期間では、第一次中期計画期間の成果をふまえ、そこで明らかにされた北キャンパスや中央キャンパスでの地形環境や遺物・遺構包含層に関する課題を解決するために、これまで4か所の対象地を調査してきた。

令和6年度は、サクシュコトニ川支流沿いでの続縄文後半期から擦文文化における集落およびキャンプ地利用のひろがりを確認する目的で、中央キャンパス大学病院地区において計画調査を実施するに至った。サクシュコトニ川の支流の流路が病院駐車場から歯学部に向かって蛇行していた可能性があり、併せて、その流路に隣接した旧地形で、続縄文文化および擦文文化の遺構・遺物が広がっている密度を明らかにした。

2-2 教育普及活動

1. 北海道大学埋蔵文化財調査センター展示室

a. 常設展示

センターがこれまで大学構内で実施して調査から得られた出土資料はすべてセンター内で保管しており、そのうち代表的なものを展示室で公開・展示している。展示室は、一時的な処置として、開館時間を午前9時から午後3時まで短縮し、休館日は毎週土曜・日曜日、年末年始（12月29日～1月3日）、祝日としている。なお、展示室の入館は無料である。

表7 常設展示資料一覧表

展示場所	展示内容	展示物
ケース1	縄文文化晩期・続縄文文化	土器21点、石器20点、パネル2点
ケース2	続縄文文化	土器16点、石器84点、玉類4点、コハク玉4点
ケース3	続縄文文化	土器26点、石器104点、玉類4点、パネル3点
ケース4	続縄文文化	屋外炉址（剥ぎ取り）
ケース5	擦文文化	土器29点、石器16点、土製品1点、パネル1点
ケース6	擦文文化・アイヌ文化期	土器13点、石器27点、土製品8点、土玉17点、コハク玉2点、鉄製品2点、骨製品1点、木製品3点、自然遺物12点、パネル7点
ケース7	擦文文化	土器31点、鉄製品1点、パネル8点
ケース8	アースダイビング	遺構・遺物分布図
ケース9	アースダイビング	遺構・遺物分布図、土器1点、パネル3点
ケース10	企画展示	※下記参照

2. 企画展示

a. 第18回「ガラスの考古学」

開催期間：令和6年4月1日～令和7年2月12日

ニュースレター第45号と連動し、札幌キャンパス構内から出土したガラス製品を展示し、発見状態、製作技術について紹介した。昨年度からの展示期間を延長して開催した。

展示物：パネル10点、ガラス製品5点（K39遺跡ポプラ並木東地区地点、同北方生物圏フィールド科学センター実験実習棟地点、同農学部実験実習棟地点）。

b. 第19回「繰り返された選定地」

開催期間：令和7年2月13日～令和7年3月31日（予定）

ニュースレター第49号と連動して、北大構内の遺跡の内、数百年間隔で繰り返し選定されたと位置づけられる地点を集成し、紹介した。

展示物：パネル9点、擦文土器2点（K39遺跡こども本の森地点）、続縄文土器2点（K39遺跡こども本の森地点）



写真7 第19回企画展の様子

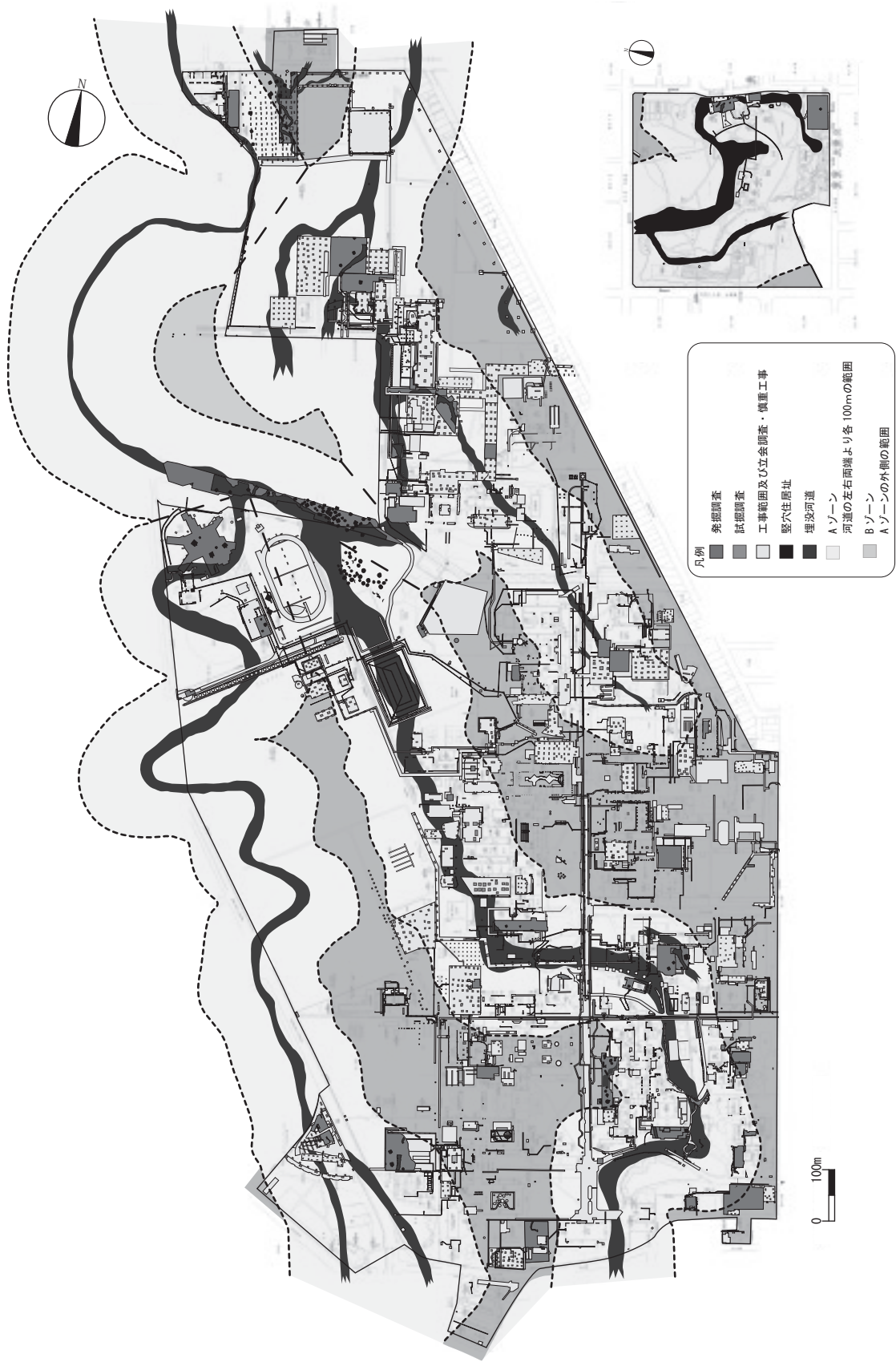


図 14 北大札幌キャンパス内のゾーン区分

3. 北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター

北大構内から発見された考古資料や関連科学の研究成果について解説した特集とともに、調査センター主催の行事案内を掲載している。ニュースレターは、当センターのホームページ、北海道大学の機関リポジトリである学術成果コレクション HUSCAP で閲覧、あるいは PDF をダウンロードできる。

令和6年度は第48号、第49号を刊行した。第48号（令和6年12月発行）は、特集「注口土器と片口土器」と題し、構内で発見された特殊な形の土器などを紹介した。続縄文文化、擦文文化の遺跡で主に発見された「注口土器と片口土器」の確認位置、形態的特徴の推移とともに、それらの用途について、煤や炭化物が付着していた部位の観察結果、煤や炭化物に対する自然科学分析によって明らかにしようとする試みがまとめられた。併せて、第23回の遺跡トレイルウォークの様子が報告された。

第49号（令和7年1月発行）は、特集「繰り返された選定地」と題し、構内遺跡において、数百年間隔で当時の人々によって選定され、利用された旧地形および地点を紹介した。河川に隣接した旧地形では、地層が累積されて高まりが形成されていた。当時の人々が高まりを繰り返し利用していた場所が構内の遺跡で約2割みられることを示した。それらを示すことによって、河川に隣接した場所で、氾濫があったたびに当時の人々が他所に移動したこと、比較的安定した高まりが形成された際に再び選定し、利用している様子をまとめた。

4. 「北大構内の遺跡31」の刊行

令和6年度の緊急調査、計画調査、年次事業報告をまとめ、報告書として2025年3月に刊行した。

5. 遺跡トレイルウォーク

令和6年度は、令和6年10月12日に第23回遺跡トレイルウォークを実施した。「擦文文化の集落と河川での活動」というテーマで、構内の正門から弓道場付近までのコースを参加者41名とともに巡った際、現地表面から観察される地形、遺構・遺物が発見された場所を観察しました。併せて、本コースでは、本発掘調査が実施されていた「K39遺跡こども本の森地点」の現地見学説明が行われた。

6. 調査成果報告会

令和6年度は、令和7年2月24日に第14回の報告会を北海道大学学術交流会館の第一会議室で実施した。第



写真8 第23回遺跡トレイルウォークの様子

I部では、調査活動の概要、「K39遺跡こども本の森地点」の調査成果速報が当センター員から発表された。第II部では、鈴木信氏（公益財団法人北海道埋蔵文化財センター）が、「後北C₂・D式期のころ—続縄文とは？—」と題した講演をおこなった。

当日の参加者は、117名であった。

第1部（調査成果報告）

- ・「2024年度における調査研究の成果」
報告者 高倉純
（北海道大学埋蔵文化財調査センター）
- ・「K39遺跡こども本の森地点の調査」
報告者 守屋豊人
（北海道大学埋蔵文化財調査センター）

第2部（講演）

- ・「後北C₂・D式期の頃—続縄文という時代とは—」
報告者 鈴木信
（公益財団法人北海道埋蔵文化財センター）



写真9 第14回調査成果報告会の様子

・報告者間での討論

7. 資料利用

a. 資料貸出

- ・森町教育委員会 片山弘喜
資料：K 39 遺跡農学部実験実習棟地点出土続縄文・擦文土器一式
期間：令和6年4月3日～令和7年3月31日
- ・北海道大学文書館 廣瀬公彦
資料：埋蔵文化財調査センター展示室ケース3の写真
日時：令和6年6月1日
- ・札幌市下水道河川局 事業推進部 河川事業課
水どり担当係 根田
資料：北海道大学埋蔵文化財調査室ニュースレター第16号（2013年2月）
日時：令和6年6月7日
- ・北海道新聞報道センター部 次長 藤田香織里
資料：埋蔵文化財調査センター展示室ケース3の写真
日時：令和6年6月10日
- ・同志社大学文学部 橋本佳奈
資料：土器4点
日時：令和6年8月6日
- ・北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
特任助教 村上智見
資料：北海道大学構内（アイヌ・先住民研究センター横）発掘調査における土層剥取の実施
日時：令和6年9月24日
- ・株式会社あるた出版 O.tone 編集部 武田慎
資料：発掘調査作業中の写真掲載
日時：令和6年10月15日

b. 資料見学

- ・札幌市立白石中学校第1学生
展示室およびセンター内見学
日時：令和6年5月30日
- ・札幌創成高等学校
展示室およびセンター内見学
日時：令和6年6月13日
- ・北広島市市民大学 OB 会自然観察グループ 佐々木道弘
展示室およびセンター内見学
日時：令和6年6月18日
- ・岡山県立倉敷南高等学校
展示室およびセンター内見学
日時：令和6年6月20日
- ・多治見西高等学校

展示室およびセンター内見学

日時：令和6年6月28日

- ・秀英 KIDS 札幌
展示室およびセンター内見学
日時：令和6年8月7日
- ・日本放送協会札幌放送局
展示室およびセンター内・発掘調査の現場見学
日時：令和6年11月25日
- ・トライ式高等学院札幌キャンパス
展示室およびセンター内見学
日時：令和6年12月27日

8. ホームページ

令和6年度は、ホームページ刷新の準備のため、公開を中止した。

9. ボランティア活動

当センターのボランティア活動員は4名であった。遺跡トレイルウォークでの受付、誘導、安全対策、調査成果報告会での受付、会場整理、設営などをおこなった。

2-3 統計・資料

表8 月別開館日数及び入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	21	21	20	22	21	19	22	20	20	19	18	20	243日
入館者数	65	126	141	136	267	111	187	81	51	56	54	51	1326人

1. 入館データ

a. 月別開館日数及び入館者数

年間延べ1326人が本センター展示室に来館した。詳細は表8で示した。

2. 組織・構成

a. 埋蔵文化財運営委員会

（※肩書はすべて令和6年度当時）

- 委員長 高瀬 克範（文学研究院 教授）
- 委員 菅原 修孝（理事）
- 國木田 大（文学研究院 准教授）
- 山田 敏弘（理学研究院 教授）
- 磯部 公一（工学研究院 准教授）
- 佐野 雄三（農学研究院 教授）
- 山本 正伸（地球環境科学研究院 教授）
- 江田 真毅（総合博物館 教授）

b. 調査専門部会

部会長 高瀬 克範（文学研究院 教授）
部会員 國木田 大（文学研究院 准教授）
山田 敏弘（理学研究院 教授）
磯部 公一（工学研究院 准教授）
佐野 雄三（農学研究院 教授）
山本 正伸（地球環境科学研究院 教授）

江田 真毅（総合博物館 教授）

c. 北海道大学埋蔵文化財調査センタースタッフ

センター長 高瀬 克範（文学研究院 教授）
センター員 高倉 純（助教）
守屋 豊人（助教）
駒井 尊子（事務補助員）

表9 受領刊行物一覧表(1)

[道内]
1. (公財)北海道埋蔵文化財センター 『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報） 第376集 帯広市 空港南A遺跡』
2. (公財)北海道埋蔵文化財センター 『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報） 第377集 松前町 福山城下町遺跡(2)』
3. (公財)北海道埋蔵文化財センター 『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報） 第378集 長万部町 豊野3遺跡』
4. (公財)北海道埋蔵文化財センター 『(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報） 第379集 苫小牧市 有珠川7遺跡』
5. (公財)北海道埋蔵文化財センター 『調査年報36 令和5年度』
6. 北海道立埋蔵文化財センター 『北海道立埋蔵文化財センター 重要遺跡確認調査報告書 第19集 興部町 興部豊野堅穴群（B）』
7. 北海道立埋蔵文化財センター 『北海道立埋蔵文化財センター 年報25 令和5（2023）年度』
8. いしかり砂丘の風資料館 『エスチュアリ No.68』
9. いしかり砂丘の風資料館 『いしかり砂丘の風資料館 紀要 第14巻』
10. 浦幌町立博物館 『浦幌町立博物館紀要 第24号』
11. 北見市教育委員会 『北見博物館研究報告 第5号』
12. 公益財団法人アイヌ民族文化財団 『AINU ART モレウのうた』
13. 国立アイヌ民族博物館 『国立アイヌ民族博物館ニュースレター ANUANU vol.016』
14. 国立アイヌ民族博物館 『国立アイヌ民族博物館ニュースレター ANUANU vol.017』
15. 札幌国際大学縄文世界遺産研究室 『縄文 年報8 2023年度』
16. 札幌市教育委員会（札幌市埋蔵文化財センター） 『丘珠縄文遺跡年報5 丘珠縄文遺跡 2022年度活動報告』
17. 札幌市教育委員会（札幌市埋蔵文化財センター） 『市内遺跡発掘調査報告書16 令和5年度 調査報告書』
18. 札幌市教育委員会 『札幌市文化財調査報告書111 N434遺跡 第2次調査』
19. 標茶町博物館 『標茶町博物館紀要 第5号』
20. 千歳市教育委員会 『千歳市文化財調査報告書54 メボシ川2遺跡（第6次調査）』
21. 千歳市教育委員会 『千歳市文化財調査報告書55 バンケビビ遺跡群』
22. 千歳市教育委員会 『千歳市文化財調査報告書56 市内遺跡調査報告書4』
23. 苫小牧市埋蔵文化財調査センター 『北海道苫小牧市 市内遺跡発掘調査等事業報告書3』
24. 根室市歴史と自然の資料館 『市内遺跡調査報告書1 北海道根室市 西月ヶ岡堅穴群』
25. 根室市歴史と自然の資料館 『根室市歴史と自然の資料館たより くるまいし 2024.7 No.39』
26. 根室市歴史と自然の資料館 『根室市歴史と自然の資料館紀要 第36号』
27. 函館市教育委員会・一般財団法人 道南歴史文化振興財団 『函館市教育委員会 一般財団法人道南歴史文化振興財団発掘調査報告書 第18輯 函館市 大船F遺跡』
28. 函館市教育委員会・一般財団法人 道南歴史文化振興財団 『函館市教育委員会 一般財団法人道南歴史文化振興財団発掘調査報告書 第19輯 函館市 大船E遺跡(2)』
29. 函館市教育委員会・一般財団法人 道南歴史文化振興財団 『函館市教育委員会 一般財団法人道南歴史文化振興財団発掘調査報告書 第20輯 函館市 大船J遺跡』
30. 函館市教育委員会・一般財団法人 道南歴史文化振興財団 『函館市教育委員会 一般財団法人道南歴史文化振興財団発掘調査報告書 第21輯 函館市 大船G遺跡』
31. 函館市教育委員会・一般財団法人 道南歴史文化振興財団 『函館市教育委員会 一般財団法人道南歴史文化振興財団発掘調査報告書 第22輯 函館市 白尻A遺跡(3)』
32. 北海道今金町教育委員会 『今金町文化財調査報告7 町内遺跡詳細分布調査報告書』
33. 北海道恵庭市教育委員会 『2024 北海道恵庭市発掘調査報告書 柏木川9遺跡Ⅰ』
34. 北海道恵庭市教育委員会 『2024 北海道恵庭市発掘調査報告書 柏木川9遺跡Ⅱ』
35. 北海道恵庭市教育委員会 『北海道恵庭市発掘調査報告書 恵庭市内遺跡発掘調査等報告書6』
36. 美幌町教育委員会 『美幌町埋蔵文化財各種開発確認調査報告書』
37. 北海道江別市教育委員会 『江別市文化財調査報告書130 高砂遺跡（26）元江別9遺跡(2) 江別市内遺跡分布調査(6)』
38. 北海道江別市教育委員会 『江別市文化財調査報告書131 町村農場4遺跡』
39. 北海道博物館 『森のちゃれんがニュース vol.35 2024 春』
40. 北海道博物館 『森のちゃれんがニュース vol.36 2024 夏』
41. 北網圏北見文化センター 『北網圏北見文化センター年報 令和4年度』
42. 湧別町教育委員会 『北海道指定遺跡シブノツナイ堅穴住居跡発掘概要報告書（2023年度）』
43. 余市水産博物館 『余市水産博物館研究報告 第18号 2024年3月』
44. 利尻町立博物館 『利尻研究（利尻町立博物館年報）第43号』

表10 受領刊行物一覧表(2)

〔道外〕	
45.	弘前大学人文社会科学部 『与論島の再葬墓』
46.	弘前大学人文社会科学部 『国史跡山王圀遺跡の研究Ⅴ 土器編3（西区Ⅵ層・Ⅶ層出土土器編）』
47.	弘前大学人文社会科学部 『徳之島の古墓』
48.	南部町教育委員会 『南部町埋蔵文化財調査報告書 第15集 南部氏関連城館シリーズ 第12集 国史跡 聖寿寺館跡 南部町内遺跡発掘調査事業報告書 令和4年度・令和5年度』
49.	青森県八戸市教育委員会 『八戸市埋蔵文化財調査報告書第185集 八戸市内遺跡発掘調査報告書49 石橋遺跡第12地点』
50.	青森県八戸市教育委員会 『八戸市埋蔵文化財調査報告書第186集 八戸市内遺跡発掘調査報告書50 沢ノ上遺跡第2地点・弥次郎窪遺跡第1地点・新井田古館遺跡第36地点・熊野堂遺跡第8.9地点・細越遺跡第2地点』
51.	八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 『八戸埋蔵文化財ニュース第27号 掘りday はちのへ』
52.	一般財団法人奥州市文化振興財団奥州市埋蔵文化財調査センター 『岩手県奥州市埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 第18集 町屋敷遺跡 宅地造成・長屋住宅建設に伴う緊急発掘調査』
53.	花巻市教育委員会 『花巻市埋蔵文化財調査報告書 第29集 令和2年度・令和3年度調査花巻市内遺跡発掘調査報告書 殿屋敷遺跡・似内遺跡・施田Ⅰ遺跡』
54.	釜石市・釜石市教育委員会 『釜石市埋蔵文化財調査報告書第47集 橋野高炉跡範囲内容確認調査報告書5 令和2・3年度発掘調査報告』
55.	岩手県洋野町教育委員会 『洋野町埋蔵文化財調査報告書第16集 洋野町内試掘調査報告書 風力発電事業に伴う遺跡発掘調査』
56.	岩手県洋野町教育委員会 『洋野町埋蔵文化財調査報告書第17集 洋野町内試掘調査報告書 風力発電事業に伴う遺跡発掘調査』
57.	岩手県洋野町教育委員会 『洋野町埋蔵文化財調査報告書第18集 洋野町内試掘調査報告書 風力発電事業に伴う遺跡発掘調査』
58.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第742集 「力持遺跡 発掘調査報告書」』
59.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第743集 「サンニヤⅢ遺跡 発掘調査報告書」』
60.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第744集 「中林下遺跡 発掘調査報告書」』
61.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査センター 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第745集 「令和5年度発掘調査報告書」』
62.	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査センター 『紀要 第43号』
63.	盛岡市・盛岡市教育委員会 『第2～7次発掘調査・盛岡広域都市計画事業 都南中央第三地区土地区画整理事業に伴う 平成27～30年度発掘調査報告書 下水林遺跡Ⅰ』
64.	宮城県多賀城跡調査研究所 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2023 多賀城跡』
65.	東北大学埋蔵文化財調査室 『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告9 仙台城跡北方武家屋敷地区 第15地点 第1分冊』
66.	東北大学埋蔵文化財調査室 『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2022』
67.	秋田市教育委員会 『秋田市 久保田城跡 佐竹史料館改築事業に伴う発掘調査報告書』
68.	秋田市教育委員会 『令和5年度秋田市遺跡確認調査報告書』
69.	公益財団法人茨城県教育財団 『研究ノート 第21号』
70.	公益財団法人茨城県教育財団 『埋蔵文化財 年報43 令和5年度』
71.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『栃木県埋蔵文化財センターだより2024年3月』
72.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『とちぎ発掘調査成果情報誌 No.81 塚原遺跡・塚原古墳群』
73.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『とちぎ発掘調査成果情報誌 No.82 下飯貝遺跡』
74.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『とちぎ発掘調査成果情報誌 No.83 鳴井上遺跡』
75.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『とちぎ発掘調査成果情報誌 No.84 篠崎遺跡』
76.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『とちぎ発掘調査成果情報誌 No.85 小泉分校裏遺跡・本沼大塚遺跡』
77.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『埋蔵文化財センター年報第34号 遺跡の発掘と活用の記録』
78.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『研究紀要 第32号』
79.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『栃木県埋蔵文化財調査報告 第413集 栃木県埋蔵文化財保護行政年報 46 令和4年度(2022)』
80.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『栃木県埋蔵文化財調査報告 第414集 塚原遺跡・塚原古墳群 一般国道4号矢板拡幅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』
81.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『栃木県埋蔵文化財調査報告 第415集 下飯貝遺跡 快適で安全な道づくり事業費(補助)国道121号京泉Ⅱ工区に伴う発掘調査』
82.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『栃木県埋蔵文化財調査報告 第416集 鳴井上遺跡Ⅱ 快適で安全な道づくり事業費(補助)主要地方道那須黒羽茂本線下境工区に伴う発掘調査』
83.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『栃木県埋蔵文化財調査報告 第417集 篠崎遺跡 県営農地整備事業(経営体育成型)薬師寺・紫地区における埋蔵文化財発掘調査』
84.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『栃木県埋蔵文化財調査報告 第418集 小泉分校裏遺跡・本沼大塚遺跡 農地整備事業(経営体育成型)小泉・本沼地区における埋蔵文化財発掘調査 第1分冊』
85.	公益財団法人 とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 『栃木県埋蔵文化財調査報告 第418集 小泉分校裏遺跡・本沼大塚遺跡 農地整備事業(経営体育成型)小泉・本沼地区における埋蔵文化財発掘調査 第2分冊』
86.	公益財団法人 千葉県教育振興財団 『研究連絡誌 第90号』
87.	公益財団法人 千葉県教育振興財団 『千葉県教育振興財団文化財センター年報 No.49 令和5年度』
88.	公益財団法人 千葉県教育振興財団 『房総の文化財 VOL.63』
89.	東京大学文学部登呂実習施設/考古学研究室 『オホーツクの古代文化 東北アジア世界と北海道・史跡登呂遺跡』
90.	駒澤大学考古学研究室 『駒沢考古第50号』
91.	横浜市教育委員会 公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告54 神隠丸山遺跡Ⅱ 縄文時代後期編』
92.	鳥崎川流域遺跡調査団 『鳥崎川流域遺跡調査団報告第4集 新潟大学考古学研究室調査研究報告24 長岡市鳥崎川流域遺跡群の研究Ⅳ 赤坂遺跡3』

表 11 受領刊行物一覧表(3)

93.	越中山遺跡調査団 『越中山遺跡の研究 2023 年度発掘調査報告書』
94.	富山県埋蔵文化財センター 『富山県埋蔵文化財センター年報 令和 5 年度』
95.	富山県埋蔵文化財センター 『国営農地整備事業下条工区埋蔵文化財試掘調査報告 小出城跡 水橋小出遺跡 水橋専光寺遺跡』
96.	富山県埋蔵文化財センター 『富山県出土の重要考古資料 16 とやまの弥生時代墳墓・祭祀遺跡出土品 中小泉遺跡 囲山遺跡 南太閤山Ⅰ遺跡 惣領浦芝前遺跡 江尻遺跡 蔵野町東遺跡』
97.	富山県埋蔵文化財センター 『令和 6 年度特別展 と・YAMATAI 国 弥生時代の富山へタイムスリップ』
98.	富山県埋蔵文化財センター 『埋文とやま VOL.166』
99.	富山県埋蔵文化財センター 『埋文とやま VOL.167』
100.	富山県埋蔵文化財センター 『埋文とやま VOL.168』
101.	公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター 『いしかわの遺跡 No.75』
102.	公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター 『いしかわの遺跡 No.76』
103.	石川県教育委員会（公財）石川県埋蔵文化財センター 『七尾市 七尾城跡Ⅳ 一般国道 470 号 能越自動車道 七尾水見道路に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
104.	石川県教育委員会（公財）石川県埋蔵文化財センター 『金沢市 梅田 B 遺跡Ⅵ 一般国道 159 号 金沢東部環状道路事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 9』
105.	石川県教育委員会（公財）石川県埋蔵文化財センター 『小松市 白江梯川遺跡Ⅴ 第 1 分冊・第 2 分冊 梯川河川改修に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 5』
106.	石川県教育委員会（公財）石川県埋蔵文化財センター 『小松市 八日市地方遺跡 3 第 1 分冊本文編・第 2 分冊写真図版編 北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 10』
107.	石川県教育委員会（公財）石川県埋蔵文化財センター 『白山市 小川 B 遺跡 地方道改築事業 主要地方道 金沢美川小松線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 2』
108.	石川県教育委員会（公財）石川県埋蔵文化財センター 『石川県埋蔵文化財情報 第 50 号』
109.	金沢大学古代文明・文化資源学研究所 『金沢大学考古学紀要第 45 号』
110.	静岡県埋蔵文化財センター 『研究紀要 第 9 号 2024』
111.	静岡県埋蔵文化財センター 『ふじのくに 考古通信 2024.1 Vol.26』
112.	静岡県埋蔵文化財センター 『ふじのくに 考古通信 2024.6 Vol.27』
113.	愛知学院大学大学院歴史学科 『愛知学院大学考古学発掘調査報告 37 愛知県田原市宮西遺跡再整理調査報告書』
114.	愛知学院大学大学院歴史学科 『愛知学院大学考古学発掘調査報告 38 愛知県瀬戸市広久手 C3 窯跡 広久手 F 窯跡 第 4.5 次発掘調査概要報告書』
115.	同志社大学歴史資料館 『同志社大学歴史資料館調査研究報告第 20 集 上京遺跡・新町校地遺跡発掘調査報告書 同志社大学新創館（旧育真館）建替え工事に伴う発掘調査』
116.	同志社大学歴史資料館 『同志社大学歴史資料館館報 第 26 号』
117.	同志社大学文学部文化史学科 『日本列島における縄文磨製石斧の基礎的研究』
118.	京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2023 年度』
119.	京都大学総合博物館 『比叡山麓の縄文世界』
120.	大手前大学史学研究所 『大手前大学史学研究所紀要 第 18 号』
121.	曾爾村・曾爾村教育委員会 『曾爾村文化財調査報告書 第 3 集 太良路遺物散布地 曾爾高原森林公園整事業に伴う発掘調査報告書』
122.	奈良県立橿原考古学研究所 『青陵 第 172 号』
123.	奈良県立橿原考古学研究所 『奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第 129 冊 四条遺跡Ⅳ』
124.	奈良県立橿原考古学研究所 『奈良県文化財調査報告書 第 195 集 今出遺跡Ⅲ 京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う調査報告書①』
125.	奈良県立橿原考古学研究所 『奈良県遺跡調査概報（第一分冊） 2023 年度』
126.	奈良県立橿原考古学研究所 『橿原考古学研究所 年報 49 令和 4 年度』
127.	奈良県立橿原考古学研究所 『桜井茶臼山古墳の研究 再発掘調査と出土遺物再整理』
128.	奈良大学文学部文化財学科 『文化財学報 第 42 集』
129.	（公財）由良大和古代文化研究会 『研究紀要 第 28 集』
130.	鳥根県大田市教育委員会 『石見銀山遺跡発掘調査概要 31 岩見銀山 栃畑谷地区・町並み保存地区』
131.	岡山大学文明動態学研究所 『岡山大学構内遺跡発掘調査報告書 第 40 冊 鹿田遺跡 17 第 22 次調査地点 地域医療人育成センターおかやま新営に伴う発掘調査』
132.	岡山大学文明動態学研究所文化遺産マネジメント部門 『紀要 2022』
133.	広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門 『広島大学埋蔵文化財 調査研究紀要 第 15 号』
134.	広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門 『広島大学総合博物館ニューズレター Vol.17 HUM-HUM』
135.	山口大学埋蔵文化財資料館 『山口大学埋蔵文化財資料館年報 18 山口大学埋蔵文化財資料館年報 令和 2 年度』
136.	山口大学埋蔵文化財資料館 『山口大学埋蔵文化財資料館通信 第 34 号 てらこや埋文 2024 春号』
137.	愛媛大学法文学部考古学研究室 愛媛県越智郡上島町教育委員会 『愛媛大学法文学部考古学研究室報告第 19 冊 愛媛県越智郡上島町宮ノ浦遺跡Ⅷ 第 13 次発掘調査報告』
138.	愛媛大学埋蔵文化財調査室 愛媛大学埋蔵文化財調査室年報 2022 年度 2022 年度事業報告と文京遺跡 75 次調査・持田遺跡 15 次調査正式報告』
139.	九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室 『九州大学考古学研究室の記録Ⅲ 考古学研究室 65 周年記念』
140.	北九州市教育委員会 『北九州市文化財調査報告書第 175 集 宮ノ谷遺跡 個人住宅建築に伴う埋蔵文化財調査報告』
141.	北九州市教育委員会 『北九州市文化財調査報告書第 176 集 長野 A 遺跡Ⅸ区 個人住宅建築に伴う埋蔵文化財調査報告』
142.	熊本大学大学院人文社会科学研究所 『土器匠痕集成』
143.	熊本大学埋蔵文化財調査センター 『熊本大学埋蔵文化財調査センター年報 29 2022 年度』
144.	熊本大学大学院人文社会科学研究所 『土器を掘る ニュースレター第 7 号 22 世紀型考古学資料学の構築と社会実装をめざした技術開発型研究』
145.	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 『鹿児島大学埋蔵文化財調査センター調査報告書 第 20 集 脇田亀ヶ原遺跡・入来牧場』

第 3 部 第二次中期計画期間 における計画調査の成果

3-1 計画調査の目的と第二次中期計画期間

北海道大学の札幌キャンパスは、全域が埋蔵文化財の包蔵地に指定されている。包蔵されている埋蔵文化財は、国民共有の歴史的遺産であるとともに、北海道大学にとっての重要な学術資産でもある。埋蔵文化財調査センターでは、前身の埋蔵文化財調査室が昭和55年に設置されて以来、キャンパス内の各地で文化財保護法に対応した緊急調査を実施してきた。平成28年度からは、本学札幌キャンパス内の学術資産としての埋蔵文化財の性格を明らかにし、その適切な保護を実現していくため、計画調査を実施していくこととなった。

本学札幌キャンパスは、後氷期に形成された扇状地から沖積地にかけての地形の転換点に立地している。計画調査では、後氷期の内湾的地形環境下における陸化の進行とそこでの人類の定住的生業活動の開始および変容という人類史的課題に取り組んでいくため、キャンパス内を流れていた主要な河川であるサクシュコトニ川、セロンベツ川などの流路（本流・支流・氾濫域など）の位置を明らかにし、その流域に形成された縄文文化、続縄文文化、擦文文化、アイヌ文化期の活動痕跡のひろがり把握していくことを目的とする。また、これまで当センターが実施してきた緊急調査の成果に加えて、計画調査の実施によって遺跡情報に関する精度を高めることで、今後発生すると思われる緊急調査に対しても具体的で明確な研究課題が提供できるとともに、より適切・迅速に対応し、埋蔵文化財の保護・保存に資することも目的としている。

このような計画調査に関する理念に基づき、当センターでは、計画調査の第一次中期計画期間で、基盤情報整備を実施し、当センターがこれまで蓄積してきた埋蔵文化財に関する調査や埋没河道に関する情報を体系的に整理した。そのうち、埋蔵文化財調査位置図（図15）や埋没河道マップ（図16）の作成を進め、次章で述べるように埋蔵文化財に関するゾーン区分（図17）をおこない、図化した。

基盤情報整備の結果をさらに精査するとともに、第二次中期計画期間では、以下の3項目を検討課題として設定した。①サクシュコトニ川・セロンベツ川ならびにその支流の流路を把握し、流路において進行した下刻や堆積の時期・過程を解明する。②サクシュコトニ川・セロンベツ川ならびにその支流の流路とその周囲における遺構・遺物の分布範囲や地点の集中区域を把握する。流路沿いでの集落やキャンプサイトの有無、そして流路内における遺物・遺構の有無、とりわけ木製遺物の遺存の有無や性格を把握する。③今後蓄積されていく各種の考古・古環境データを有機的に統合させていくための時間的枠組みとして、キャンパス各区域間での層序対比を体系的に実施する。この3項目の検討に取り組むため、野外での計画調査に着手した。

3-2 基盤情報整備の追記

第一次中期計画期間で実施した基盤情報整備は、第二次計画調査期間で継続的に追記した。第一次中期計画期間で作製した埋蔵文化財調査位置図（図15）に情報を追加するとともに、遺構・遺物の出土が確認された地点と確認されていない地点の区別も表示した。基盤情報の整備では、こうした図化作業とともに各調査（工事）の名称、期間、規模、深度、発見遺物・遺構、埋没河道の確認の有無を一覧表で追加整理した。

キャンパス内の調査では、埋没河道が確認される場合があり、その蓄積の成果については埋没河道マップ（図16）に集約させた。航空写真や明治の古地図などによって、キャンパス内にはサクシュコトニ川とセロンベツ川の2つの流路があったことが既に把握されている。埋没河道マップの作成によって、その流路の位置をより詳細に把握することができるようになったとともに、大学病院付近から北西方向に流下し、北キャンパスの第二農場内を北へむかって流れていたと思われる流路の存在も明確に図示できることとなった。

以上のような調査情報の整理の結果、遺物・遺構が残されている地点の分布は、サクシュコトニ川・セロンベツ川ならびにその支流の流路の位置と密接に関連していることがあらためて確認された。そのため、埋没河道からの距離で100 m以内の範囲をAゾーン、100 m以上の範囲をBゾーンと仮称して区別することとなった（図17）。AゾーンとBゾーンでは、それぞれ予測される埋蔵文化財の分布やそこで必要となる計画調査の目的が異なることになる。平成28年度から開始した計画調査では、このゾーン区分を鑑み、調査地区の選定をおこなっていくこととなった。

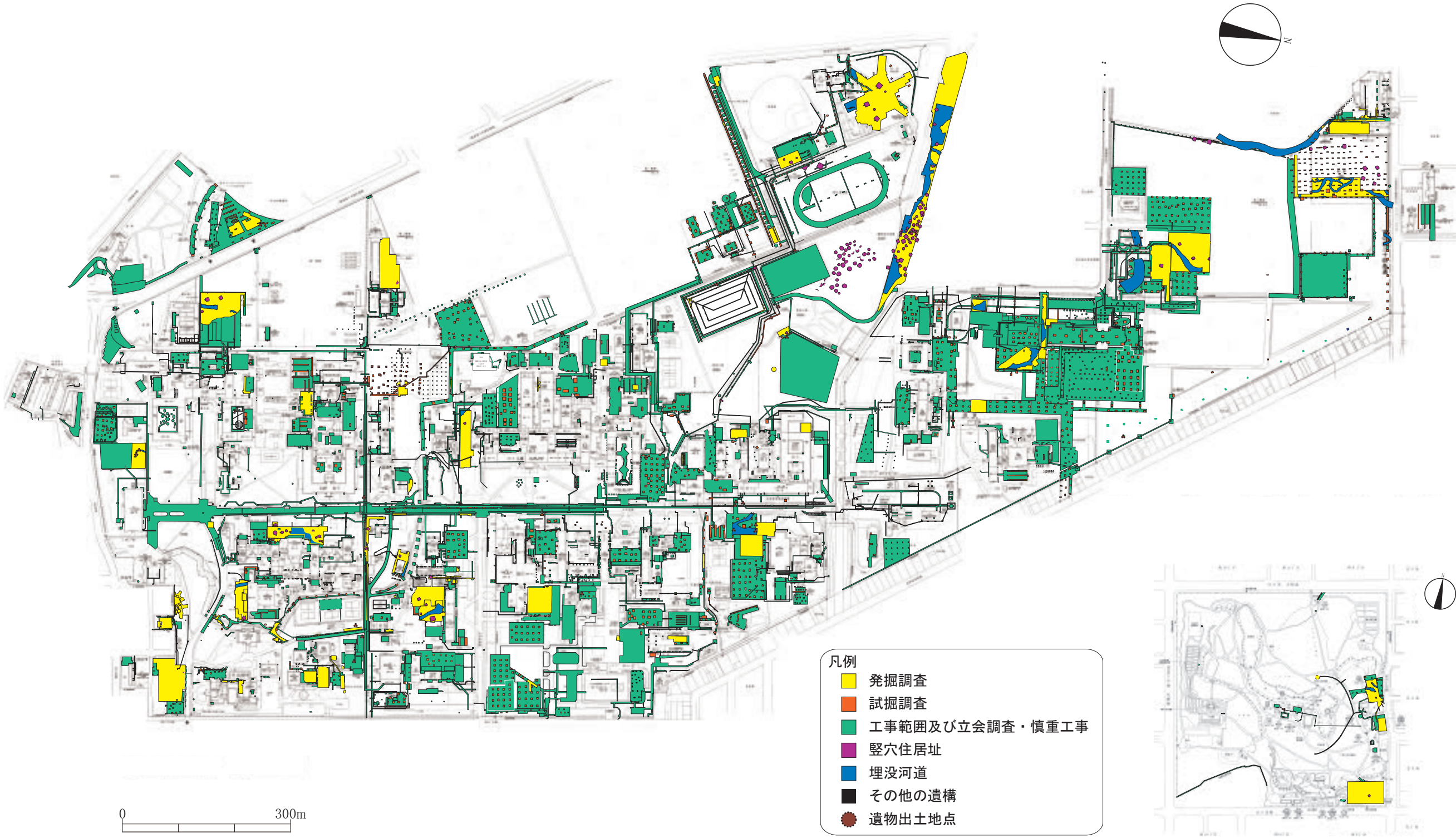


図15 北海道大学札幌キャンパス内における埋蔵文化財調査の位置

3-3 調査対象の地区と調査方法

第二次中期計画の目的を達するため、各年度における計画調査の実施地点の選定にあたっては、北海道大学埋蔵文化財調査センター運営委員会において、過去の周辺での調査成果をふまえ予想される成果を考慮にいれ、候補地としての調査地点を選定した後、候補地を管轄する大学内の部局との調整を経て最終的な調査地点が決定された。

令和2年度に計画調査を実施するのにあたっては、候補地として北キャンパス創成科学研究棟東地区を選定した。当該候補地周辺では、K39遺跡創成科学研究棟南地点（小杉他編2006）、同遺跡北キャンパス道路地点北側調査範囲（小杉編2011）、同遺跡北キャンパス総合研究棟6号館地点などがある。これまでの発掘調査の成果により、サクシュコトニ川の支流における縄文文化から擦文文化にかけての生活域の変遷が複数時期にわたって追跡できる可能性があった。

令和3年度から令和6年度までは、計画調査を実施するのにあたって、中央キャンパス大学病院地区を選定した（令和3年を第1次、令和4年を第2次、令和5年を第3次、令和6年を第4次と以下で呼称する）。当該候補地周辺では、K39遺跡大学病院ゼミナール棟地点（小杉他編2015）、K39遺跡大学病院雨水排水施設整備地点（小杉他編2015）、K39遺跡医学部陽子線研究施設地点（小杉他編2013）などがある。これまでの発掘調査の成果によって、サクシュコトニ川の支流の解明といった旧地形の把握、旧地形における遺構・遺物の密度の確認とともに、縄文文化から擦文文化にかけての人類活動の痕跡が残されていると予測された。

計画調査では、選定された対象候補地内での地形や埋蔵文化財の遺存の有無ならびにその内容を把握するため、一辺が2～4mの大きさの調査坑を、7m～10m程度の相互の間隔で配置し、地表下約3mの深さまで、場合によっては約4mの深さまで掘削することによって調査を実施した。掘削は主に重機が用いられた。しかし、遺物・遺構の包含が予想される層準に関しては人手を併用して掘削が進められるように努めた。

調査坑の範囲の平面記録をおこなう際には、北海道大学札幌キャンパス全体を対象に設定されたグリッドを用い、トータルステーションによって座標位置を記録した。遺物が発見された場合は、その状態を写真撮影するとともに、種別・層準を記録した後、トータルステーションで座標位置を取得し、取り上げをおこなった。調査坑や遺構の平面図・断面図の記録は、写真撮影の後、人手で図化した。平面図はトータルステーションで座標位置を取得し、図化した。断面図は、主に1/20の縮尺で記録した。

上記の方法で調査を実施した後、調査終了後は埋め戻し、原状復帰させた。

3-4 調査成果

1. 北キャンパス創成科学研究棟東地区

(a) 調査の概要

本地区での計画調査は、創成科学研究棟南地点および北キャンパス道路地点北側調査範囲の調査で確認された縄文文化の人類活動の痕跡が北側にひろがっていなかったのか否かを確認することが目的となった。加えて、本地区より北側約400mの距離に位置する、平成18年度に試掘調査が実施された札幌駅前通樹木移植工事地点のTP01では、縄文文化のものと考えられる遺物が出土しており（小杉他編2008）、その周辺では南側から北側へ流れていた流路の存在が予測できた。その流路の位置を南側へたどっていくと本地区周辺にあることが予測できるので、本地区での調査によってその正確な位置を把握することも目的として取りあげた。

本地区での計画調査は、令和2年6月30日付で北海道教育委員会に届出をおこない、令和2年8月20日～10月2日の期間、194m²を対象として実施した。地形面の把握や層序の対比、遺構・遺物のひろがりの確認を目的に、計画調査の対象地内に計26箇所の調査坑を設定し、調査を実施した（図18、20）。調査目的の一つである縄文文化の遺構・遺物は、創成科学研究棟南地点（小杉他編2006）での調査成果によって、地表下約1mの深さに残されていることが予想された。ただし、地形面の把握や層序、とくに縄文文化晩期から縄文文化初頭にかけての時期に当該区域にひろがっていたと予測される泥炭層の確認が

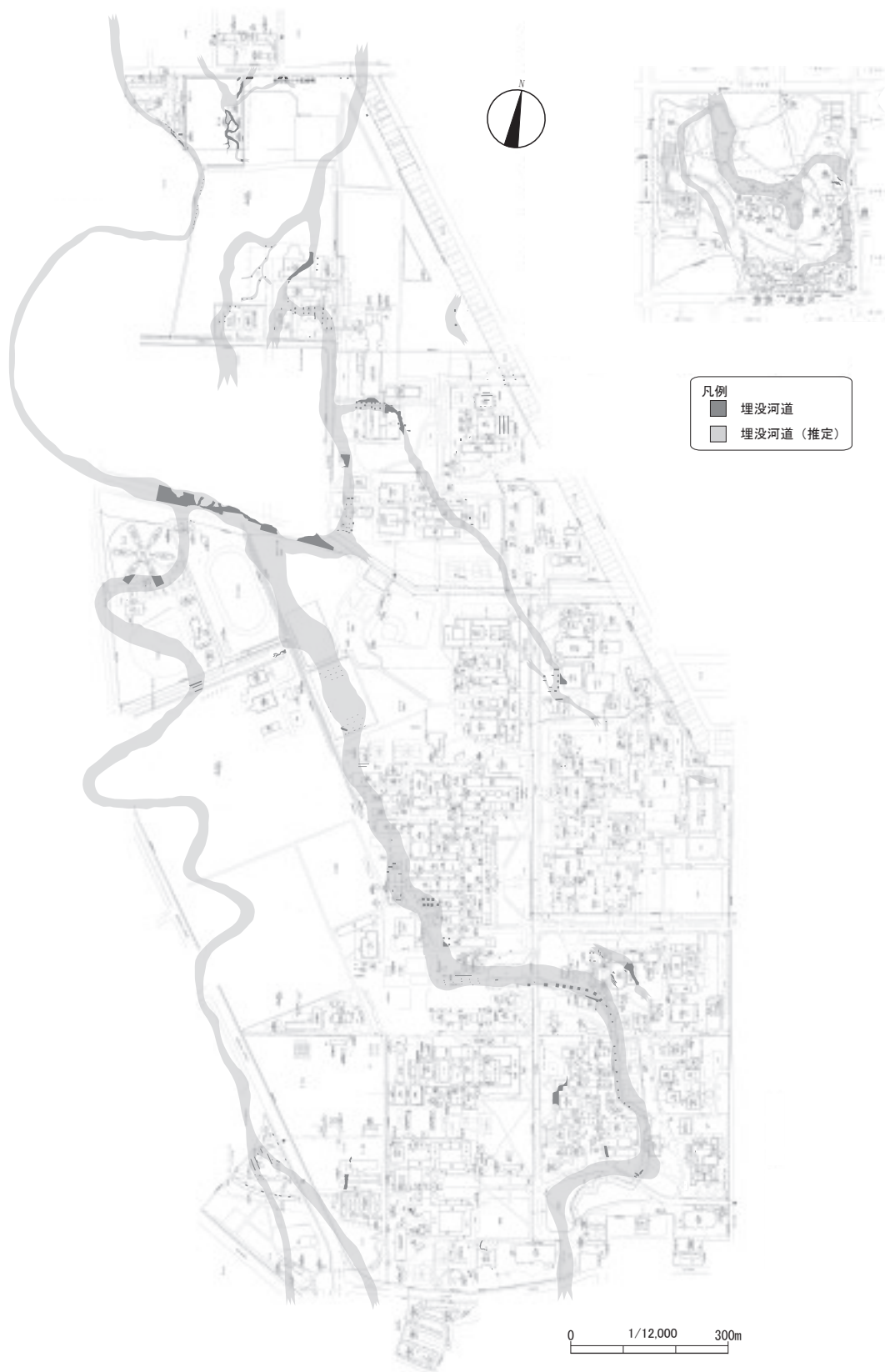


図 16 北海道大学札幌キャンパス内埋没河道マップ

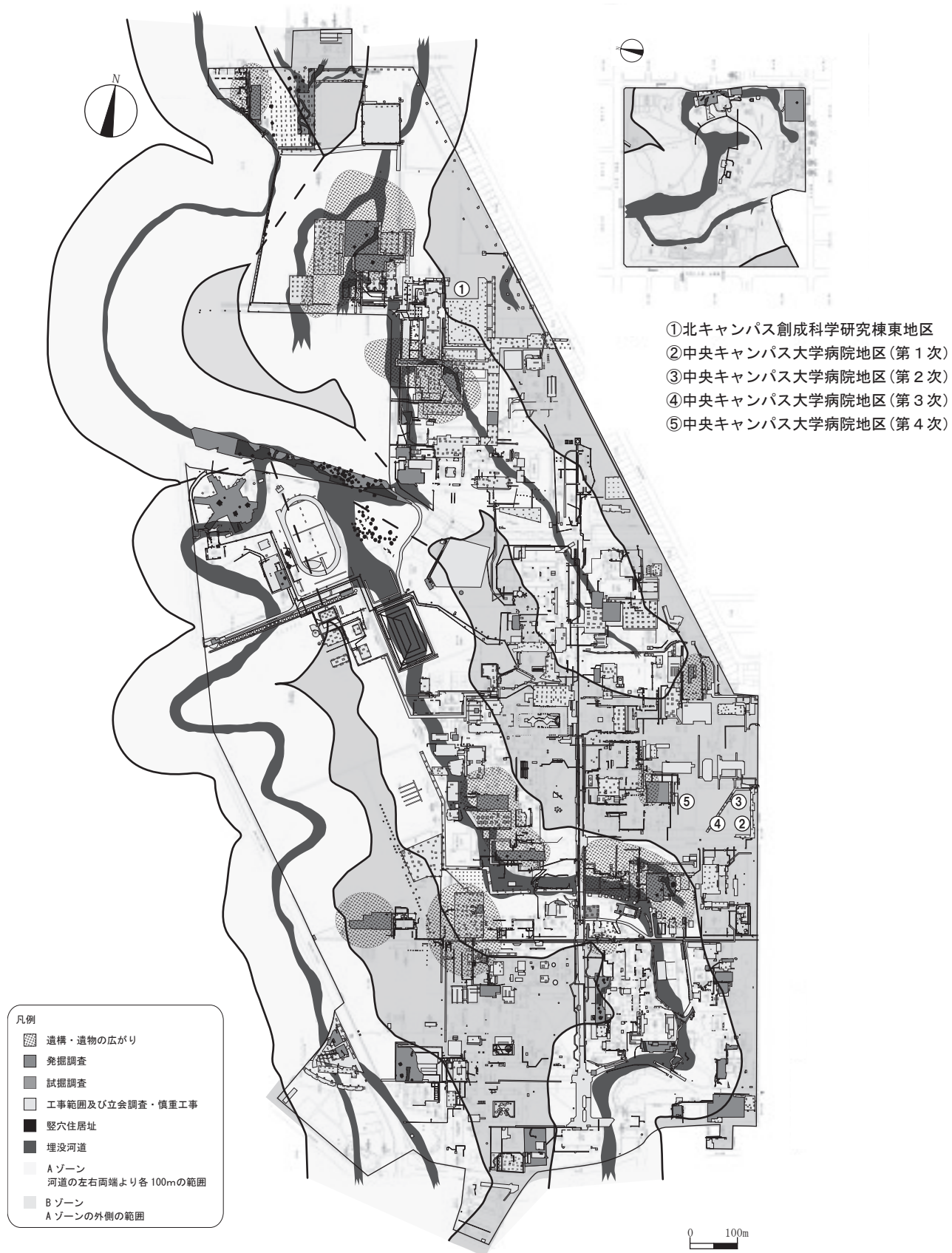


図17 計画調査位置とゾーン区分

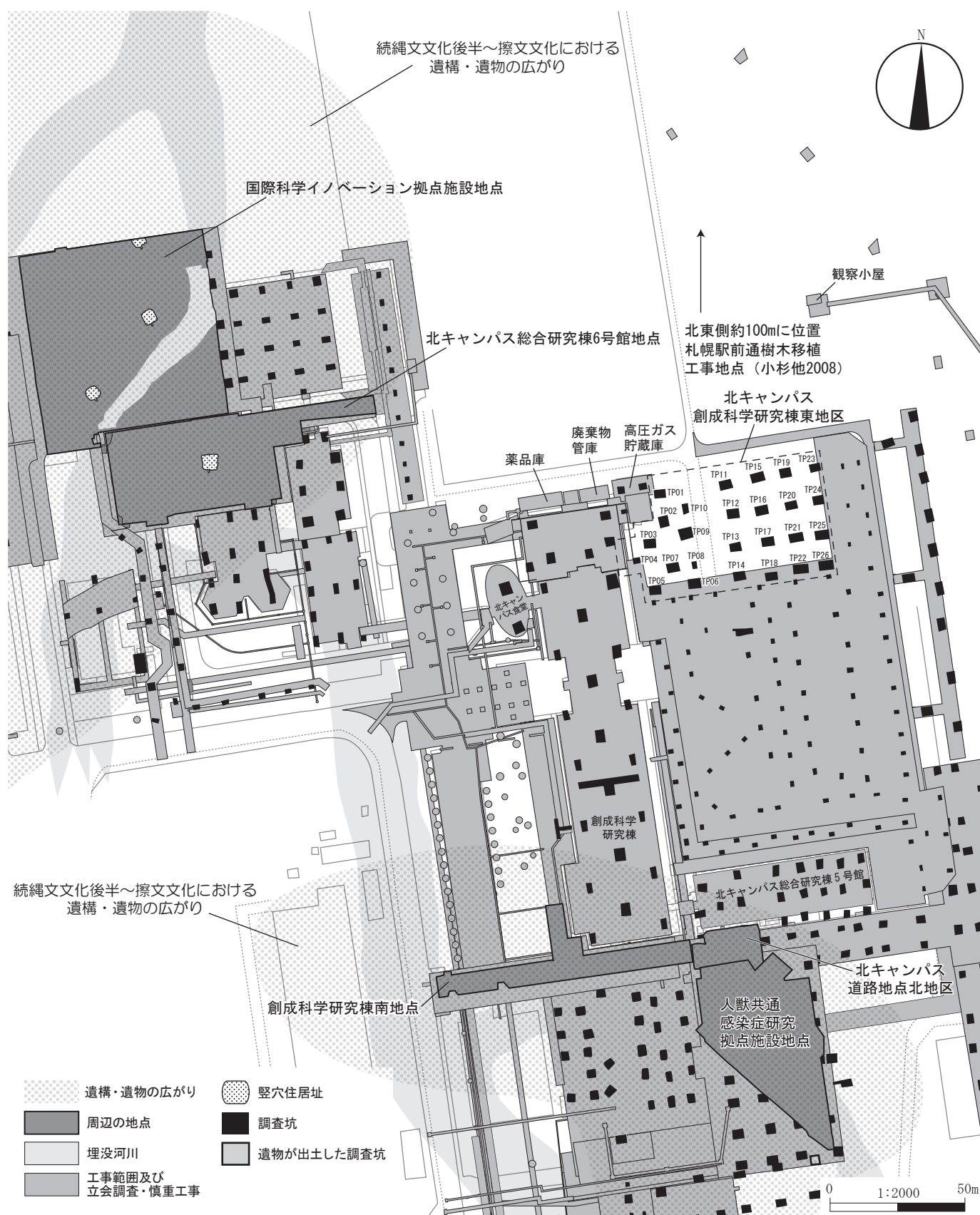


図 18 北キャンパス創成科学研究棟東地区と周辺の調査地点



図19 中央キャンパス大学病院地区と周辺の調査地点

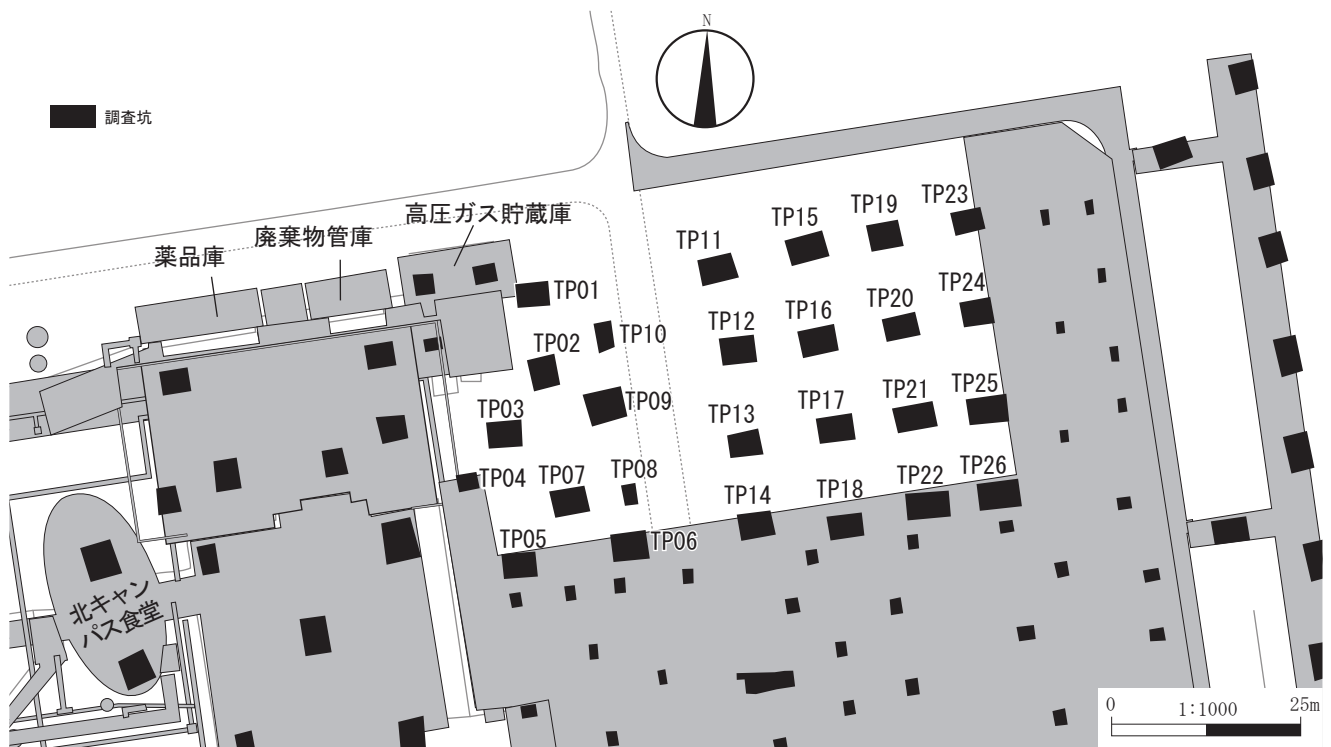


図 20 北キャンパス創成科学研究棟東地区の調査坑の位置

必要と考えた。そのため、基本的に各調査坑では地表面から約 3 m の深さまで掘り下げて調査を実施した。約 4 m の深さまで調査を実施している調査坑もある。ただし、軟弱な表層地質であったこともあり、安全面への配慮から、地表下約 1.5 m の深さまで掘り下げるととどまった調査坑があった。各調査坑の面積は約 4 m²～約 9 m²である。

本地区での計画調査によって、旧地形の把握ができた一方、当該対象地では遺構・遺物は発見されなかった。

(b) 層序

本地区は、豊平川扇状地の北側にひろがる沖積低地に立地していると考えられる。本地区で確認された表層層序は、基本的に河川の営力によって運ばれてきた堆積物とその土壌化を受けたものから構成されていると考えられる。そうした性質を鑑み、堆積過程とその土壌化の履歴に留意しながら、それぞれの調査坑で層序の区分と記載を実施した(図 21)。観察された層序は以下の通りである。

各調査坑で確認された層序は、相互に共通性が高かったので、ここでは TP 09 を代表させて説明する。1 層は客土である。2 層は黒褐色シルトである。土壌化の影響を受けている層準と考えられる。削平されて本層が残されていない調査坑も多く認められた。3 層は褐色の極細粒～細粒砂で、ラミナが発達する。4 層は粘土で、粒径や色調の違いにより 4a 層～4c 層に細分した。4a 層と 4c 層はにぶい褐色、4b 層は灰褐色を呈する。5 層は黒色泥炭質粘土や粘土と灰褐色やにぶい褐色の粘土の互層である。黒色の泥炭質粘土や粘土には有機物を多く含んでいる。6 層は黒褐色の泥炭質粘土である。有機物を多量に含む。7 層は黒色の泥炭である。8 層は、灰褐色粘土である。9 層は褐灰色の極細粒砂である(図 21)。他の調査坑では極細粒砂の層の下位で粘土の堆積が確認されている。

層群としては、黒褐色のシルト(2 層)、褐色の砂(3 層)、にぶい褐色や灰褐色の粘土(4 層)、黒色の泥炭・粘土と灰褐色の粘土の互層(5～8 層)、褐灰色の砂(9～10 層)に大きく区分できる。層群を構成する各層の厚さや粒径・色調には変化が認められるものの、層群の前後関係や基本的な特性は各調査坑間で共通している。埋没河道は今回の調査範囲内からは確認されなかった。構内の標準層序(吉崎編 1995)と対比すると、2 層～3 層が標準層序Ⅱ層、4 層以下が標準層序Ⅲ層以下に対応すると推測する。

黒色の泥炭・粘土と灰褐色の粘土の互層(5～8 層)に対比できる層準は、人獣共通感染症研究拠点施設地点(小杉他編 2016)や北キャンパス人獣共通感染症リサーチセンター南地区(小杉他編 2021)でも確認されている。北キャンパス区域に共通して

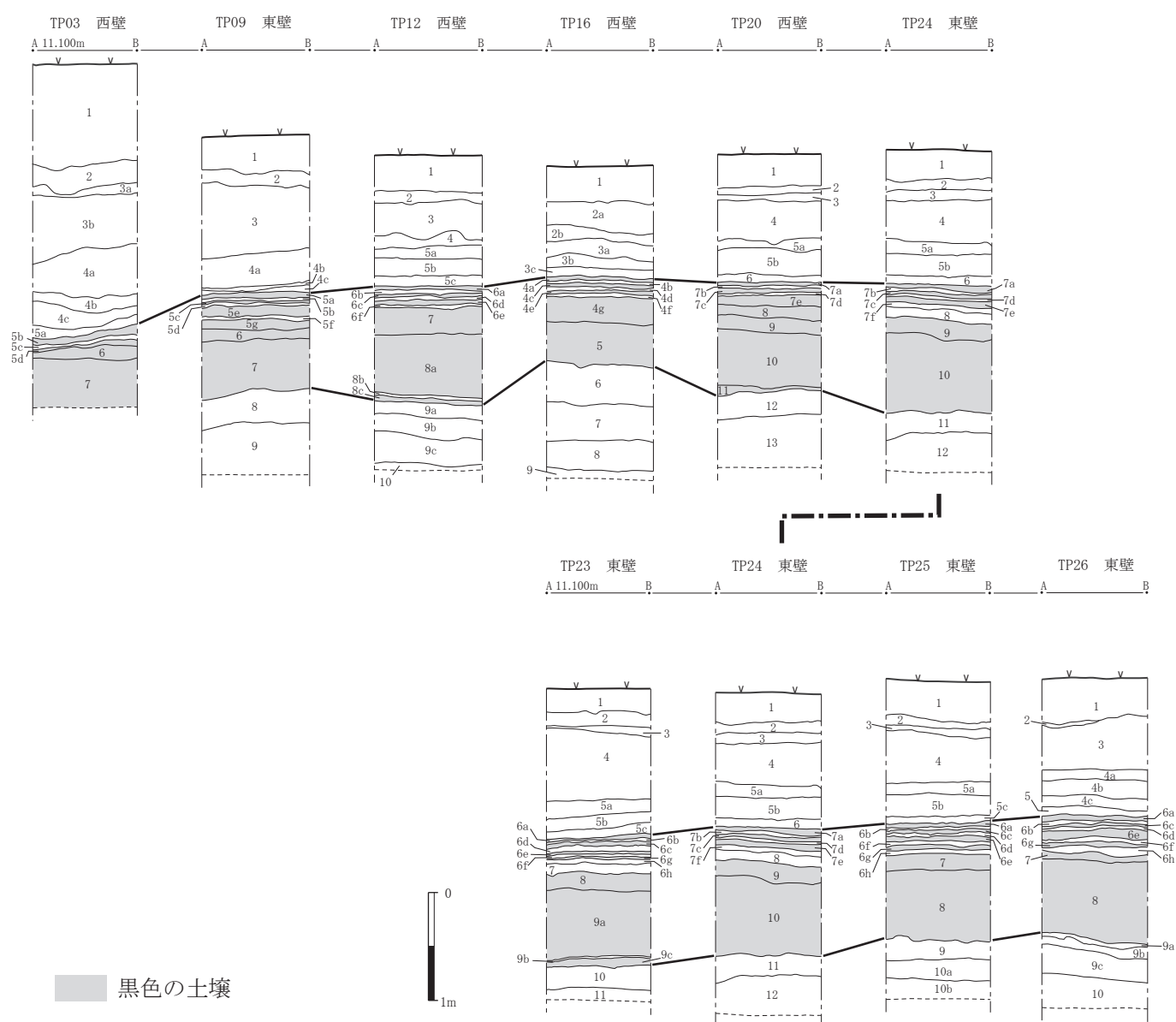


図 21 北キャンパス創成科学研究棟東地区セクション対比図

みられる層群であるといえる。人獣共通感染症研究拠点施設地点や北キャンパス人獣共通感染症リサーチセンター南地区での調査成果にもとづくと、これらの層群は、縄文文化晩期から続縄文文化初頭にかけての時期に形成されたものと考えられる。当該期の北キャンパス区域には泥炭地が広域に形成されていたことになり、同時期の中央キャンパス・南キャンパス区域とは異なる状況であったことが想定される（小杉他編 2021）。続縄文文化の半ば以降は、北キャンパス区域では泥炭地から氾濫原に環境が変化したと考える。K 39 遺跡創成科学研究棟南地点や K 39 遺跡北キャンパス道路地点北側調査範囲での調査成果からも明らかなように、本地区周辺では新たな流路の形成とともに、続縄文文化後半の人類活動が展開されるようになる。本地区でも同様の堆積環境の変化が確認された。

(c) 遺構と遺物

遺物・遺構は確認されなかった。

表 12 北キャンパス創成科学研究棟東地区の土層観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP 03 西壁	1						客土.
	2	7.5 YR 3/1	黒褐色	シルト	やや強	やや強	
	3a	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	極細粒砂	中	やや弱	
	3b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	極細粒～細粒砂	やや弱	やや弱	
	4a	7.5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	中	
	4b	10 YR 4/1	褐灰色	シルト質粘土	強	中	
	4c	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	やや強	
	5a	2.5 Y 4/1	黄灰色	粘土	強	やや強	
	5b	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	有機物含む.
	5c	10 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	やや強	
	5d	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	有機物含む.
	6	5 Y 3/2	オリーブ黒色	泥炭質粘土	やや強	やや強	
	7	10 YR 2/3	黒褐色	泥炭	中	中	倒木含む.
TP 09 東壁	1						客土.
	2	7.5 YR 3/2	黒褐色	シルト	やや弱	やや強	
	3	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒～細粒砂	やや弱	弱	
	4a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	4b	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	中	
	4c	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	5a	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭質粘土	強	やや強	
	5b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	5c	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	強	
	5d	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	5e	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	
	5f	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	強	
	5g	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	
TP 12 西壁	1						客土.
	2	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	中	
	3	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒～細粒砂	弱	やや弱	
	4	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	極細粒砂質シルト	やや強	中	
	5a	7.5 YR 6/4	にぶい橙色	粘土	強	やや強	
	5b	7.5 YR 4/2	灰褐色	シルト	強	やや強	
	5c	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	6a	10 YR 2/1	黒色	泥炭	中	中	
	6b	10 YR 4/3	褐色	粘土	強	やや強	
	6c	2.5 Y 2/1	黒色	粘土	強	中	
	6d	10 YR 4/3	褐色	粘土	強	やや強	
	6e	2.5 Y 2/1	黒色	粘土	強	中	
	6f	10 YR 4/3	褐色	粘土	強	やや強	
TP 16 西壁	1						客土.
	2a	2.5 Y 4/6	オリーブ褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	2b	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	3a	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	強	中	
	3b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
	3c	7.5 YR 6/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	4a	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭	やや強	中	
	4b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	中	
	4c	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	
	4d	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	中	
	4e	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	
	4f	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	中	
	4g	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	やや強	
TP 20 西壁	1						客土.
	2	7.5 YR 3/1	黒褐色	シルト	中	中	
	3	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	中	
	4	10 YR 4/6	褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	5a	10 YR 6/3	にぶい黄橙色	シルト	やや強	中	
	5b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	6	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	強	
	7a	10 YR 2/1	黒色	泥炭	やや強	中	
	7b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	7c	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	強	
	7d	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	7e	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	強	
	8	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	強	
TP 23 東壁	1						客土.
	2	7.5 YR 3/1	黒褐色	シルト	中	中	
	3	7.5 YR 4/4	褐色	シルト	中	やや弱	
	4	2.5 Y 4/6	オリーブ褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	5a	5 Y 5/2	灰オリーブ色	シルト質粘土	やや強	中	
	5b	2.5 Y 4/2	暗灰黄色	粘土	やや強	やや強	
	5c	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	中	
	6a	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭質粘土	中	中	
	6b	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	やや強	やや強	
	6c	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	中	
	6d	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	やや強	やや強	
	6e	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	中	
	6f	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	やや強	やや強	
TP 24 東壁	1						客土.
	2	7.5 YR 3/1	黒褐色	シルト	中	中	
	3	7.5 YR 4/4	褐色	シルト	中	中	
	4	5 YR 4/4	にぶい赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	5a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
	5b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6	7.5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	やや強	
	7a	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭質粘土	中	中	
	7b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	7c	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	中	
	7d	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	7e	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	中	
	7f	10 YR 4/2	灰黄褐色	粘土	強	中	
TP 25 東壁	1						客土.
	2	10 YR 3/1	黒褐色	シルト	中	やや強	
	3	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	中	
	4	5 YR 4/4	にぶい赤褐色	極細粒～細粒砂	やや弱	弱	
	5a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	やや強	
	5b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト質粘土	強	やや強	有機物含む.
	5c	7.5 YR 6/3	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6a	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	中	
	6b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	6c	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	中	
	6d	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	6e	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	中	
	6f	7.5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	中	
TP 26 東壁	1						客土.
	2	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	やや弱	
	3	2.5 YR 4/6	赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	4a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
	4b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	4c	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	強	中	
	5	10 YR 5/2	灰黄褐色	粘土	強	中	
	6a	10 YR 2/2	黒褐色	泥炭	中	やや弱	
	6b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6c	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強	
	6d	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6e	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強	
	6f	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	中	
TP 27 東壁	1						客土.
	2	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	やや弱	
	3	2.5 YR 4/6	赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	4a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
	4b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	4c	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	強	中	
	5	10 YR 5/2	灰黄褐色	粘土	強	中	
	6a	10 YR 2/2	黒褐色	泥炭	中	やや弱	
	6b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6c	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強	
	6d	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6e	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強	
	6f	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	中	
TP 28 東壁	1						客土.
	2	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	やや弱	
	3	2.5 YR 4/6	赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	4a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	中	
	4b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	4c	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	強	中	
	5	10 YR 5/2	灰黄褐色	粘土	強	中	
	6a	10 YR 2/2	黒褐色	泥炭	中	やや弱	
	6b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6c	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強	
	6d	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6e	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強	
	6f	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	中	

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考	
TP 23 東壁	1						客土.	
	2	7.5 YR 3/1	黒褐色	シルト	中	中		
	3	7.5 YR 4/4	褐色	シルト	中	やや弱		
	4	2.5 Y 4/6	オリーブ褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱		
	5a	5 Y 5/2	灰オリーブ色	シルト質粘土	やや強	中		
	5b	2.5 Y 4/2	暗灰黄色	粘土	やや強	やや強		
	5c	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	中		
	6a	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭質粘土	中	中		
	6b	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	やや強	やや強		
	6c	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	中		
	6d	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	やや強	やや強		
	6e	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	中		
	6f	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	やや強	やや強		
	6g	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	中		
6h	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	やや強	やや強			
7	10 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	中			
	8	2.5 Y 3/1	黒褐色	泥炭質粘土	中	中		
	9a	10 YR 2/1	黒色	泥炭	やや弱	やや弱		
	9b	2.5 Y 4/1	黄灰色	粘土	中	中		
	9c	10 YR 2/1	黒色	泥炭	やや弱	やや弱		
	10	5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	やや弱		
	11	7.5 Y 4/1	灰色	細粒砂	やや弱	やや弱		
	TP 24 東壁	1						客土.
		2	7.5 YR 3/1	黒褐色	シルト	中	中	
		3	7.5 YR 4/4	褐色	シルト	中	中	
4		5 YR 4/4	にぶい赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱		
5a		7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	中		
5b		7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	中		
6		7.5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	やや強		
7a		7.5 YR 2/1	黒色	泥炭質粘土	中	中		
7b		7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強		
7c		10 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	中		
7d		7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強		
7e		10 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	中		
7f		10 YR 4/2	灰黄褐色	粘土	強	中		
8		7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	中		
9	7.5 YR 3/1	黒褐色	泥炭質粘土	やや強	中			
10	7.5 YR 2/1	黒褐色	泥炭	やや弱	やや弱			
11	7.5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	やや強			
12	7.5 YR 4/1	褐灰色	細粒砂	やや強	中			
TP 25 東壁	1						客土. 有機物含む.	
	2	10 YR 3/1	黒褐色	シルト	中	やや強		
	3	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	中		
	4	5 YR 4/4	にぶい赤褐色	極細粒～細粒砂	やや弱	弱		
	5a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	やや強		
	5b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト質粘土	強	やや強		
	5c	7.5 YR 6/3	にぶい褐色	粘土	強	中		
	6a	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	中		
	6b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強		
	6c	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	中		
	6d	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強		
	6e	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	中		
	6f	7.5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	中		
	6g	7.5 YR 2/1	黒色	粘土	強	中		
6h	7.5 YR 5/2	灰褐色	粘土	強	中			
7	7.5 YR 2/1	黒色	泥炭	中	やや弱			
8	5 Y 2/2	オリーブ黒色	泥炭	やや弱	やや弱			
9	7.5 Y 4/1	灰色	粘土	強	中			
10a	5 Y 4/1	灰色	極細粒砂	やや強	やや弱			
10b	10 YR 4/1	褐灰色	細粒砂	中	やや弱			
TP 26 東壁	1						客土.	
	2	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	やや弱		
	3	2.5 YR 4/6	赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱		
	4a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	中		
	4b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強		
	4c	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	強	中		
	5	10 YR 5/2	灰黄褐色	粘土	強	中		
	6a	10 YR 2/2	黒褐色	泥炭	中	やや弱		
	6b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中		
	6c	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強		
	6d	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中		
	6e	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強		
	6f	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	中		
	6g	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強		
6h	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	中			
7	7.5 YR 3/1	黒褐色	粘土質泥炭	中	やや弱			
8	7.5 YR 2/1	黒褐色	泥炭	やや弱	やや弱			
9a	7.5 Y 4/1	褐灰色	粘土	強	中			
9b	10 YR 5/2	灰黄褐色	粘土質シルト	強	中			
9c	10 YR 4/2	灰黄褐色	粘土	強	中			
10	10 Y 4/1	灰色	細粒砂	やや弱	弱			

(d) 小結

計画調査を実施した結果、遺物・遺構は確認されなかった一方、本地区での古地形変遷を把握することができた。本地区を含めた周辺域にどのような地形環境がひろがり、そこで人間活動がいつ頃、どのように展開されるようになったのかについての見通しをここで示す。

かつて実施した札幌駅前通樹木移植工事地点での調査からは、本地区周辺から北側にむけて北キャンパス内に存在していた流路が予測できることとなった。しかし、本地区内ではその流路の埋没河道を確認することはできなかった。本地区よりもさらに東側に流路があった可能性が考えられる。本地区の東側に隣接する区域に関しては、北大構内の遺跡 28 の第Ⅲ章で報告した（小杉他編 2022）ように、令和 2 年度に北キャンパス第二農場東地区排水設備工事として確認調査が実施されている。その調査対象範囲の北側に位置する TP 01 において埋没河道が確認されており、これが上述の流路に対応する可能性が高い。この調査では河谷の一部を把握したにとどまっているため、その開析の時期や埋積の過程を把握するにはいたっていない。周辺での今後の調査によって解明されなければならないであろう。また、創成科学研究棟南地点（小杉他編 2006）や国際科学イノベーション拠点施設地点（小杉他編 2016）で確認された流路の埋没河道も今回の調査では確認されなかった。両地点で確認された埋没河道は同じ一連の流路であった可能性が高い。それは本地区よりもさらに西側にあったことになろう。

本地区の調査坑では堆積層は概ね水平に堆積していたため、平坦な地形面がひろがっていたとみられる。その平坦地では縄文文化の人類活動との関連が予測される。サクシュコトニ川の支流に相当する流路は、本地区よりもさらに東側あるいは西側に想定されることになる。本地区の周辺の創成科学研究棟南地点で検出されている縄文文化後半の遺構や遺物は、今回の計画調査では確認されなかった。そのため、当該期の遺構・遺物の北側へのひろがり、本地区周辺までは及んでいなかったと考える。

2. 中央キャンパス大学病院地区（第1次）**(a) 調査の概要**

令和 3 年度の調査は、大学病院ゼミナール棟地点（小杉他編 2015）、大学病院雨水排水施設整備地点（小杉他編 2015）、医学部陽子線研究施設地点（小杉他編 2013）で確認された縄文文化・擦文文化の遺構・遺物包含層のひろがりの確認、ならびにサクシュコトニ川の支流の流路の位置を確定することを目的に実施された。本地区は、現況としては駐車場として利用されている。過去には医学部の校舎が本地区の西側で建設され、解体されていることが記録に残されている。しかし、その工事深度は不明である。そうした過去の工事が本地区での自然堆積層の遺存にどの程度影響を与えているのかを把握することも、今後の開発事業への対処を考えていく際には重要となるため、そうした点の把握も今回の調査の目的となった。

本地区での計画調査は、令和 3 年 6 月 21 日付で北海道教育委員会に発掘調査の届出をおこなって実施された。令和 3 年 7 月 26 日～8 月 31 日の期間、153 m² を対象に実施した。調査対象地は駐車場として利用されているため、調査区画内を二期に分けて利用を制限し、安全対策を実施しながら調査をおこなった。

本地区での計画調査は、予想される遺構・遺物包含層の深度と調査の安全性を考慮し、調査坑の位置をアスファルト・カットした後に、重機を用いて地表下約 2.0～約 3.0 m の深さまで重機と人力で掘り下げた。相互に 7 m～10 m 程の間隔をあけて調査坑 17 基を設置し、埋蔵文化財の有無を確認するための調査を実施した。遺物・遺構の包含が予測された層準に関しては、人手によって掘削を進めた。併せて、TP 16 では 2 つの地層を対象として、年代測定をおこなった。

調査の結果、いずれの調査坑においても自然堆積層から遺構や遺物は確認されなかった。ただし、近現代の資料として客土から土管が確認された。茶褐色の釉薬が表裏面に観察できる。戦前の資料と考える。

(b) 層序

本地区は、豊平川扇状地の北側にひろがる沖積低地に立地している。本地区で確認された表層層序は、基本的に河川の営力によって運ばれてきた堆積物とその土壌化を受けたものから構成されていると考えられる。そうした性質を鑑み、堆積過程とその土壌化の履歴に留意しながら、それぞれの調査坑で層序の区分と記載を実施した（図 22）。

本地区内で北側に位置する TP 01～03・06・11・12・14～17 と、南側に位置する TP 04・05・08～10・13 では観察された層相が大きく異なっていた。これは、本地区内での微地形面の異なりに対応するものと考えられる。北側に位置する調査坑では、流路の周辺に堆積した氾濫原の堆積物が確認できた。TP 16 を代表させて説明すると、1 層は客土である。2 層は黒褐色のシルトである。土壌化が発達している層準である。3 層は褐色の砂である。4 層はシルトから極細粒砂質シルトであり、4a 層のにぶい褐色極細粒砂質シルト、4b 層のにぶい橙色シルト、4c 層の黄褐色シルトに細分された。5 層は極細粒砂から極細粒砂質シルトであり、オリーブ褐色の極細粒砂である 5a 層、黄褐色の極細粒砂質シルトである 5b 層、褐色の極細粒砂である 5c 層

表 13 中央キャンパス大学病院地区（第1次）の土層観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP 01 北壁	1						客土.
	2	5 Y 4/1	灰色	極細粒砂	中	中	有機物を微量含む.
	3	10 Y 4/1	灰色	粘土	やや強	中	
	4a	7.5 Y 4/1	灰色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	4b	2.5 GY 5/1	オリーブ灰色	細粒砂	中	やや弱	
	4c	5 GY 4/1	灰色	シルト	やや強	中	有機物含む.
	5	2.5 GY 4/1	暗オリーブ灰色	粘土	強	やや強	
	6	10 GY 4/1	暗緑灰色	極細粒砂質シルト	やや強	中	
	7	2.5 GY 4/1	暗オリーブ灰色	粘土	強	中	
	8	5 GY 4/1	暗オリーブ灰色	粘土	強	やや強	有機物を含む.
TP 02 東壁	1						客土.
	2a	7.5 YR 3/4	暗褐色	細粒砂	弱	弱	有機物を多く含む.
	2b	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	2c	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂質シルト	やや弱	弱	
	3	10 YR 5/6	黄褐色	シルト	やや弱	中	
	4	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	有機物含む.
	5a	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	中	
	5b	2.5 Y 5/1	黄灰色	シルト質粘土	やや強	中	
	6	5 Y 4/1	灰色	細粒砂	弱	やや弱	
	7	5 Y 5/1	灰色	粘土	やや強	中	客土.
TP 04 東壁	1						客土.
	2	5 YR 3/6	暗赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	有機物を含む.
	3a	5 YR 4/6	赤褐色	シルト	中	中	
	3b	5 YR 3/4	暗赤褐色	細粒～中粒砂	弱	弱	
	3c	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂質シルト	中	やや弱	
	4	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒～細粒砂	中	弱	有機物含む.
	5	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	極細粒砂	中	弱	
	6	2.5 Y 5/2	暗灰黄色	シルト	やや強	中	
	7	2.5 Y 4/4	オリーブ褐色	極細粒砂	弱	弱	
TP 06 北壁	1						客土.
	2a	10 YR 4/6	褐色	極細粒～細粒砂	弱	やや弱	有機物含む.
	2b	10 YR 4/4	褐色	極細粒砂	やや弱	中	
	2c	7.5 YR 4/3	褐色	細粒砂	やや弱	やや弱	
	3	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂質シルト	やや強	中	
	4a	5Y4/1	灰色	細粒砂	やや弱	やや弱	有機物を含む.
	4b	5 G 4/1	暗緑灰色	シルト質極細粒砂	中	やや弱	
	4c	2.5 GY 4/1	暗オリーブ灰色	極細粒砂	中	やや弱	
	5a	10 YR 4/1	灰色	粘土	やや強	中	
	5b	7.5Y4/2	灰オリーブ色	粘土	強	中	有機物を含む.
	6	5 Y 4/1	灰色	極細粒砂	弱	やや弱	
	7a	10 Y 4/1	灰色	粘土	強	やや強	
	7b	7.5 Y 3/1	オリーブ黒色	粘土	強	やや強	
	7c	5 GY 4/1	暗オリーブ灰色	粘土	強	中	有機物を含む.
TP 12 北壁	1						客土.
	2	5 YR 3/6	暗赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	有機物を含む.
	3	7.5 YR 5/8	明褐色	シルト	やや強	中	
	4	10 YR 5/6	黄褐色	粘土	強	中	
	5a	7.5 YR 5/6	明褐色	シルト	やや強	やや強	
	5b	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂質シルト	中	やや弱	有機物を含む.
	6	2.5 Y 5/3	黄褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	7	2.5 Y 5/4	黄褐色	粘土	強	やや強	
	8	10 YR 6/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	9a	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土	強	やや強	有機物を含む.
	9b	10 YR 4/2	灰黄褐色	粘土	強	強	
	9c	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	やや強	中	
	10	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
TP 16 西壁	1						客土.
	2	7.5 YR 2/2	黒褐色	シルト	やや弱	やや弱	有機物を含む.
	3	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	4a	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
	4b	7.5 YR 6/4	にぶい橙色	シルト	強	中	
	4c	10 YR 5/6	黄褐色	シルト	やや強	中	有機物を含む.
	5a	2.5 Y 4/6	オリーブ褐色	極細粒砂	中	弱	
	5b	10 YR 5/6	黄褐色	極細粒砂質シルト	やや強	中	
	5c	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	やや弱	弱	
	6a	2.5 Y 5/3	黄褐色	粘土	やや強	やや強	有機物を含む.
	6b	2.5 Y 3/1	黒褐色	粘土	やや強	中	
	6c	5 Y 5/6	オリーブ色	粘土	やや強	中	
	7	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	やや強	やや弱	
	8a	2.5 Y 4/1	灰黄色	粘土	やや強	中	有機物を含む.
	8b	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	中	
	8c	2.5 Y 4/1	黄灰色	粘土	中	中	
	8d	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	やや強	やや強	
	9	2.5 Y 4/1	黄灰色	粘土	強	やや強	有機物を含む.
TP 17 北壁	1						客土.
	2	7.5 YR 2/2	黒褐色	シルト	やや弱	中	有機物を含む.
	3	7.5 YR 4/6	褐色	シルト	中	中	
	4	5 YR 3/6	暗赤褐色	極細粒～細粒砂	やや弱	弱	
	5a	7.5 YR 4/4	褐色	シルト	中	やや弱	
	5b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	やや強	有機物を含む.
	5c	7.5 YR 4/4	褐色	シルト	中	中	
	6a	10 YR 4/3	にぶい黄褐色	シルト質極細粒砂	強	やや弱	
	6b	2.5 Y 5/3	黄褐色	シルト	やや強	中	
	6c	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂質シルト	やや強	中	有機物を含む.
	7	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	極細粒砂	中	やや弱	
	8a	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土	強	やや強	
	8b	10 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	中	
	9	5 Y 4/1	灰色	シルト	中	中	有機物を含む.
	10	5 Y 5/1	灰色	極細粒砂	やや弱	弱	
	噴砂	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂			

に細分された。6層も細粒の堆積物であり、黄褐色の粘土である6a層、黒褐色のシルトである6b層、オリーブ褐色の粘土である6c層に細分できた。7層は、にぶい褐色の極細粒砂である。細粒の堆積物である8層は、灰黄褐色の粘土である8a層、有機物を含み黒褐色の粘土である8b層、黄灰色の粘土である8c層、黒褐色の粘土である8d層に4細分された。9層は黄灰色粘土である。色調や粒径、堆積構造の変化からみて、層群としては、黒褐色のシルトである2層、褐色のシルトや砂である3～5層、粘土をマトリクスとし、部分的に砂が挟在する6～9層に大きく区分できる。6～9層では色調の変化が互層状に認められた。3層、4層が標準層序Ⅱ層、6層がⅢ層もしくはⅣ層、8層、9層がⅤ層に対応すると考える。

南側に位置する調査坑では、北側の調査坑で共通して確認された堆積物の累重が認められなかった。TP 08・09・10・13では粘土の堆積が認められず、淘汰の悪い砂やシルトが厚く堆積している状況が確認できた。また、TP 04・05では南側に急激に傾斜する層の堆積も認められた。この傾斜する層準が北側の調査坑で確認された層準のどこに対応するのかは把握できなかったが、層相からみて3～5層に対応する層準が傾斜していた可能性が高いと考えられる。以上から、南側の調査坑で確認された堆積物は、東西方向にのびていた蛇行していた埋没河道内での堆積が反映されているものと推定できる。河谷内の下部の層準までを検出したわけではないが、少なくともその上部においては泥炭や有機物を含む粘土の堆積は認められなかった。そのため、河谷上部の埋積は、泥炭のような状況で、堆積が一定時間を経て緩やかに進行したのではなく、速やかに進行していたことが想定された。

(c) 遺構と遺物

遺物・遺構は確認されなかった。

(d) 小結

計画調査を実施した結果、遺物・遺構は確認されなかった。本地区より北側や西側でこれまで確認されてきた縄文文化や擦文文化の遺物・遺構のひろがりには及んでいなかった。一方で、計画調査の成果として、本地区内での古地形の状況を把握することができ、本地区を含めた周辺域にどのような地形環境がひろがっていたのかについての知見を得ることができた。本地区の北部には、流路の周辺に堆積した氾濫原の堆積物が確認された。本地区の南側で確認された埋没河道は、これまでの周辺での各種の調査からは確認されてこなかったものである。北側と南側での層準の関係をふまえると、縄文文化後半期には流路が存在していた可能性が高い。この流路は、サクシュコトニ川の支流の一つとして理解できよう。しかし、本地区の周辺にどのように位置していたのかについては依然として不明である。大学病院ゼミナール棟地点（小杉他編 2015）や学生部体育館地点（吉崎編 1988）等の立地との関係も考慮すべき流路であることから、とくに縄文期における人類活動との関連において注目すべきものである。

なお、TP 16 の 8b 層、4b 層で採取した炭化材に対する年代測定の結果、8b 層が縄文文化前半、4b 層が縄文文化後半の時期と位置付けられる年代値が得られた（小杉他編（2023）の表 39）。

3. 中央キャンパス大学病院地区（第2次：北東側）

(a) 調査の概要

令和4年度に調査した本地区は、北海道大学札幌キャンパスの東部に位置する（図 24）。本地区は、小地形面としては沖積低地に立地する。周辺では北側に K 39 遺跡大学病院ゼミナール棟地点、本地区と一部が重複して大学病院雨水排水施設整備地点がある（小杉他編 2015）。大学病院ゼミナール棟地点では、平成 25 年度に実施された本発掘調査によって、縄文前半の後北 B・C1 式期の遺物・遺構が確認されている。大学病院雨水排水整備地点では、平成 25 年度に実施された本発掘調査によって、縄文期およびアイヌ文化期の可能性がある遺構が検出されている。ただし、土器など遺物の出土は確認されていない。時期の推定は、土坑内から採取された炭化物の年代測定結果に依っている。これら二つの地点での調査から、本地区の周辺には縄文文化の人類活動の痕跡が残されていることが予測された。

本地区での計画調査は、予想される遺構・遺物包含層の深度と調査の安全性を考慮し、重機を用いて地表下約 2.0～約 3.0 m の深さまで掘り下げることで実施した。相互に約 10 m の間隔をあけて調査坑 17 基を設置し、埋蔵文化財の有無を確認するための調査を実施した（図 24）。遺物・遺構の包含が予測された層準に関しては、人手によって掘削を進めている。掘削が終了した後は、壁断面を精査し、写真撮影と層序の記載・実測をおこなった後、埋め戻して現状復旧している。調査の結果、いずれの調査坑においても自然堆積層から遺構や遺物は確認されなかった。ただし、近現代の資料が客土から出土した。

本地区での計画調査は、令和4年7月21日付で北海道教育委員会に発掘調査の届出をおこなって実施された。令和4年9月5日～10月14日の期間、153 m²を対象に実施した。

(b) 層序

本地区は豊平川扇状地の北側にひろがる沖積低地に立地している。本地区で確認された表層層序は、基本的に河川の営力によって運ばれてきた堆積物とその土壌化を受けたものから構成されていると考えられる。そうした性質を鑑み、堆積過程とその土壌化の履歴に留意しながら、それぞれの調査坑で層序の区分と記載を実施した（図 25、表 14）。

各調査坑間で堆積物の層序は概ね共通していた。令和4年度調査した本地区内には埋没河道は確認されなかった。令和3年度の調査で確認された南東方向から北西方向にのびていた河谷は令和4年度調査範囲よりも西側に存在していた可能性が想定される。以下では TP 04 北壁を代表させて説明する。

1 層は客土である。2 層は暗赤褐色細粒砂である。3 層はにぶい褐色を呈する極細粒砂質シルトであり、にぶい褐色のラミナを含む。4 層は褐色極細粒砂である。5 層はシルトや粘土をマトリクスとする堆積物であり、色調や含有物、淘汰の違いから、5a 層の赤褐色シルト、5b 層のにぶい褐色粘土、5c 層の灰褐色粘土に細分された。6 層は細粒砂からシルトの粒径を示す堆積物であり、6a 層の灰黄褐色細粒砂、6b 層の灰色シルト、6c 層の灰色極細粒砂、6d 層のにぶい黄褐色細粒砂に区分された。7 層は粘土をマトリクスとする堆積物であり、色調の違いから 7a 層の灰色粘土、7b 層の黒褐色粘土、7c 層の灰色粘土に細分された。暗オリーブ灰色粘土である。7b 層は有機物を多く含む。8 層は粘土をマトリクスとする堆積物であり、色調や含有物の違いから、8a 層の黒褐色粘土、8b 層の暗赤灰色粘土、8c 層の黒褐色粘土に細分された。8a 層は有機物を多く含んでいた。9 層は暗オリーブ色粘土である。

層相の共通性からみて、2～4 層・5 層・6 層・7～9 層という層群に整理することができる。6 層と 7～9 層は、令和3年度調査区（小杉他編 2023）の TP 16 における 6 層と 8～9 層にそれぞれ対比ができる。令和3年度調査区で実施された年

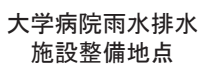


図 24 中央キャンパス大学病院地区（第 2 次：北東側）の調査坑の位置

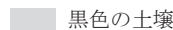


図 25 中央キャンパス大学病院地区（第 2 次：北東側）セクション対比図

表 14 中央キャンパス大学病院地区（第 2 次：北東側）の土層観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP 01 南壁	1						客土.
	2a	7.5 YR 5/8	褐色	極細粒砂	やや弱	やや強	
	2b	7.5 YR 5/6	褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
	3	10 YR 6/1	灰褐色	粘土	強	中	
	4	10 YR 5/4	灰褐色	極細粒砂質シルト	やや強	中	
	5a	7.5 GY 4/1	褐色	極細粒砂	強	弱	黒色の有機物片含む.
	5b	10 GY 4/1	褐色	極細粒砂質シルト	強	弱	
TP 02 北壁	6	10 GY 4/1	灰褐色	粘土	弱	弱	
	1						客土.
	2	7.5 YR 5/6	褐色	極細粒砂質シルト	やや弱	強	
	3	2.5 YR 5/8	赤褐色	中粒砂	弱	強	
	4a	10 Y 5/1	灰色	シルト	中	やや弱	
TP 03 南壁	4b	2.5 Y 5/2	暗灰黄色	極細粒砂質シルト	やや強	弱	
	5	10 YR 6/1	灰色	粘土	強	弱	
	1						客土.
	2	10 R 3/6	暗赤色	中粒砂	弱	中	
	3	7.5 YR 5/6	明褐色	極細粒砂質シルト	強	弱	
TP 04 北壁	4	10 YR 6/8	明黄褐色	極細粒砂	やや強	やや強	
	5a	7.5 YR 5/2	灰褐色	極細粒砂質シルト	やや強	強	
	5b	10 YR 6/4	にぶい黄褐色	粘土	強	弱	
	6	10 BG 4/1	暗青灰色	極細粒砂質シルト	弱	強	
	7	5 GY 4/1	暗オリーブ灰色	粘土	強	弱	
	8a	10 BG 2/1	青黒色	粘土	強	弱	
	8b	10 BG 4/1	暗青灰色	極細粒砂質粘土	強	弱	
	8c	10 BG 2/1	青黒色	粘土	強	弱	
	9	10 BG 4/1	暗青灰色	粘土	強	弱	
	1						客土.
	2	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	やや弱	やや強	
TP 05 北壁	3	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	極細粒砂質シルト	やや強	強	
	4	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	中	やや弱	
	5a	5 YR 4/6	赤褐色	シルト	やや強	やや弱	
	5b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	強	中	
	5c	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	やや弱	
	6a	10 YR 5/2	灰黄褐色	細粒砂	強	弱	
	6b	10 Y 5/1	灰色	シルト	やや強	弱	
	6c	7.5 Y 5/1	灰色	極細粒砂	弱	やや弱	
	6d	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	細粒砂	中	弱	
	7a	7.5 Y 4/1	灰色	粘土	強	中	
	7b	2.5 Y 3/1	黒褐色	粘土	強	中	有機物含む.
	7c	5 Y 4/1	灰色	粘土	強	中	
	8a	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	やや強	有機物含む.
	8b	5 R 3/1	暗赤灰色	粘土	強	やや強	
	8c	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	やや強	
	9	2.5 GY 3/1	暗オリーブ灰色	粘土	やや強	やや強	
	1						客土.
	2	7.5 YR 2/2	黒褐色	シルト	やや弱	やや強	
	3	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	やや弱	
TP 09 北壁	4a	7.5 YR 4/6	褐色	シルト	中	中	
	4b	10 YR 4/6	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	4c	2.5 Y 4/4	オリーブ褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
	5	2.5 Y 4/4	オリーブ褐色	極細粒砂	弱	やや弱	
	6a	2.5 Y 5/4	黄褐色	シルト	やや強	中	
	6b	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	粘土	強	やや強	
	6c	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	中	有機物含む.
	6d	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6e	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	強	
	6f	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	やや強	やや強	
	7	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	やや強	中	
	8	2.5 Y 5/3	黄褐色	粘土	強	やや強	
TP 13 北壁	1						客土.
	2	7.5 YR 3/1	黒褐色	シルト	やや弱	やや強	
	3	7.5 YR 4/4	褐色	細粒砂	弱	弱	
	4	10 YR 4/6	褐色	極細粒砂質シルト	やや強	やや弱	
	5	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	極細粒砂質シルト	やや強	やや弱	
	6a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	6b	2.5 Y 4/2	暗灰黄色	粘土	やや強	中	有機物含む.
TP 17 西壁	6c	2.5 Y 4/6	オリーブ褐色	粘土	強	やや強	
	7	2.5 Y 4/4	オリーブ褐色	極細粒砂質シルト	やや強	中	
	1						客土.
	2	7.5 YR 2/2	黒褐色	シルト	やや弱	やや強	
	3	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	やや弱	
	4a	7.5 YR 4/6	褐色	シルト	中	中	
	4b	10 YR 4/6	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	

代測定の結果に基づき、特徴が粘土をマトリクスとするとできる層群は、続縄文文化の前半期から後半期にかけて堆積していたとみられる。2 層～4 層が標準層序Ⅱ層、5 層以下は標準層序Ⅲ～Ⅴ層に対比できると考える。

(c) 遺構と遺物

遺物・遺構は確認されなかった。

(d) 小結

本地区での計画調査によって続縄文期の遺物・遺構は確認されなかった。本地区と一部が重複する大学病院雨水排水施設整備地点の調査（小杉他編 2015）では、年代測定の結果から続縄文文化およびアイヌ文化期の可能性がある土坑 6 基が発見されている。ただし、当該の調査では、土器や石器など遺物の共伴は確認されておらず、各土坑間での年代測定結果のまとまり（PIT 01 は 535～615AD、PIT 04 は 1,668～1,945AD、PIT 05 は 541～610AD、PIT 06 は 540～610AD）を考慮にいたうえでもなお、帰属時期の推定の妥当性に問題を残していた。

令和 4 年度の本地区の計画調査では、大学病院雨水排水施設整備地点に隣接する箇所を調査することになった。しかし、当該遺構と同時期と推定できる遺構や遺物は確認されなかった。そのことから、同地点での遺構の性格を検証できるようなデータを得ることはできず、課題が残された。

令和 3 年度の調査で確認された河谷は、本地区の調査範囲よりも西側にのびていたのであろうと想定される。今後、周辺での調査の実施を通して、その河谷の確認に注視し、河谷の位置、規模などの特徴を把握していくことが必要である。

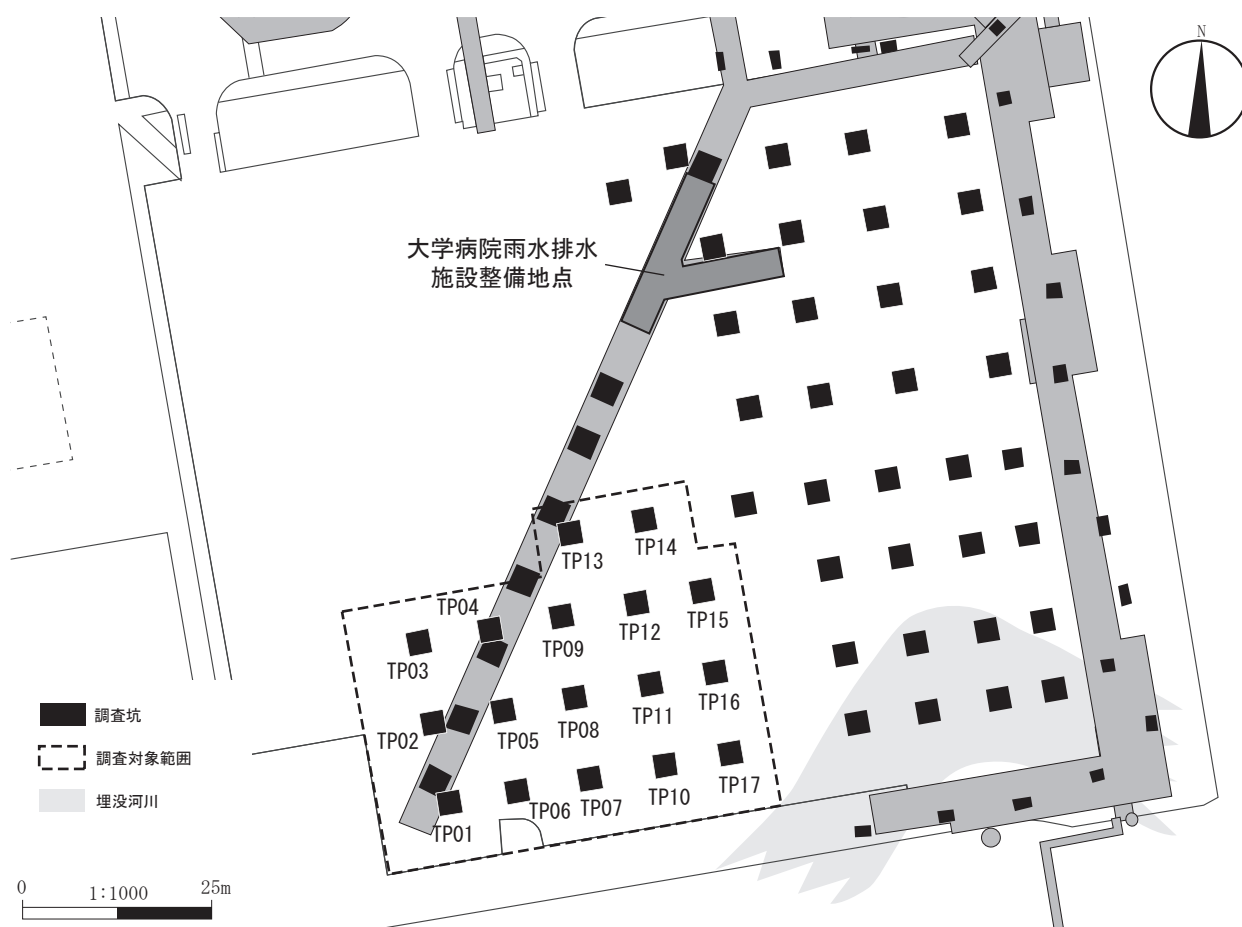


図 26 中央キャンパス大学病院地区（第3次：南西側）の調査坑の位置

4. 中央キャンパス大学病院地区（第3次：南西側）

(a) 調査の概要

令和5年度に調査した本地区は、北海道大学札幌キャンパスの東部に位置する（図26）。本地区は、小地形面としては沖積低地に立地する。周辺では北側にK39遺跡大学病院ゼミナール棟地点（小杉他編2015）、北西側に一部範囲が重複して大学病院雨水排水施設整備地点がある（小杉他編2015）。大学病院ゼミナール棟地点では、平成25年度に実施された本発掘調査によって、縄文文化前半の後北・C1式期の遺物・遺構が確認されている。大学病院雨水排水整備地点では、平成25年度に実施された本発掘調査によって、縄文文化の可能性のある遺構が確認された。これら二つの地点での調査から、本地区の周辺には縄文文化の人類活動の痕跡が残されていることが予測された。

本地区での計画調査は、予想される遺構・遺物包含層の深度と調査の安全性を考慮し、重機を用いて地表下約2.0～約3.0mの深さまで掘り下げることで実施した。相互に約10mの間隔をあけて17の調査坑を設置し、埋蔵文化財の有無を確認するための調査を実施した（図26）。遺物・遺構の包含が予測された層準に関しては、人手によって掘削を進めている。掘削が終了した後は、壁断面を精査し、写真撮影と層序の記載・実測をおこなった後に埋め戻して現状復旧している。併せて、TP09で確認された層に対する年代測定を実施した。

調査の結果、いずれの調査坑においても自然堆積層から遺構や遺物は確認されなかった。ただし、放棄もしくは遺棄された近現代の資料が客土から発見された。本地区での計画調査は、令和5年7月4日付で北海道教育委員会に発掘調査の届出をおこなって実施した。令和5年8月28日～10月6日の期間、153m²が対象とされた。

(b) 層序

本地区は、豊平川扇状地の北側にひろがる沖積低地に立地している。本地点で確認された表層層序は、基本的に河川の営力

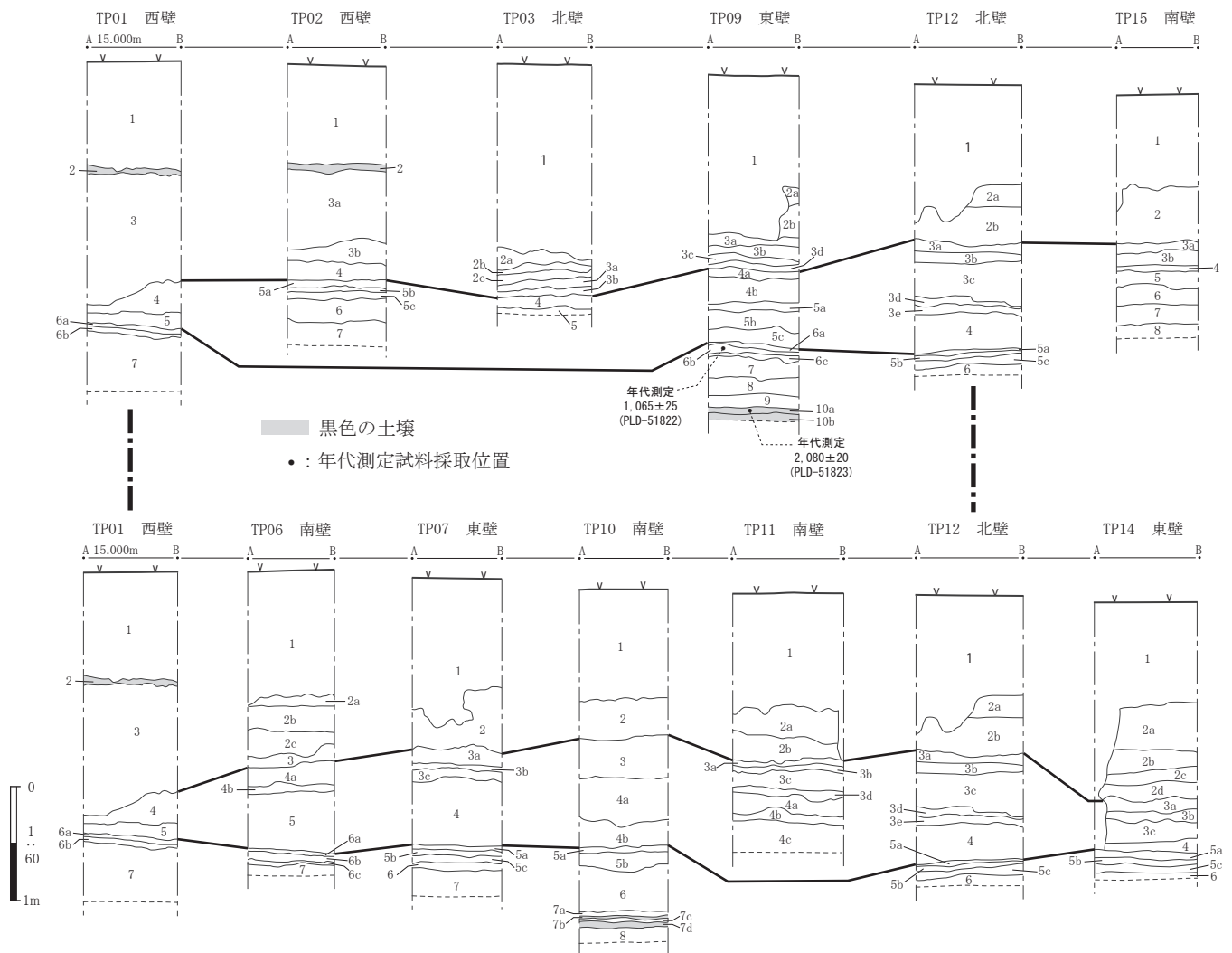


図 27 中央キャンパス大学病院地区（第 3 次：南西側）セクション対比図

によって運ばれてきた堆積物とその土壌化を受けたものから構成されていると考えられる。そうした性質を鑑み、堆積過程とその土壌化の履歴に留意しながら、それぞれの調査坑で層序の区分と記載を実施した（図 27、表 15）。各調査坑間での堆積物の層序は概ね共通していた。以下では TP 09 東壁を代表させて説明する。

1 層は客土である。2 層は極細粒から細粒の砂をマトリクスとする堆積物である。2a 層と 2b 層に細分された。2a 層は褐色極細粒砂である。2b 層は暗赤褐色細粒砂である。3 層は極細粒砂から極細粒砂質シルトをマトリクスとする堆積物である。3a～3d 層に細分された。細分層の層厚の変化は著しく、安定した堆積層準とは言い難い。3a 層は褐色極細粒砂である。3b 層は黄褐色極細粒砂質シルトである。3c 層は明褐色シルト質極細粒砂である。3d 層は赤褐色極細粒砂である。4 層は砂質シルトから粘土をマトリクスとする堆積物である。4a 層と 4b 層に細分された。4a 層は明褐色極細粒砂質シルト、4b 層は黄褐色粘土である。他の調査坑でも確認できる層準であり、対比の指標になりうる。5 層は極細粒砂から細粒砂をマトリクスとする堆積物である。5a～5c 層に細分された。層相は漸移的に変化している。5a 層はにぶい褐色細粒砂である。5b 層はにぶい褐色極細粒砂である。5c 層はにぶい褐色極細粒～細粒砂である。淘汰がやや悪い。6 層は粘土をマトリクスとする堆積物である。色調や含有物の違いにもとづき 6a～6c 層に細分された。6a 層はにぶい黄褐色粘土である。6b 層は灰褐色粘土である。有機物を多く含んでいた。6c 層はにぶい黄褐色粘土である。7 層は暗緑灰色極細粒砂である。8 層はオリーブ灰色極細粒砂質シルトである。9 層は暗オリーブ灰色シルトである。10 層は粘土をマトリクスとする堆積物であり、10a 層と 10b 層に細分され

表 15 中央キャンパス大学病院地区（第3次：南西側）の土層観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP 01	1						客土.
西壁	2	7.5 YR 2/2	黒褐色	シルト	やや弱	中	
	3	2.5 Y 4/6	オリーブ褐色	極細粒～細粒砂	弱	やや弱	
	4	10 YR 5/6	黄褐色	粘土質シルト	強	中	
	5	7.5 YR 5/6	明褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	6a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6b	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	やや強	中	有機物やや多量に含む.
	7	5 YR 4/6	赤褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
TP 02	1						客土.
西壁	2	7.5 YR 3/2	黒褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	3a	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒～細粒砂	弱	やや弱	
	3b	5 YR 4/4	にぶい赤褐色	中粒砂	弱	弱	
	4	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	中	やや弱	
	5a	10 YR 5/6	黄褐色	粘土	やや強	中	
	5b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	やや強	中	径5～6mmの有機物含む.
	5c	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土	強	やや強	
	6	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	シルト	中	中	
	7	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	やや弱	弱	
TP 03	1						客土.
北壁	2a	7.5 YR 4/6	褐色	細粒砂	やや弱	やや弱	
	2b	7.5 YR 5/6	明褐色	シルト	中	中	
	2c	10 YR 4/6	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	3a	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
	3b	5 YR 4/8	赤褐色	極細粒砂	やや弱	弱	
	4	2.5 Y 5/6	黄褐色	シルト質粘土	やや強	やや強	
	5	5 Y 5/6	オリーブ色	粘土	強	中	
TP 06	1						客土.
南壁	2a	5 YR 3/6	暗赤褐色	極細粒砂	やや弱	中	
	2b	7.5 YR 4/6	褐色	細粒砂	弱	やや弱	
	2c	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒～中粒砂	弱	弱	
	3	7.5 YR 4/4	褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	やや弱	
	4a	10 YR 5/6	黄褐色	シルト	やや強	中	
	4b	2.5 Y 5/4	黄褐色	粘土	やや強	やや強	
	5	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	極細粒砂	弱	やや弱	
	6a	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト	中	中	
	6b	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	中	有機物含む.
	6c	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	極細粒砂	やや強	中	
	7	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
TP 07	1						客土.
東壁	2	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒～中粒砂	弱	弱	
	3a	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂質シルト	やや強	中	
	3b	5 YR 4/8	赤褐色	シルト質極細粒砂	中	中	
	3c	10 YR 5/6	黄褐色	粘土質シルト	強	やや強	
	4	5 YR 4/8	赤褐色	極細粒～細粒砂	やや弱	やや弱	
	5a	7.5 YR 5/6	明褐色	粘土	強	やや強	
	5b	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	やや強	やや強	有機物含む.
	5c	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト質極細粒砂	中	やや弱	
	7	7.5 YR 5/6	明褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
TP 09	1						客土.
東壁	2a	10 YR 4/4	褐色	極細粒砂	やや弱	中	
	2b	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	やや弱	
	3a	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	中	やや弱	
	3b	10 YR 5/6	黄褐色	極細粒砂質シルト	やや強	中	
	3c	7.5 YR 5/6	明褐色	シルト質極細粒砂	中	中	
	3d	5 YR 4/6	赤褐色	極細粒砂	やや弱	弱	
	4a	7.5 YR 5/6	明褐色	極細粒砂質シルト	強	中	
	4b	2.5 Y 5/4	黄褐色	粘土	強	やや強	
	5a	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	細粒砂	強	中	
	5b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	極細粒砂	強	中	
	5c	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	極細粒～細粒砂	やや強	やや弱	
	6a	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土	強	中	
	6b	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	やや強	有機物含む.
	6c	7.5 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土	強	中	
	7	10G Y 4/1	暗緑灰色	極細粒砂	強	やや強	
	8	5G Y 5/1	オリーブ灰色	極細粒砂質シルト	やや強	中	
	9	2.5 GY 4/1	暗オリーブ灰色	シルト	中	中	
	10a	5 GY 2/1	オリーブ黒色	粘土	強	やや強	有機物含む.
	10b	5G2/1	緑黒色	粘土	やや強	中	
遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP 10	1						客土.
南壁	2	5 YR 3/6	暗赤褐色	極細粒～細粒砂	やや弱	やや弱	
	3	10 YR 5/6	黄褐色	シルト	やや強	中	
	4a	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	中	やや弱	
	4b	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	やや弱	弱	
	5a	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	中	有機物含む.
	5b	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	極細粒砂	中	やや弱	
	7a	2.5 Y 6/4	にぶい黄色	粘土	強	やや強	
	7b	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	中	有機物含む.
	7c	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	中	
	7d	10 YR 3/1	黒褐色	粘土	強	やや強	有機物含む.
	8	7.5 YR 4/1	褐灰色	粘土	強	やや強	
TP 11	1						客土.
南壁	2a	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	中	やや弱	
	2b	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	3a	7.5 YR 4/6	褐色	シルト	やや強	やや強	
	3b	10 YR 4/3	にぶい黄褐色	シルト	やや強	中	
	3c	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや強	やや強	
	3d	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂質シルト	中	やや強	
	4a	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	極細粒砂	やや強	中	
	4b	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	シルト質極細粒砂	強	中	
	4c	2.5 Y 5/3	黄褐色	極細粒砂	弱	やや弱	
TP 12	1						客土.
北壁	2a	2.5 Y 3/3	暗オリーブ褐色	細粒砂	弱	弱	
	2b	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	3a	7.5 YR 5/6	明褐色	シルト	中	中	
	3b	7.5 YR 4/4	褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	やや弱	
	3c	5 YR 4/6	赤褐色	シルト	中	やや弱	
	3d	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	やや強	やや弱	
	3e	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂質シルト	中	やや弱	
	4	2.5 Y 4/3	オリーブ褐色	極細粒砂	弱	弱	
	5a	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土	強	中	
	5b	7.5 YR 4/3	褐色	粘土	強	中	有機物含む.
	5c	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土	やや強	中	
	6	10 Y 4/1	灰色	極細粒砂	弱	弱	
TP 14	1						客土.
東壁	2a	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	2b	7.5 YR 4/6	褐色	シルト質極細粒砂	中	やや弱	
	2c	7.5 YR 5/8	明褐色	極細粒～細粒砂	やや弱	やや弱	
	2d	2.5 Y 5/4	黄褐色	シルト質極細粒砂	中	中	
	3a	10 YR 6/3	にぶい黄橙色	粘土	強	中	
	3b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト質極細粒砂	弱	やや弱	
	3c	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土質シルト	強	やや弱	
	4	5 YR 4/4	にぶい赤褐色	極細粒砂	弱	弱	
	5a	2.5 YR 4/4	オリーブ褐色	シルト	中	中	
	5b	7.5 YR 4/2	灰褐色	粘土	強	やや強	有機物含む.
	5c	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	中	
	6	7.5 YR 5/6	明褐色	シルト	やや強	やや弱	
TP 15	1						客土.
南壁	2	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	3a	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト質粘土	やや強	中	
	3b	10 YR 5/6	黄褐色	粘土	強	やや強	
	4	7.5 YR 4/6	褐色	シルト	中	やや弱	
	5	7.5 YR 5/6	明褐色	粘土	やや強	中	
	6	5 YR 3/4	暗赤褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	7	5 YR 4/6	赤褐色	シルト	中	中	
	8	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	弱	やや弱	

た。10a 層はオリーブ黒色粘土であり、10b 層は緑黒色粘土である。10a 層には有機物が多く含まれていた。2 層～6 層は標準層序Ⅱ層、7 層以下は標準層序Ⅲ層～Ⅴ層に対応すると土性から推測した。

層相の共通性からみて、2～3 層・4 層・5 層・6 層・7～8 層・9～10 層という層群に整理することができる。6 層と 9～10 層は、令和 3 年度調査区（小杉他編 2023）の TP 16 における 6 層と 8～9 層にそれぞれ対比ができる。令和 3 年度調査区で実施された年代測定の結果もふまえると、こうした粘土をマトリクスとする層群は、縄文文化の前半期から後半期にかけて堆積していたとみられる。本地区の TP 09 でも 6b 層と 10a 層からそれぞれ年代測定用のサンプルを採取し、年代測定の実施によってこの対比の検証をおこなった（高倉他編 2025 の表 7 で記載）。その結果、TP 09 の 6b 層で採取した炭化材試料で、紀元残約 1 世紀から紀元前約 2 世紀の年代値、TP 09 の 10a 層の炭化材試料で、紀元前約 1 世紀から紀元前約 2 世紀の年代値が得られた。

(c) 遺構と遺物

遺物・遺構は確認されなかった。

(d) 小結

各調査坑で共通した層序が確認されたことから、本年度の調査範囲対象内では古地形に変化は認められず、若干の起伏はあるものの、平坦な地形が少なくとも縄文文化晩期以降、継続していたことがわかった。令和 3 年度に計画調査を実施した際に、TP 04・05・08・09・10・13 では、淘汰の悪い砂を中心とする堆積物が確認され、それ以外の調査坑で確認された粘土やシルトは認められなかったため、東西方向の埋没河道の存在が把握された。本地区内では、それに対応する堆積物はいずれの調査坑でも確認されてはおらず、そのためその埋没河道は南西方向に屈曲してむかっていたと考えられる。

2 点の試料（試料 01、試料 02 と呼称）によって年代測定を実施した結果、縄文文化前半期が示された（高倉他編 2025 の表 7 で記載）。試料を採取した層の上下関係と測定値の前後関係は矛盾していない。しかし、両測定値は近接した値を示している点がみられる。上述報告書の表 7 では、試料 No.1 の炭素含有率は 6.1%，試料 No.2 は 21.35%であった。前者に関しては試料の状態が良好ではなかった可能性がある。令和 3 年度調査区（小杉他編 2023）の TP 16 では 2σ の較正年代で 8b 層の試料 No.1（PLD-44648）は、55cal BC-27cal AD（87.95%）および 95-73cal BC（5.63%）、47-57cal AD（1.86%）の年代を示した。試料 No.2（PLD-44649）は、55cal BC-27cal AD（87.95%）および 95-73cal BC（5.63%）、47-57cal AD（1.86%）の年代を示した。今回の TP 09 での試料 No.1 とほぼ同じ年代を示しており、今回の TP 09 での 9～10 層は、令和 3 年度調査区 TP 16 の 8～9 層に対応するという所見とは矛盾しない。

本地区の周辺の地点で確認されている縄文文化の遺物・遺構は、本地区内では確認されなかった。令和 3 年度の調査で確認された河谷は、本地区には及んでいないことが判明した。本年度調査範囲よりも南側にそれがのびている可能性がある。その位置を確認していくことが今後の周辺での調査課題となろう。

5. 中央キャンパス大学病院地区（第 4 次：北西側）

(a) 調査の概要

令和 6 年に調査した本地区は、北海道大学札幌キャンパスの東部に位置する（図 28）。本地区は、小地形面としては沖積低地に立地する。周辺では北側に K 39 遺跡大学病院ゼミナール棟地点（小杉他編 2015）、北西側に一部範囲が重複して大学病院雨水排水施設整備地点がある（小杉他編 2015）。大学病院ゼミナール棟地点では、平成 25 年度に実施された本発掘調査によって、縄文文化前半の後北 B・C1 式期の遺物・遺構が確認されている。大学病院雨水排水整備地点では、平成 25 年度に実施された本発掘調査によって、縄文期の可能性がある遺構が検出されている。本地点の西側には、擦文文化前期の末期古墳が検出された医学部陽子線研究施設地点がある（小杉他編 2013）。これら周辺地点での過去の調査から、本地区には縄文文化から擦文文化にかけての人類活動の痕跡が残されていることが予測された。

本計画調査は、予想される遺構・遺物包含層の深度と調査の安全性を考慮し、重機を用いて地表下約 2.0 m～約 3.0 m の深さまで掘り下げることによって実施した。相互に約 10 m の間隔をあけて調査坑 17 基を設置し、埋蔵文化財の有無を確認するための調査を実施した（図 28）。遺物・遺構の包含が予測された層準に関しては、人手によって掘削を進めている。掘削が終了した後は、壁断面を精査し、写真撮影と層序の記載・実測をおこなった後に埋め戻して現状復旧している。

本計画調査は、令和 6 年 4 月 30 日付で北海道教育委員会に発掘調査の届出をおこなって実施された。令和 6 年 6 月 10 日～8 月 15 日の期間、153 m² を対象とした。

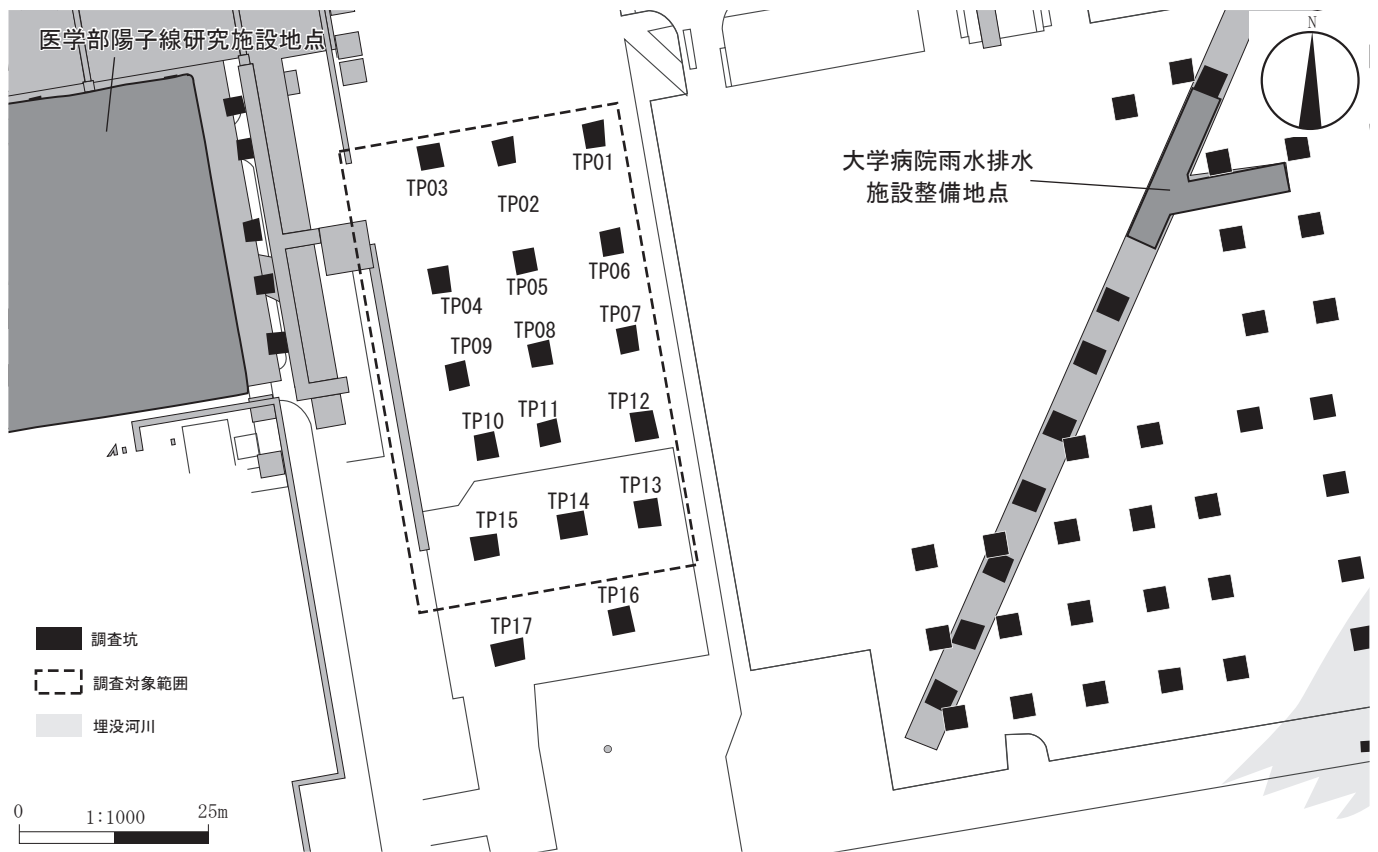


図28 中央キャンパス大学病院地区（第4次：北西側）の調査坑の位置

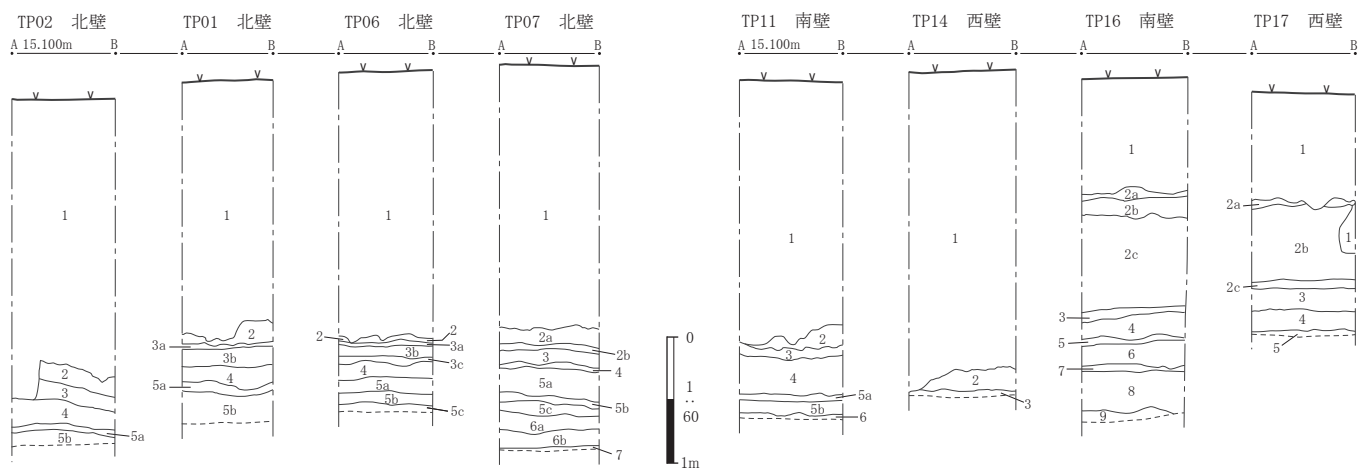


図29 中央キャンパス大学病院地区（第4次：北西側）セクション対比図

表 16 中央キャンパス大学病院地区（第 4 次：北西側）の土層観察表

遺構名	層名	色相	土色	土性	粘性	しまり	備考
TP 01	1						客土.
北壁	2	5 YR 4/4	にぶい赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	3a	7.5 YR 4/4	褐色	シルト質極細粒砂	中	中	
	3b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	シルト	やや強	中	下部に有機物を微量含む.
	4	5 Y 5/2	灰オリーブ色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	5a	2.5 Y 5/2	暗灰黄色	粘土	やや強	中	有機物をやや微量含む.
	5b	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	粘土	強	中	
TP 02	1						客土.
北壁	2	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	極細粒	弱	やや弱	
	3	7.5 YR 5/6	明褐色	シルト	やや強	中	
	4	2.5 Y 4/1	黄灰色	極細粒～細粒砂	弱	やや弱	
	5a	7.5 Y 5/3	にぶい褐色	粘土	やや強	中	有機物をやや微量含む.
	5b	10 YR 6/4	にぶい黄橙色	粘土	やや強	やや強	
TP 06	1						客土.
北壁	2	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	やや弱	中	
	3a	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
	3b	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや強	やや強	
	3c	10 YR 5/8	黄褐色	極細粒砂質シルト	中	中	
	4	2.5 Y 4/4	オリーブ褐色	極細粒砂	弱	弱	
	5a	10 YR 4/2	灰黄褐色	粘土	強	やや強	有機物含む.
	5b	10 YR 5/6	黄褐色	シルト質粘土	やや強	やや強	
	5c	7.5 YR 5/6	明褐色	シルト	やや強	中	
TP 07	1						客土.
北壁	2a	5 YR 3/6	暗赤褐色	極細粒砂	弱	やや弱	
	2b	10 YR 4/6	褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	やや弱	
	3	10 YR 5/2	灰黄褐色	シルト	やや強	中	
	4	2.5 Y 5/3	黄褐色	極細粒砂	弱	弱	
	5a	7.5 YR 5/4	にぶい褐色	粘土	強	中	
	5b	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト	中	中	
	5c	10 YR 5/3	にぶい黄褐色	粘土	やや強	中	
	6a	2.5 Y 5/3	黄褐色	シルト	中	中	
	6b	2.5 Y 6/3	にぶい黄色	シルト質粘土	やや強	やや強	
	7	2.5 Y 4/1	黄灰色	粘土	やや強	中	有機物含む.
TP 11	1						客土.
南壁	2	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	弱	弱	
	3	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト	やや強	中	
	4	2.5 Y 5/3	黄褐色	極細粒～細粒砂	弱	弱	
	5a	10 YR 5/2	灰黄褐色	粘土	強	中	
	5b	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	強	やや強	
	6	7.5 Y 5/1	灰色	シルト	中	やや強	
TP 14	1						客土.
西壁	2	5 YR 4/8	赤褐色	極細粒～細粒砂	やや弱	やや弱	
	3	7.5 YR 5/3	にぶい褐色	粘土	やや強	中	木材の周縁部が炭化していたものが遺存していた.
TP 16	1						客土.
南壁	2a	10 YR 2/2	黒褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	2b	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	2c	7.5 YR 4/4	褐色	極細粒砂	やや弱	やや弱	
	3	5 Y 5/3	灰オリーブ色	シルト質極細粒砂	やや弱	弱	
	4	10 YR 4/6	褐色	シルト	中	中	
	5	5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	6	7.5 YR 5/6	明褐色	極細粒砂質シルト	やや強	中	
	7	2.5 YR 3/6	暗赤褐色	細粒砂	弱	弱	
	8	10 YR 6/3	にぶい黄橙色	粘土	強	中	
	9	5G Y 4/1	暗オリーブ灰色	シルト	強	やや強	有機物含む.
TP 17	1						客土.
西壁	2a	7.5 YR 3/3	暗褐色	シルト	弱	やや弱	
	2b	5 YR 3/6	暗赤褐色	極細粒砂	弱	弱	
	2c	7.5 YR 4/6	褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	弱	
	3	10 YR 4/4	褐色	シルト質極細粒砂	やや弱	やや弱	
	4	10 YR 5/4	にぶい黄褐色	シルト	中	やや弱	
	5	7.5 YR 4/6	褐色	極細粒砂	弱	弱	

(b) 層序

令和 6 年度の調査範囲は、かつて病棟があった箇所に相当する。TP 07・16・17 を除いたそれ以外の調査坑では、地表下約 2.0～2.3 m の深さまで客土となっており、自然堆積層の残りは令和 3～5 年度の調査区とは異なって良好ではなかった。調査坑間の層序の対比を可能とする鍵層の把握ができなかったため、各調査坑間での層序の対応関係を十分に把握するにはいたっていない。以下では TP 07 北壁を代表させて説明する（図 29、表 16）。

1 層は客土である。2 層は極細粒砂をマトリクスとする堆積物である。2a 層・2b 層に細分された。2a 層は暗赤褐色極細粒砂である。2b 層は褐色シルト質極細粒砂である。3 層は灰褐色のシルトである。4 層は黄褐色極細粒砂である。5 層はシルトや粘土をマトリクスとする堆積物であり、5a・5b・5c 層に細分された。5a 層はにぶい褐色粘土、5b 層はにぶい黄褐色シルト、5c 層はにぶい黄褐色粘土である。6 層はシルトや粘土をマトリクスとする堆積物であり、6a 層は黄褐色シルト、6b 層はにぶい黄褐色シルト質粘土であった。7 層は黄灰色粘土であり、有機物を多く含んでいる。

TP 01 の 5a 層、TP 02 の 5a 層、TP 04 の 3a 層、TP 05 の 5a 層、TP 06 の 5a 層、TP 07 の 5a 層、TP 09 の 4a 層、TP 10 の 4 層、TP 11 の 5a 層、TP 16 の 8 層は、主に灰黄褐色を呈する粘土で有機物を含む場合が認められるという点で、相互に対比できる層準である可能性はあるものの、当該層準が確認できなかった試掘坑もあった。そのため、標準層序との対比が十分に検討できなかった。

(c) 遺構と遺物

遺物・遺構は確認されなかった。

(d) 小結

本予定地の周辺の地点で確認されている続縄文文化や擦文文化の遺物・遺構は、本地区内では確認されなかった。令和 3 年度の地区の調査で確認された河谷は、本地区には及んではないことが判明した。本地区の調査範囲よりも南側にそれがのびている可能性があり、その位置を確認していくことが今後の周辺での調査課題となろう。

3-5 第二次中期計画期間における計画調査の成果と課題

第二次中期計画期間では、北キャンパス創成科学研究棟東地区、中央キャンパス大学病院地区（第1次～第4次）において計画調査が実施された。第二次中期計画に取り組むにあたって、検討課題として掲げた3項目に沿って、どのような成果が得られ、いかなる課題が残されているのかについてまとめていきたい。

①サクシュコトニ川・セロンベツ川ならびにその支流の流路を把握し、流路において進行した下刻や堆積の時期・過程を解明するという課題に関しては、中央キャンパス大学病院地区（第1次）の調査で、埋没河道内での堆積が反映された地層がとらえられた成果がある。中央キャンパス大学病院地区（第1次～第4次）の調査範囲において、当該の埋没河道は南東側から南西側に蛇行していたと推測されるとともに、砂層で埋まってしまった時期が層序の特徴、放射性炭素年代測定結果の検討から、ほぼ縄文文化後半ととらえられた。同様な堆積状態は平成19年度に発掘調査を実施した薬学部研究棟地点でとらえられている（小杉他編2009の図16）。粗砂層の堆積で埋まってしまった埋没河道があり、埋没河道の最上位層で縄文文化後半の土器が発見された。縄文文化後半までに埋まってしまった河谷が、今後、薬学部周辺で複数確認される可能性がある。

②サクシュコトニ川・セロンベツ川ならびにその支流の流路とその周囲における遺構・遺物の分布範囲や地点の集中区域を把握するという課題に関しては、Bゾーン（図17）における遺構・遺物の密度の低さがとらえられた。北キャンパス創成科学研究棟東地区では、サクシュコトニ川の支流と考えられる埋没河道が確認されず、当該地区周辺で確認されていた縄文文化および擦文文化の遺構・遺物は発見されなかった。当該地区より西側もしくは南側にはAゾーンにある。Aゾーンと北キャンパス創成科学研究棟東地区との間で遺構・遺物包含層が確認される可能性がある。

併せて、中央キャンパス大学病院地区では、上述のように、縄文文化後半以前に砂層で埋まってしまった埋没河道がとらえられた。サクシュコトニ川の支流である可能性がある。その一方で、中央キャンパス大学病院地区では、縄文文化前半の大学病院ゼミナール棟地点（小杉他編2015）の遺構・遺物包含層が本地区に広がっていないこと、擦文文化の医学部陽子線研究施設地点（小杉他編2013）、薬学部研究棟地点（小杉他編2009）の遺構・遺物が広がっていないことを確認した。中央キャンパス大学病院地区がBゾーン（図17）に位置するためと推測する。

③今後蓄積されていく各種の考古・古環境データを有機的に統合させていくための時間的枠組みとして、キャンパス各区域間での層序対比を体系的に実施するという課題に関しては、構内地下の堆積層を体表する標準層序（吉崎編1995）と関わり、以下のような知見が得られた。第一に、北キャンパス創成科学研究棟東地区、中央キャンパス大学病院地区では、地表下約1m～約1.5mの深さで、氾濫原堆積物と考えられる砂層（標準層序Ⅱ層に対比）がともにみられたことである。構内の遺跡では、標準層序Ⅱ層に対比できる氾濫原堆積物が縄文文化後半以降に安定的に供給されていた可能性がある。

第二に、北キャンパス創成科学研究棟東地区、中央キャンパス大学病院地区では、氾濫原堆積物の砂層以下で確認された地層と標準層序（吉崎編1995）との対比が難しかった。特に、中央キャンパス大学病院地区を取り上げると、標準層序が設定されたゲストハウス地点が比較的近く（南西約300mの位置）にあることから、当該地区では、標準層序と類似した堆積層および層序が確認できると考えていた。しかし、当該地区の調査では堆積層の様相が標準層序と異なる部分が多かった。

異なる部分が多かった理由として、サクシュコトニ川の左岸と右岸とで堆積層および堆積層序が異なる可能性、中央キャンパス大学病院地区でとらえられた埋没河道および、そこでみられた傾斜堆積に基づく、縄文文化後半以前に存在した流路によって標準層序Ⅲ層およびⅣ層が侵食されてしまった可能性があげられる。

中央キャンパス大学病院地区（第4次）の調査範囲では、地表下約2mの深さまで近代の建物建築による造成が及んでいたため、標準層序との対比ができなかったともいえる。

第二次中期計画期間に実施した計画調査によって、縄文文化後半以降の旧地形で堆積した地層が広域で対比できる可能性が見通せた一方で、縄文文化後半以前の旧地形は、今回の地区では一部しかとらえられず、今後の調査の課題として残った。

（守屋）

引用文献

- 小杉 康編 2002 北大構内の遺跡Ⅻ. 北海道大学.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2004 K 39 遺跡人文・社会科学
総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅰ（遺物・遺構編）. 北海道
大学.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2005 K 39 遺跡人文・社会科学
総合教育研究棟地点発掘調査報告書Ⅱ（自然科学分析および出
土遺物・遺構考察編）. 北海道大学.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2006 北大構内の遺跡ⅩⅣ. 北海
道大学埋蔵文化財調査室.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2008 北大構内の遺跡ⅩⅤ. 北海
道大学埋蔵文化財調査室.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2009 北大構内の遺跡ⅩⅥ. 北海
道大学埋蔵文化財調査室.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2021 北大構内の遺跡ⅩⅧ. 北
海道大学埋蔵文化財調査センター.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2022 北大構内の遺跡ⅩⅧ. 北
海道大学埋蔵文化財調査センター.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人編 2023 北大構内の遺跡ⅩⅧ. 北
海道大学埋蔵文化財調査センター.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人・荒山千恵編 2011 北大構内の遺
跡ⅩⅧ. 北海道大学埋蔵文化財調査室.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人・坂口 隆編 2013 北大構内の遺
跡ⅩⅧ. 北海道大学埋蔵文化財調査室.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人・坂口 隆・遠部 慎・本山志郎編
2015 北大構内の遺跡ⅩⅧ. 北海道大学埋蔵文化財調査セン
ター.
- 小杉 康・高倉 純・守屋豊人・坂口 隆・本山志郎編 2016 北
大構内の遺跡ⅩⅧ. 北海道大学埋蔵文化財調査センター.
- 嵯峨山積・五十嵐八枝子・近藤 努・鎌田耕太郎・吉田充夫・地徳
力・外崎徳二・工藤千春・岡村 聡・加藤誠 2007 札幌市街域
における 150 m 掘削コアの第四系層序 地質学雑誌 113. pp.
391-405.
- 高倉 純・守屋豊人編 2025 北大構内の遺跡 31. 北海道大学埋
蔵文化財調査センター.
- 大丸裕武 1989 完新世における豊平川扇状地とその下流氾濫原
の形成過程. 地理学評論. 62. pp.589-603.
- 吉崎昌一編 1990 北大構内の遺跡 8. 北海道大学.
- 吉崎昌一編 1995 北大構内の遺跡 10. 北海道大学.
- 吉崎昌一・岡田淳子編 1988 北大構内の遺跡 6. 北海道大学.

報告書抄録

ふりがな	ほくだいこうないのいせき さんじゅうに							
しょめい 書名	北大構内の遺跡 32							
ふくしょめい 副書名								
かんじ 巻次								
シリーズ名	北大構内の遺跡							
シリーズ号	32							
へんちよしゃめい 編著者名	守屋豊人・許 開軒							
へんしゅうきかん 編集機関	北海道大学埋蔵文化財調査センター							
しょうち 所在地	〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目 TEL.011-706-2671 FAX.011-706-2094							
はつこうねんがつび 発行年月日	2026年 3 月31日							
しょうしゅういせきめい 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
けいさんじゅうくいせき K 3 9 遺跡	札幌市北区	1101	39					
ちゅうおう 中央キャンパス大学病院 ちく 地区				43度04分 34秒	141度20分 44秒	20240610～ 20240815	153	学術調査

北大構内の遺跡 32

令和 8（2026）年 3 月 31 日発行

発行 北海道大学埋蔵文化財調査センター
札幌市北区北 11 条西 7 丁目

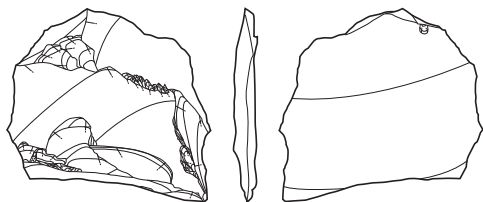
編集 守屋豊人・許 開軒

印刷 株式会社アイワード
札幌市中央区北 3 条東 5 丁目 5 番地 91

HOKKAIDO UNIVERSITY

CAMPUS SITES

32



Archaeology Research Center,
Hokkaido University
March, 2026